鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（102）

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（IX）

中ノ原遺跡
中ノ丸遺跡

（鹿屋市大浦町）

2006年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，一般国道220号鹿屋バイパス改築工事に伴って，鹿屋市大浦町に所在する中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡の北側延長部分について平成16年度に実施した発掘調査の記録です。

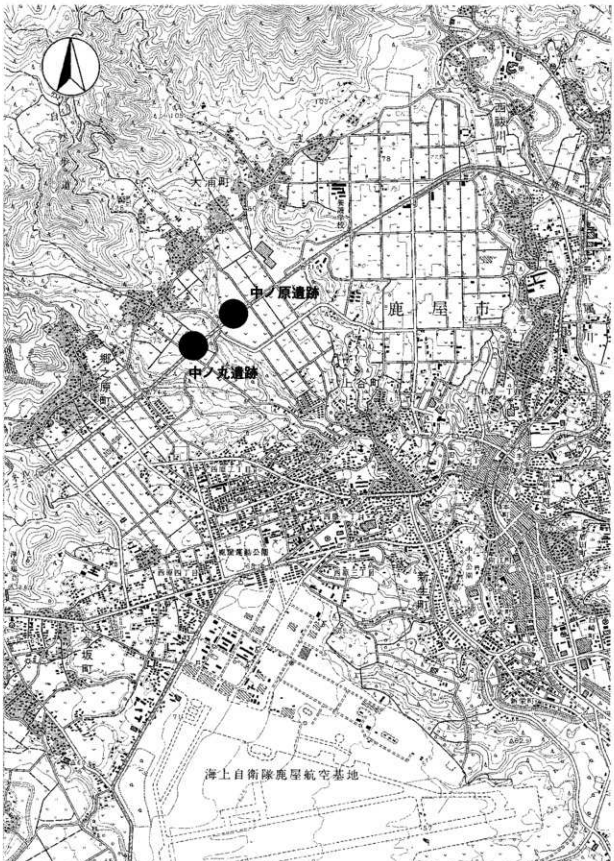
両遺跡では，前回の調査と同様に，縄文時代，弥生時代を中心に地域的特色を示す遺構や遺物が発見されました。これらの資料は，大隅地方に住んだ先人たちの，生活の一端を明らかにする貴重な手掛かりを提供するものと考えています。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた国土交通省大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　上今常雄



第1図　遺跡位置図（2万5千分の1）

報告書抄録

ふりがな	なかのはらいせき
書名	中ノ原遺跡
副書名	一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅸ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	102
編集者名	高岡和也・立神次郎
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡ 0995－48－5811
発行年月日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかのはらいせき 中ノ原遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 おおうらちょう 大浦町	462039	12−125−0	31° 23′ 46″	130° 49′ 42″	2004. 7.11 〜 2004.12.24	1,560	一般国道220号鹿屋バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中ノ原遺跡	散布地	縄文時代後期	竪穴住居跡　1軒	市来式土器・丸尾式土器・ 納曽式土器・西平式土器 石鏃・石斧・磨石・石皿・ 砥石	平成 61. 6〜7 平成 61.10〜62.1 県教委区委員会による発掘調査実施
		縄文時代後期	焼土跡　1基		
		弥生時代		山ノ口式土器	
		古代以降	古道	土師器	パンケース35箱

標高70mのシラス台地南西端にあり，中ノ丸遺跡と向かい合う台地に位置している。バイパス建設工事に伴い1985年から1998年にかけて県教育委員会が発掘調査を実施し，今年度はバイパス予定地未調査部分の発掘調査を行った。縄文時代，弥生時代，中世から近世の複合遺跡である。縄文時代後期の遺物が多種出土した。また縄文時代後期の竪穴住居跡1軒も検出された。丸尾式・納曽式・西平式土器の編年を考える上で注目される土器群である。

報告書抄録

ふりがな	なかのまるいせき
書名	中ノ丸遺跡
副書名	一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅸ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	102
編集者名	高岡和也・立神次郎
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡ 0995－48－5811
発行年月日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中ノ丸遺跡 （なかのまるいせき）	鹿児島県 （かごしまけん） 鹿屋市 （かのやし） 大浦町 （おおうらちょう）	462039	12－127－0	31° 23′ 39″	130° 49′ 34″	2004. 7.11 ～ 2004.12.24	980	一般国道220号鹿屋バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中ノ丸遺跡	散布地	縄文時代早期	集石　３基	平栫式土器・磨製石鏃	調査61.2～３ 調査61.7～10
		弥生時代	竪穴住居跡　１軒 円形周溝状遺構　１基	山ノ口式土器・石剣	県教委区委員会による発掘調査実施
		古代	古道　１条	土師器	
		中・近世	近世墓　１基 道跡　１条	青磁・擂鉢・古銭	パンケース５箱

標高70mのシラス台地南西端にあり，中ノ原遺跡と向かい合う台地に位置している。バイパス建設工事に伴い1985年から翌年にかけて県教育委員会が発掘調査を実施し，今年度はバイパス予定地未調査部分の発掘調査を行った。弥生時代を主体とする遺跡で竪穴住居跡や円形周溝状遺構などが検出されている。竪穴住居跡から石剣１本が出土した。弥生時代中期末から後期初頭の集落研究の貴重な資料が得られた。

例　　言

1　本報告書は，「一般国道220号鹿屋バイパス建設」に伴う，中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は，平成16年度に実施し，整理作業及び報告書作成は，平成17年度に実施した。

4　遺物番号は，通し番号とし，本文，挿図，図版の番号は一致する。

5　昭和60・61年度の調査で報告された遺物・遺構を再掲する場合には，それぞれ次のように遺物番号，遺構番号を示すこととする。
　鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書（48）「中ノ原遺跡（Ⅰ）」に掲載されている遺構・遺物の場合，遺構・遺物番号の後に（中ノ原Ⅰ）
　鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書（52）「中ノ原遺跡（Ⅱ）」に掲載されている遺構・遺物の場合，遺構・遺物番号の後に（中ノ原Ⅱ）
　鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書（48）「中ノ丸遺跡」に掲載されている遺構・遺物の場合，遺構・遺物番号の後に（中ノ丸）

6　挿図の縮尺は，各図面に示した。

7　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

8　発掘調査における図面の作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。出土遺物撮影については，吉岡 康弘が行った。

9　本書の執筆・編集は主として高岡 和也がこれにあたり，一部を立神 次郎（石器），平 美典（弥生土器），吉井 秀一郎（中ノ原竪穴住居跡，集石，土坑）が担当した。

10　出土した遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示，活用する予定である。

目　　次

巻頭図版　序文　遺跡位置図　抄録　例言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 2
　第３節　調査の経過 …… 3
　第４節　報告書作成業務の経過 …… 5
　第５節　発掘調査及び
　　報告書作成業務従事者 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 8
　第１節　遺跡の位置及び自然環境 …… 8
　第２節　歴史的環境 …… 8
　第３節　大浦・郷之原地区の基本的層序 …… 12

〈中ノ原遺跡〉

第Ⅲ章　中ノ原遺跡発掘調査の概要 …… 13
　第１節　発掘調査の経過 …… 13
　第２節　発掘調査の方法 …… 13

第Ⅳ章　発掘調査の成果 …… 21
　第１節　縄文時代の成果 …… 21
　　１　調査の概要 …… 21
　　２　縄文土器の分類 …… 21
　　３　検出遺構及び遺構内遺物 …… 29
　　４　出土遺物 …… 34
　第２節　弥生時代の成果 …… 49
　　１　調査の概要 …… 49
　　２　出土遺物 …… 49
　第３節　中・近世の成果 …… 56

第Ⅴ章　出土遺物観察表 …… 58

第Ⅵ章　中ノ原遺跡発掘調査のまとめ …… 63

〈中ノ丸遺跡〉

第Ⅶ章　中ノ丸遺跡発掘調査の概要 …… 65
　第１節　発掘調査の経過 …… 65
　第２節　発掘調査の方法 …… 65

第Ⅷ章　発掘調査の成果 …… 65
　第１節　縄文時代の成果 …… 65
　　１　調査の概要 …… 65
　　２　検出遺構 …… 71
　　３　出土遺物 …… 74
　第２節　弥生時代の成果 …… 77
　　１　調査の概要 …… 77
　　２　検出遺構及び遺構内遺物 …… 77
　　３　出土遺物 …… 84
　第３節　中・近世の成果 …… 87
　　１　調査の概要 …… 87
　　２　近世の遺構 …… 87
　　３　出土遺物 …… 91

第Ⅸ章　出土遺物観察表 …… 92

第Ⅹ章　中ノ丸遺跡発掘調査のまとめ …… 94

第Ⅺ章　遺跡の周辺状況 …… 96
　第１節　中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡と
　　その周辺遺跡 …… 96
　第２節　中ノ原遺跡周辺より採集の
　　石器について …… 96

鹿児島県中ノ原遺跡の^{14}Ｃ年代測定 …… 99

写真図版 …… 103

あとがき

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡位置図 …… 10

〈中ノ原遺跡〉
第３図　中ノ原遺跡グリッド配置図 …… 14
第４図　中ノ原遺跡遺構配置図
及び調査範囲 …… 15
第５図　中ノ原遺跡土層断面図１ …… 17
第６図　中ノ原遺跡土層断面図２ …… 18
第７図　中ノ原遺跡土層断面図３ …… 19
第８図　中ノ原遺跡土層断面図４ …… 20
第９図　縄文土器分類図１ …… 22
第10図　縄文土器分類図２ …… 23
第11図　縄文土器分類図３ …… 24
第12図　縄文土器分類図４ …… 25
第13図　縄文土器分類図５ …… 26
第14図　遺物出土状況図 …… 27
第15図　竪穴住居跡実測図１ …… 29
第16図　竪穴住居跡遺物出土状況図１ …… 30
第17図　竪穴住居跡出土遺物１ …… 31
第18図　焼土跡実測図 …… 33
第19図　炭化木実測図 …… 33
第20図　縄文土器１ …… 34
第21図　縄文土器２ …… 35
第22図　縄文土器３ …… 36
第23図　縄文土器４ …… 38
第24図　縄文土器５ …… 39
第25図　縄文土器６ …… 40
第26図　縄文土器７ …… 41
第27図　縄文石器１ …… 44
第28図　縄文石器２ …… 45
第29図　縄文石器３ …… 46
第30図　縄文石器４ …… 47
第31図　弥生土器１ …… 50
第32図　弥生土器２ …… 51
第33図　弥生土器３ …… 52
第34図　弥生土器４ …… 53
第35図　鉄器 …… 53
第36図　中・近世遺構配置図１ …… 56
第37図　古道実測図１ …… 57
第38図　古代以降出土遺物１ …… 57

〈中ノ丸遺跡〉
第39図　中ノ丸遺跡グリッド配置図 …… 66
第40図　中ノ丸遺跡土層断面図１ …… 67
第41図　中ノ丸遺跡土層断面図２ …… 68
第42図　中ノ丸遺跡遺構配置図 …… 69
第43図　１・２号集石実測図 …… 71
第44図　３号集石実測図 …… 72
第45図　土坑実測図 …… 72
第46図　縄文時代遺物出土状況図 …… 73
第47図　縄文土器８ …… 74
第48図　縄文石器５ …… 76
第49図　竪穴住居跡実測図２ …… 78
第50図　竪穴住居跡遺物出土状況図２ …… 79
第51図　竪穴住居跡出土遺物２ …… 80
第52図　竪穴住居跡出土遺物３ …… 81
第53図　円形周溝状遺構実測図 …… 83
第54図　円形周溝状遺構出土遺物 …… 83
第55図　弥生土器５ …… 84
第56図　弥生土器６ …… 85
第57図　弥生石器 …… 86
第58図　中・近世遺構配置図２ …… 87
第59図　近世墓実測図 …… 88
第60図　近世墓出土遺物 …… 88
第61図　旧道・溝状遺構１～３実測図 …… 89
第62図　古道実測図２ …… 89
第63図　溝状遺構４実測図 …… 89
第64図　古代以降出土遺物２ …… 91
第65図　遺跡の周辺状況図 …… 97
第66図　遺跡周辺出土遺物 …… 98

表　目　次

第１表　鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表１ …… 6
第２表　鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表２ …… 7
第３表　周辺遺跡地名表 …… 11
第４表　中ノ原遺跡縄文土器観察表（１～３） …… 58
第５表　中ノ原遺跡弥生土器観察表（１～３） …… 60
第６表　中ノ原遺跡縄文石器観察表 …… 62
第７表　中ノ原遺跡古代以降出土遺物観察表 …… 62
第８表　中ノ丸遺跡竪穴住居跡一覧表 …… 80
第９表　中ノ丸遺跡縄文土器観察表 …… 92
第10表　中ノ丸遺跡縄文石器，採集石器観察表 …… 92
第11表　中ノ丸遺跡弥生土器観察表（１～２） …… 92
第12表　中ノ丸遺跡古代以降出土遺物観察表 …… 93

図　版　目　次

写真図版１ …… 103
写真図版２ …… 104
写真図版３ …… 105
写真図版４ …… 106
写真図版５ …… 107
写真図版６ …… 108
写真図版７ …… 109
写真図版８ …… 110
写真図版９ …… 111
写真図版10 …… 112
写真図版11 …… 113
写真図版12 …… 114
写真図版13 …… 115
写真図版14 …… 116
写真図版15 …… 117
写真図版16 …… 118
写真図版17 …… 119
写真図版18 …… 120
写真図版19 …… 121
写真図版20 …… 122
写真図版21 …… 123
写真図版22 …… 124
写真図版23 …… 125
写真図版24 …… 126

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

昭和53年，建設省九州地方建設局大隅工事事務所（現：国土交通省九州整備局大隅河川国道事務所，以下大隅河川国道事務所）は，一般国道220号鹿屋バイパスの建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会文化課（現：文化財課）に照会した。これを受けて，鹿児島県教育委員会は，工事予定地内の遺跡分布調査を実施した。

その結果，笠ノ原から祓川地区については，王子遺跡をはじめ４遺跡が発見され，昭和56年度から昭和59年度にかけて発掘調査が実施された。

大浦・郷之原地区については，昭和59年４月，第二次調査として分布調査を実施し，７地点の遺物散布地が確認された。分布調査の結果，７地点の確認調査が必要となり，大隅河川国道事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき，大隅河川国道事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，昭和60年４月22日～５月25日に確認調査が実施された。

確認調査の結果，遺跡の存在が確認されて本調査を実施することとなった。本調査は，大隅河川国道事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が締結され，昭和60年10月以降本調査を実施することとなった。

本調査は，確認調査が散布地点の遺跡の有無を確認するだけに留めたので，建設予定地内の遺跡の範囲を限定する調査（二次確認調査）を実施しながら全面調査に移るという方法で行った。さらに，工事に長期間を要する橋梁部分などについては，その部分を先行して本調査を実施することとした。

鹿児島県教育委員会が実施した各遺跡の年次ごとの発掘調査の概要は，第１・２表「鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表１・２」に示したとおりである。

中ノ原遺跡は，昭和60年10月７日～昭和61年３月17日と昭和61年６月22日～７月17日，昭和61年10月３日～昭和62年３月４日に，中ノ丸遺跡は，昭和61年２月12日～３月17日と昭和61年７月18日～10月８日に道路建設工事を施工する部分についてのみ発掘調査を行い，道路建設部分の中心線から北側に予定される緑地帯部分については発掘調査は実施しなかった。しかし，この発掘調査の結果，鹿児島県教育委員会は，中ノ原・中ノ丸両遺跡とも緑地帯部分への遺跡の広がりを指摘し，「道路工事等に変更が生じた場合は，協議の上，埋蔵文化財の保存処理を行わなければならない。」と報告した。

これらの経過を受け，大隅河川国道事務所と鹿児島県教育委員会との協議に基づき，中ノ原・中ノ丸両遺跡の道路の中心線から北側の緑地帯部分について，平成16年７月11日～平成16年12月24日に中ノ原遺跡4,680㎡（遺跡面積1,560㎡），中ノ丸遺跡1,960㎡（遺跡面積980㎡），合わせて6,640㎡（遺跡面積2,540㎡）を対象として，実働（84日間）の発掘調査を県立埋蔵文化財センターが実施した。（中ノ丸遺跡については，竪穴住居跡延長部分の調査を，進入路付け替えを行った後，平成17年２月４日～平成17年３月11日まで実施した。）

第2節　調査の組織

平成16年度　発掘調査

事業主体者　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体者　鹿児島県教育委員会
調査企画・調整　鹿児島県教育委員会文化財課

調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原　俊孝
調査企画	〃	次長兼総務課長	賞雅　彰
	〃	調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
調査担当者	〃	文化財主事	高岡　和也
	〃	文化財主事	吉井秀一郎
	〃	文化財調査員	佐藤　真人
調査事務担当者	〃	総務係長	平野　浩二
	〃	主査	脇田　清幸

平成17年度　報告書作成

事業主体者　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体者　鹿児島県教育委員会

調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	上今　常雄
調査企画	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次長兼調査第一課長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	牛ノ濵　修
調査担当者	〃	文化財主事	高岡　和也
	〃	調査第二課長	立神　次郎
調査事務担当者	〃	主幹兼総務係長	平野　浩二
	〃	主査	寄井田正秀

第3節　調査の経過

調査は平成16年7月12日（月）から平成17年12月24日（金）まで中ノ原・中ノ丸遺跡の調査を実施した。中ノ丸遺跡については，竪穴住居跡延長部分の調査を，進入路付け替えを行った後，平成17年2月4日（金）平成17年3月11日（金）まで実施した。

以下，日記抄により発掘調査の経過を略述する。

7月5日（月）から7月9日（金）

中ノ原遺跡の表土剥ぎを行う。道路建設に伴う緑地帯になっていたため，橋脚付近の斜面だった部分は盛土が厚く（5mを超える部分もある）また，道路供与後多くの店舗ができており店舗進入路により調査区が寸断される状態となった。

7月12日（月）から7月28日（水）

中ノ原遺跡

①・⑤・⑥地点Ⅱ層～Ⅳ層調査，⑤・⑥地点グリッド杭設定

8月3日（火）から8月27日（金）

中ノ原遺跡

①地点　遺物出土状況写真撮影　不明土坑（炭入土坑）調査　グリッド杭設定

②～④地点　Ⅱ～Ⅳ層調査　グリッド杭設定　ピット検出，調査

⑤地点　Ⅱ層出土遺物取上　Ⅴ・Ⅵ層調査　Ⅶ層上面コンタ図作成

⑥地点　古道検出，実測　Ⅴ・Ⅵ層調査　Ⅶ層上面コンタ図作成

9月1日（水）から9月28日（火）

中ノ原遺跡

台風16・18・21号接近　台風16号によりプレハブ2階壁一部破損　フェンス破損

①地点　Ⅵ～Ⅶ層調査　情報ボックス露呈部分養生

⑤地点　Ⅵ～Ⅶ層調査　遺物取上　グリッド杭打ち直し　土坑配置図作成　X層調査

⑥地点　Ⅵ～Ⅶ層調査　一部X層調査　縄文後期竪穴住居跡調査

10月4日（月）から10月28日（木）

中ノ原遺跡

①地点　Ⅵ～Ⅶ層調査　土坑調査　X層調査　下層確認トレンチ調査

②～④地点　Ⅶ～Ⅶ層調査　下層確認トレンチ調査

⑤地点　X層調査　土坑調査，実測　土層断面実測　下層確認トレンチ調査　埋め戻し

⑥地点　縄文後期竪穴住居跡調査　X層調査

中ノ丸遺跡

表土剥ぎ立会

11月１日（月）から11月25日（木）

中ノ原遺跡

①地点　炭化木入り土坑調査　焼土跡調査

②地点　Ⅶ～Ⅷ層調査　下層確認トレンチ調査

③地点　Ⅸ～Ⅹ層調査　下層確認トレンチ調査

④地点　Ⅶ～Ⅷ層調査　Ⅹ層調査　下層確認トレンチ調査

⑤地点　埋め戻し

⑥地点　縄文後期竪穴住居跡調査　Ⅹ層調査

中ノ丸遺跡

⑦地点　遺構検出，円形周溝１基検出　グリッド杭設定　Ⅶ層状面コンタ図作成
ピット調査　遺構配置図作成

⑧地点　グリッド杭設定　遺構精査　Ⅲ層調査

⑨地点　グリッド杭設定　遺構精査　弥生時代竪穴住居跡検出調査　Ⅲ層調査

⑩地点　グリッド杭設定　遺構精査　Ⅲ層調査　古道検出調査

12月１日（水）から12月24日（金）

中ノ原遺跡

①地点　炭化木入り土坑調査　焼土跡調査

⑥地点　縄文後期竪穴住居跡調査

中ノ原遺跡調査終了

中ノ丸遺跡

⑦地点　円形周溝調査　ピット調査　Ⅷ～Ⅹ層調査

⑧地点　Ⅷ～Ⅹ層調査　ピット調査

⑨地点　弥生時代竪穴住居跡調査　石剣出土　石鏃未製品出土　ピット調査　集石検出，調査　Ⅷ～Ⅹ層調査

⑩地点　古道調査　近世墓調査　集石調査　Ⅷ～Ⅹ層調査　Ⅹ層より磨製石鏃出土

１月中旬より，⑦地点・⑨地点遺構調査のため，進入路付け替え工事開始。

２月４日（金）から２月25日（金）

中ノ丸遺跡

新⑦地点　遺構精査　ピット検出，調査

新⑨地点　弥生時代竪穴住居跡調査　溝検出　古道検出

雨の日が多く，排水場所のない調査区のため水が溜まり，調査できる日が少なかった。

３月１日（金）から３月11日（金）

中ノ丸遺跡

新⑨地点　弥生時代竪穴住居跡調査　溝調査　古道調査

中ノ丸遺跡調査終了

第4節　報告書作成業務の経過

1　報告書作成業務の経過

中ノ原・中ノ丸遺跡の発掘調査報告書作成業務は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成17年4月から平成18年3月まで行った。月ごとの作業工程は次に示す通りである。

4月　遺物注記，遺物分類，遺物接合
5月　遺物分類，遺物選別
6月　遺物接合，遺物選別，土器実測
7月　遺物接合，土器実測，石器実測，拓本，遺構トレース
8月　遺物分類，遺物選別，土器実測，石器実測，拓本，計測
9月　土器実測，石器実測，計測，遺物トレース
10月　土器実測，石器実測，計測，遺物トレース，レイアウト
11月　土器実測，石器実測，遺構トレース，遺物トレース，レイアウト，原稿執筆
12月　写真撮影，原稿執筆
1月　入札，文章校正
2月　遺物・図面整理及び収納
3月　遺物・図面整理及び収納

第5節　発掘調査及び報告書作成業務従事者

発掘調査従事者

荒川　リツ子	有村　幸次	上原　正治	内田　忠則	大平　義男
岡本　勝紀	奥村　タエ子	尾迫　和幸	面高　時紀	川井田　裕子
川原　時夫	熊迫　正弘	兒島　明	兒島　治	小城　武光
小城　洋子	迫　フミ子	佐々木イツ子	芝原　ツミ子	芝原　守之
下村　シヅ子	鈴木　しまよ	瀬戸口　清志	武元　正子	戸柱　高雄
中塩屋　貞男	中野　レイ子	西門　純行	西ノ原　ムツ	橋口　スエ子
東　孝二	久永　六雄	藤崎　貴代	松崎　クミ子	宮田　順子
八木　聡	八木　宗二	山形　丸視	吉元　春義	谷本　一美
浜谷　敬子	比地黒美千代	牧山　裕子		

報告書作成業務従事者

伊藤　ひとみ	岩下　亮子	小薗　裕子	児玉さつ子	竹之下ハルミ
中住　まゆみ	西村　律子	山下　洋子	久保　可代	瀬戸口　良子
鶴丸　米子	橋口　そのみ	堂籠　久代	児玉　節子	後藤　万里子
榮　素子	大王　美代子			

第１表　鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表１

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	調査員	時　代	概　　要	巻次
1	王子	鹿屋市王子町	12,000	確認　S56.12 全面　S56.12～S59.3	立神・中村耕 出口・立神・峯崎 ・山口・日高	縄文 弥生	集石，石坂式土器 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構 山ノ口式土器（甕・壺・鉢），磨製石鏃・樹皮製叩石・砥石・土製勾玉 ・刀子・鉄滓 ※県教育委員会1985「王子遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』34	Ⅰ
2	西蔵川	鹿屋市西蔵川町	160	１次　S57.8～9 ２次　S58.8～9	長野・ 長野・	縄文 古墳 中世	集石，前平式土器 高坏・坩・成川式土器 白磁碗・青磁片・土師器皿 ※県教育委員会1985「西蔵川遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』34	Ⅰ
3	薬師堂	鹿屋市西蔵川町	100	全面　S58.8	立神・山口	古墳	成川式土器（壺・高坏） ※県教育委員会1985「薬師堂遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』34	Ⅰ
4	榎田下	鹿屋市大浦町		全面　S61.5～6	新東・前迫・上田	縄文	轟式・曽畑式・指宿式・市来式・石鏃・石斧・磨石・石皿 ※県教育委員会1989「榎田下遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』48	Ⅱ
5	中ノ原	鹿屋市大浦町		確認　S60.4～5 全面　S61.6～7 S61.10～S63.1	新東・井上・宮田 新東・前迫・上田 新東・前迫・上田	縄文 弥生 中世～近世	竪穴住居跡・集石・土坑，石坂式・轟式・曽畑式・指宿式・鮫曽式・南福 寺式・入佐式・石鏃・石斧・石匙・スクレイパー・磨石 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・古道・溝状遺構，山ノ口式土器（甕・壺・鉢） 土師器坏 ※県教育委員会1989「中ノ原遺跡（Ⅰ）」『県埋蔵文化財発掘報告書』48 ※県教育委員会1990「中ノ原遺跡（Ⅱ）」『県埋蔵文化財発掘報告書』52	Ⅱ・Ⅲ
6	中ノ丸	鹿屋市大浦町		確認　S60.4～5 全面　S61.2～3 S61.7～10	新東・井上・宮田 新東・前迫 新東・前迫・上田	縄文 弥生 中世～近世	轟式・曽畑式・指宿式・市来式・石鏃・石斧・磨石・石皿 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝・土坑・溝状遺構，山ノ口式・砥石 掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・古道，須恵器・土師器・青磁 ※県教育委員会1989「中ノ丸遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』48	Ⅱ
7	川ノ上	鹿屋市大浦町		全面　S61.9～10	新東・河野	中世	供養塚２ ※県教育委員会1989「川ノ上遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』48	Ⅱ
8	中原山野	鹿屋市郷之原町		確認　S60.4～5 全面　S62.6～7 S62.10～S63.1	新東・井上・宮田 新東・前迫 新東・前迫	縄文 弥生	集石，下剥峯式・平栫式・スクレイパー・磨石・台石 竪穴住居跡，山ノ口式土器（大甕・甕・壺・台付鉢）・砥石 戦跡遺構（掩体壕・誘導路） ※県教育委員会1990「中原山野遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』52	Ⅲ

第２表　鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表２

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	調査員	時　代	概　要	巻次
				確認　S60.4～5	新東・井上・宮田	縄文	集石，石坂式・押型文・平栫式・塞ノ神式・石鏃・石匙・石斧・石皿	
				全面　S62.6～S63.3	新東・前迫	弥生	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝・溝状遺構，山ノ口式・須久Ⅱ式	
9	前畑	鹿屋市郷之原町		S63.4～9	新東・梅北・中村		・磨製石鏃・打製石鏃・砥石・台石	Ⅲ
					・八木澤	近世	近世墓，古銭・鉛玉・ガラス玉	
							戦跡遺構（掩体壕・誘導路）	
							※県教育委員会1990「前畑遺跡」『県埋蔵文化財発掘報告書』52	
				確認　S62.9～10	牛ノ濵・旭	縄文	集石・土坑，石坂式・平栫式・塞ノ神式・春日式・市来式・石匙・管玉	
10	飯盛ヶ岡	鹿屋市上野町		全面　H元.4～H2.3		弥生	竪穴住居跡，山ノ口式土器・磨製石鏃	Ⅵ
						古代	土師器	
							埋文センター1993「飯盛ヶ岡遺跡」『県埋文センター発掘報告書』３	
				確認　S62.9～10	旭・牛ノ濵	旧石器	礫群，細石刃・細石刃核・削器・掻器・楔形石器	
				全面　S63.5～H元.3	旭・八木澤・梅北	縄文	集石，前平式・石坂式・桑ノ丸式・下剥峯式・押型文・塞ノ神式・曽畑式	
11	榎崎Ａ	鹿屋市郷之原町			・中村和美	弥生	下城式土器	Ⅳ
						古墳	溝状遺構，成川式土器	
						古代	周溝墓・掘立柱建物跡・土坑，須恵器・土師器・滑石製品・焼塩壺・砥石	
							県教育委員会1992「榎崎Ａ遺跡」『県埋蔵文化財発掘調査報告書』63	
				確認　S62.9～10	牛ノ濵・旭	旧石器	礫群・ピット，細石刃核・細石刃・磨製石斧・削器	
				全面　H2.4～H3.3	青崎・宮田・大久保	縄文	集石・土坑，塞ノ神式・石鏃・石斧・黒川式土器・磨石・石皿	
12	榎崎Ｂ	鹿屋市郷之原町		H3.4～6	・関・藤崎・熊崎	古墳	竪穴住居跡，成川式土器	Ⅶ
					青崎・宮田・吉内	古代	掘立柱建物跡・溝状遺構，須恵器・土師器・刀子・土錘	
							埋文センター1993「榎崎Ｂ遺跡」『県埋文センター発掘報告書』４	
				確認　H元	中村耕	旧石器	礫群，ナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器・尖頭器・削器・彫器・磨石	
13	西丸尾	鹿屋市白水町	6,000	全面　H2.5～H3.1	宮田・関・藤崎		・敲石・細石刃・細石刃核	Ⅴ
			(2,000)			縄文	配石遺構・集石，前平式・塞ノ神式土器・石鏃	
							県教育委員会1992「西丸尾遺跡」『県埋蔵文化財発掘調査報告書』64	
				確認　H3年度	青崎・児玉	旧石器	土坑，剥片	
14	西丸尾Ｂ	鹿屋市白水町	2,00	全面　H4.6～7	鵜田・湯之前・熊崎	縄文	集石，前平式・石坂式土器・石皿・石斧	Ⅷ
						古墳	成川式土器	
							埋文センター1994「西丸尾Ｂ遺跡」『県埋文センター発掘報告書』９	

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

第１節　遺跡の位置及び自然環境

鹿屋市は，大隅半島のほぼ中央に位置し，昭和16年に市制を施行し，大隅地方の中心的都市として位置づけられている。また，平成18年１月には，輝北町，串良町，吾平町との合併により，人口10．6万人の都市となった。市街地の北部に高隈山系がそびえ，大箆柄岳（1,236m）を主峰に横岳，御岳など1,000m級の山系が連なり，地質は四万十層群と，それを貫く高隈花崗岩から成る急峻で深い森林に覆われ，東部から北部にかけては，鹿児島湾奥に形成された姶良カルデラより約24,000年前に噴出したといわれる入戸火砕流堆積物（シラス）によりできた標高約50～170mのシラス台地が広がっている。本地域のシラス台地は内部を貫流する河川によって大小いくつかに区分することができる。太田・河内（1965）は，鹿屋市街地を流れる肝属川以西の台地を鹿屋原台地，肝属川と串良川に挟まれる台地を笠野原台地，串良川以東の台地を野方台地としたが，米谷清二（1971）は串良川と持留川に挟まれる台地を永吉台地，持留川と田原川に挟まれる台地を大崎台地とし，この他の台地もあわせて大隅中央台地群とした。

本遺跡の位置する鹿屋原台地は，鹿屋市街地の西部から南部にあり，北側の郷之原から海上自衛隊基地のある野里を経て南側の大姶良にかけて広がっており，台地の面積は約24㎢である。郷之原付近の海抜は約70m，大姶良付近の海抜は約50mで，全体として北から南に傾いているが，その平均傾斜は１％程度できわめて平坦となっている。

本遺跡の位地する台地北側の郷之原・大浦付近では肝属川の支流により浸食され分断されているが，それ以外の地点では一部浅く開析されてはいるものの連続性が良く一連の台地となっている。河川に沿ってのびる台地末端の急崖部分での観察によれば，入戸火砕流堆積物の厚さは約30mである。

第２節　歴史的環境

１　旧石器時代

鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査により，榎崎Ａ遺跡では，細石器文化期の遺物が，榎崎Ｂ遺跡では，多くの礫群とピット群を伴う細石器と局部磨製石斧が検出された。西丸尾遺跡では，細石器とナイフ型石器文化の両文化層の遺構・遺物が検出されている。また，古江バイパス建設に伴う根木原遺跡Ａ地点の発掘調査では，細石器とナイフ型石器文化の両文化層の遺構・遺物が検出され，その中でもナイフ型石器文化期に相当する大量の水晶製遺物が出土している。

２　縄文時代

草創期の遺跡としては，南町の伊敷遺跡が著名である。薩摩火山灰の下部より隆帯文土器と石斧が検出された。上楠原遺跡では，貝殻による施文のある土器片及び無文土器が出土し，西丸尾遺跡でもこの時期の遺構・遺物が検出された。

早期になると，上楠原遺跡，岩之上遺跡，打馬平原遺跡，谷平遺跡，榎崎Ａ遺跡などから，前平式土器，手向山式に類似する押型文土器，塞ノ神式土器，石坂式・吉田式土器などの土器や集石が検出されている。前畑遺跡では，多くの集石遺構とともに平栫式土器（壺形を含む）が

出土している。中ノ原遺跡でも石坂式土器の範ちゅうに属すると考えられる土器が出土している。

前期の遺物が出土した主な遺跡として，神野牧遺跡，榎田下遺跡，榎木原遺跡，中ノ原遺跡があげられる。それぞれ轟式・曽畑式系統の土器，前平式土器等が出土している。

中期に該当する遺物が出土した遺跡は，県内他地域の傾向と同様で少ない。榎木原遺跡，榎田下遺跡，前畑遺跡，飯盛ヶ岡遺跡でわずかながら検出されている。根木原遺跡Ｂ地点でも春日式土器の出土が確認されている。

後期になると榎田下遺跡で市来式土器が，中ノ原遺跡で指宿式・市来式・西平式土器が，榎木原遺跡では，岩崎上層式・市来式土器が出土している。柴立遺跡・小薄遺跡はこの時期の遺跡として知られている。

晩期の遺物が出土した遺跡としては，上祓川遺跡群の丸岡・水ノ谷遺跡，宮の脇遺跡，榎木原遺跡，中ノ原遺跡，中原山野遺跡等があげられる。

3　弥生時代

水ノ谷遺跡，榎木原遺跡では，前期から中期にかけての資料が検出されている。特に板付Ⅱ式に比定される壺や亀ノ甲式の甕，榎木原遺跡ではさらに西瀬戸内の影響を思わせる縦位突帯をもつ壺などは大隅半島における当時の状況を把握するために大切な資料である。王子遺跡は中期末から後期初頭の大集落として全国に広く知られている。中ノ丸遺跡では中期末から後期初頭にかけて竪穴住居跡や円形周溝状遺構が検出され，中ノ原遺跡，前畑遺跡でも本時期の遺構・遺物が検出されている。高付遺跡では中期から古墳時代にかけての河内・瀬戸内・東九州地方の影響を考えさせる資料が出土している。

4　古墳時代

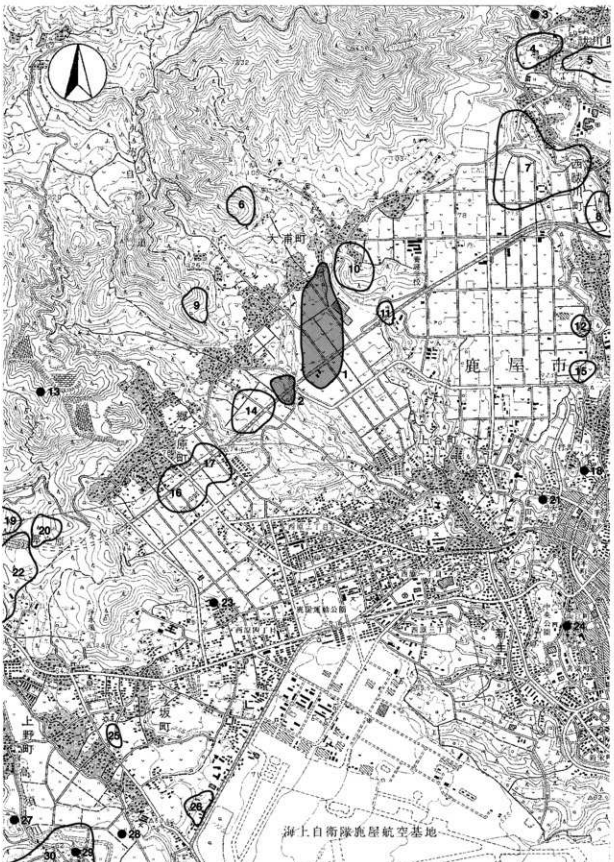
大隅半島志布志湾沿岸や肝属川流域は，高塚古墳や地下式横穴の本県における分布の中心地となっている。鹿屋地方では，西祓川町の円墳３基と短甲衝角付冑が出土した地下式土壙，野里町の円墳３基，岡泉Ｂ遺跡の円墳３基，大浦町の地下式横穴が知られる。本時代の生活遺構としては，成川式土器を主体とした早山・宮の脇遺跡，上原遺跡，俣刈遺跡，鵜羽遺跡等が知られる。根木原遺跡Ｃ・Ｄ地点からも成川式土器を主体とした竪穴住居跡などが確認されている。

5　歴史時代

奈良時代から平安時代の遺物が出土した遺跡として，飯盛ヶ岡遺跡，榎崎Ａ・Ｂ遺跡，宮の脇遺跡等があげられる。宮の脇遺跡では，青銅製の帯金具が出土し古代官位制を示す貴重な資料として注目されている。中ノ原・中ノ丸遺跡からも中世から近世にかけての遺構・遺物が検出されている。また，南北朝から戦国時代にかけての山城が多数存在している。

〈引用・参考文献〉

・「鹿屋市史　上巻」鹿屋市史編集委員会　1967
・「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（48）概要編　中ノ原遺跡Ⅰ，Ⅱ　中ノ丸遺跡」1989
・「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（63）榎崎Ａ遺跡」1992
・「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（64）西丸尾遺跡」1992
・「鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（76）中野西・松山田西遺跡」2004



第２図　周辺遺跡位置図（2万5千分の1）

第３表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地　形	時　代	遺構・遺物	備　考
1	中ノ原	大浦町中ノ原	台　地	縄文・弥生・古墳		県埋文報(48)(51)(52) 市埋文報(34)(35)(46)
2	中ノ丸	大浦町中ノ丸	台　地	縄文・弥生・歴史		県埋文報(48)
3	鹿屋一ノ谷城跡	西祓川町一ノ谷城跡	山　麓	中世(南北朝初～戦国)		県埋文報(43)
4	中野	祓川町	低　地	古墳	石斧	県埋文報(23)
5	堀之牧遺跡群	祓川町堀之牧	台　地	弥生(中)・古墳	土器片	県埋文報(23)
6	耳取ヶ丘	大浦町耳取ヶ丘	傾斜地			
7	神野牧	西祓川町神野牧	台　地	縄文・弥生	石器・石匙・土器片	県埋文報(20)(23) 市埋文報(14)
8	薬師堂の古墳	西祓川町下中原前	台　地	弥生(後)・古墳	円墳３基	別名「薬師堂」 県埋文報(34)
9	郷之原	郷之原町	山　麓	縄文・古墳	土器片・石器	県埋文報(23)
10	大浦	大浦町	台　地	縄文	地下式横穴・縄文土器	県埋文報(23)(48) 市埋文報(16)
11	榎田下	大浦町榎木田下	台　地	縄文(前・後)		県埋文報(48)
12	打馬	打馬町	台　地	古墳	土器片	県埋文報(23)
13	世井神社跡	郷之原町		創建天文23年(1554)		鹿屋市史
14	川の上	大浦町松橋川の上	独立丘陵	古墳	土器片	県埋文報(23)
15	平原古墳	打馬町平原	台　地	古墳	墓石５基・五輪塔１基	県埋文報(23)
16	前畑	郷之原町前畑	台　地	縄文・弥生・古墳・近世		県埋文報(52)(18)(25)(36)
17	中原山野	郷之原町中原山野	台　地	縄文(早・晩)・弥生・古墳		県埋文報(52)(45)
18	豊岳山医王院 富岡寺跡	打馬町		不詳		鹿屋市史
19	榎崎Ａ	郷之原町榎崎	台　地	旧石器・縄文・弥生・ 古墳・歴史	細石刃・土こう墓	県埋文報(63)
20	飯盛ヶ丘	上野町飯盛ヶ丘	台　地	縄文・弥生・古墳・古代		県埋文報(63)
21	鹿屋城跡	北田町	台　地	弥生・古墳・歴史	土器片・青磁・石斧	県埋文報(43)(50)(54)(57)
22	高橋	上野町	傾斜地	弥生・古墳	土器片	県埋文報(25)
23	久恵城跡	西原町	丘　陵	中世(南北朝初～戦国)		県埋文報(43)
24	池上山安養寺跡	向江町		中世(安土桃山)(1597)		鹿屋市史
25	柳	上野町柳		古墳		
26	野里小西	野里町	台　地	縄文(早)・古墳	土器片	県埋文報(25)
27	野里城跡	野里町	台　地	中世(戦国)		県埋文報(43)
28	光源寺跡	野里町		中世(安土桃山)(1573 ～1591)		鹿屋市史
29	阿弥陀寺跡	野里町		不詳		鹿屋市史
30	大津	野里町	台　地	弥生・古墳	土器片	県埋文報(25)

第３節　大浦・郷之原地区の基本的層序

大浦・郷之原地区は，中央に西迫の谷が入り大浦地区と郷之原地区に区分される。そして，大浦地区と郷之原地区の二つの平坦な広い台地を形成している。しかし，昭和60年から61年の調査の層位では削平状況や盛土状況が観察され，当時は起伏の多い台地であったことが確認された。いずれも近年，大型の農地整備が行われ平坦な台地上に畑地が作られたものである。

大浦・郷之原地区の基本的層序は，表層のⅠ層からこの台地の基盤層である入戸火砕流堆積物（シラス）までⅩⅤ層に分かれ，さらに細分される層もある。上層から順次説明すると次のようになる。

Ⅰ層は緑地帯橋梁建設のための盛土層，昭和60年当時の耕作土層，農地整備のための盛土層，農地整備以前の耕作土層がある。

Ⅱ層は黒色層で，中世の遺物や遺構が検出される。削平を受けており，残存している部分は少ない。

Ⅲ層は，黒褐色土層で弥生時代中期末～後期初頭の包含層である。

Ⅳ層は，黄白色土層である。Ⅲ層の下部に薄い黄白色の粉末が浮遊した状態で観察される。

Ⅴ層は茶褐色土層で，縄文時代晩期の包含層を形成している。

Ⅵ層は黄褐色土層であり，アカホヤ火山灰層の二次堆積層である。中ノ原・中ノ丸遺跡では，下層にⅦ層にあたる池田降下軽石が浮遊した状態で堆積している。この軽石層より上面がⅥ層になる。Ⅵ層は，縄文時代前期から後期の包含層である。

Ⅶ層は，アカホヤ火山灰に相当する。赤褐色火山灰層（Ⅶａ）と黄橙色軽石層（Ⅶｂ）に細分される。アカホヤ火山灰は縄文早期と前期の重要な指標層となっている。

Ⅰ層	盛土	
	表土	
Ⅱ層	黒色土	
Ⅲ層	黒褐色土	
Ⅳ層	黄白色	a　軽石
		b　粘土
Ⅴ層	茶褐色土	
Ⅵ層	黄褐色土	
Ⅶ層	a　赤褐色土	
	b　黄橙色軽石	
Ⅸ層	灰褐色土	
Ⅹ層	茶褐色土	
Ⅺ層	黄橙色軽石粒混暗褐色土	
Ⅻ層	茶褐色土	
ⅩⅢ層	砂礫層	
ⅩⅣ層	桃白色土	
ⅩⅤ層	灰褐色土（シラス）	

Ⅸ層は，灰褐色土層で，ブロック状をなし部分的に確認されるものである。指宿市権現山付近に厚く堆積してていることから権現山火山灰と呼ばれるものである。

Ⅹ層は，茶褐色の粘土層で縄文時代早期の包含層である。

Ⅺ層は，黄褐色軽石粒混暗褐色土層でいわゆる薩摩火山灰と呼ばれる火山灰堆積物である。晩期旧石器～縄文時代草創期と縄文時代早期を区分する重要な指標層である。

Ⅻ層は，茶褐色の粘質土層チョコ層とも呼ばれる。一般的には細石器文化が包含されるが，中ノ原・中ノ丸遺跡では確認されなかった。

ⅩⅢ層は，桃白色土層の通称ヌレシラスと呼ばれる入戸火砕流の二次堆積物である。

ⅩⅤ層は，入戸火砕流堆積物で通称シラスと呼ばれている。

中ノ原遺跡

第Ⅲ章　中ノ原遺跡発掘調査の概要

第1節　発掘調査の経過

中ノ原遺跡は，一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴って昭和60年度～昭和62年度に県教育委員会が発掘調査を実施した。また，バイパス供用開始後の平成６年度～平成10年度の間に周辺の店舗・駐車場等の建設工事に伴う３箇所の埋蔵文化財発掘調査を鹿屋市教育委員会が実施した。

これらの発掘調査については，鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書（48）「中ノ原遺跡（Ⅰ）」，(52)「中ノ原遺跡（Ⅱ）」，鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（34）「中ノ原（Ⅰ）遺跡」，(46)「中ノ原（Ⅴ）遺跡」，(51)「中ノ原（Ⅵ）遺跡」によって報告されている。

今回の発掘調査は，バイパス改築工事に伴う中ノ原遺跡北側延長部分の発掘調査である。

第2節　発掘調査の方法

1　グリッド設定及び調査範囲

グリッドの設定は，遺構の広がり，遺物の出土状況を対比しやすくするために，昭和60年度調査グリッドと同様に，工事用センター杭№354と№360を基準に10m×10mのグリッド設定を行い，西端から１～44区，南から北へA～Ⅰ区とし，発掘調査を行った。

昭和60年度の調査時と違い，現在はバイパス沿いに店舗ができており，調査区が店舗等への進入路及び市道で分断されてしまいグリッドごとの調査が困難になるため，進入路・市道及び情報ボックスで区切られたブロックごとに，中ノ原遺跡東側から順に①・②・③・④・⑤・⑥地点として発掘調査を行った。

進入路及び市道の調査については遺物・遺構の状況を見て協議することとした。遺構・遺物の検出・出土状況から判断し，今回は進入路部分の調査は行わなかった。

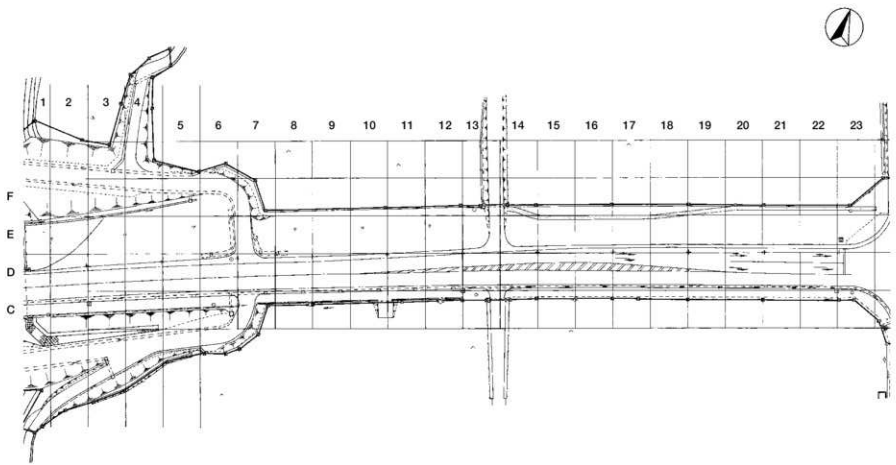
また，西端の部分（１区～４区）は，谷部のため盛土が厚く，前回調査時（昭和60）の表土部分まで５m以上あり，調査することができなかった。

2　調査の方法

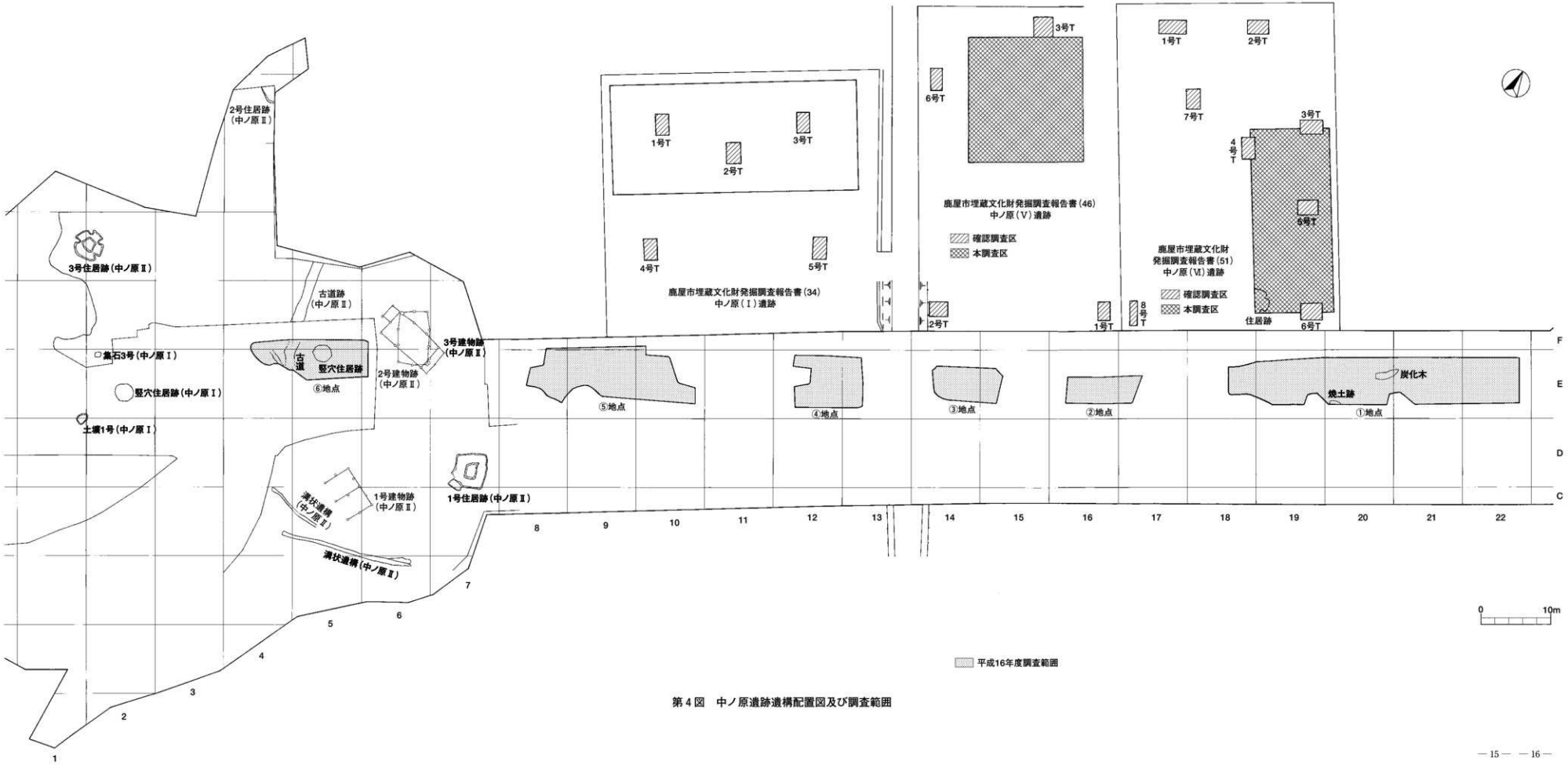
重機（バックホー）によって緑地帯となっていた部分の盛土，及び旧表土を除去し，それ以後は人力（山鍬・ジョレン・ねじり鎌・移植コテ等）でⅣ層（薩摩火山灰層）上面まで掘り下げを行った。

排出土は，調査範囲が狭いためにそれぞれの調査地点内に排出土仮置き場を設け，バックホーでダンプにすくい上げ排出土置き場に搬送するという方法をとった。

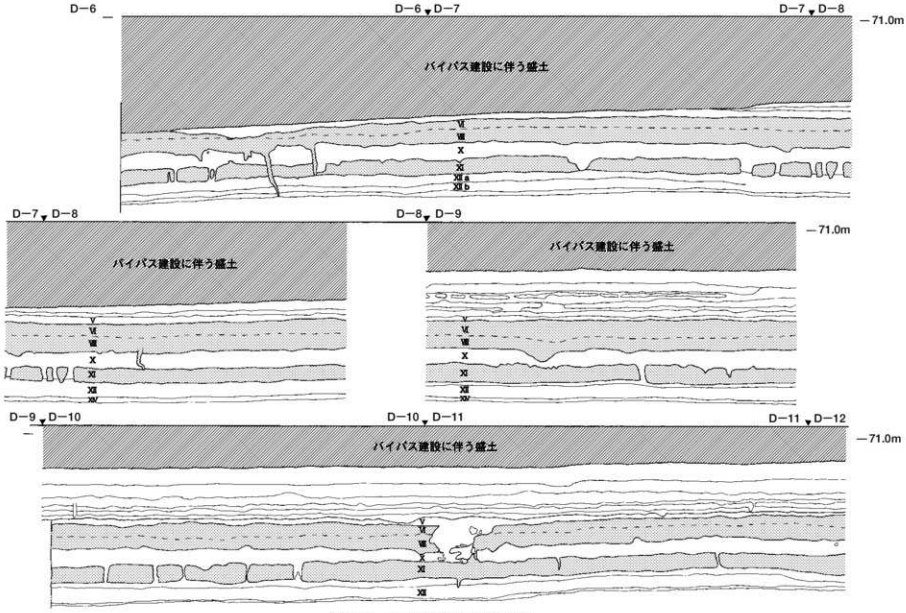
また，調査区のすぐ横が交通量の多いバイパスであるために，安全対策として道路側にガードレールを設置したり，土嚢を積むなどした。調査区の周りには丸太杭を打ち込み，標識ロープで囲み転落防止等の対策を行った。



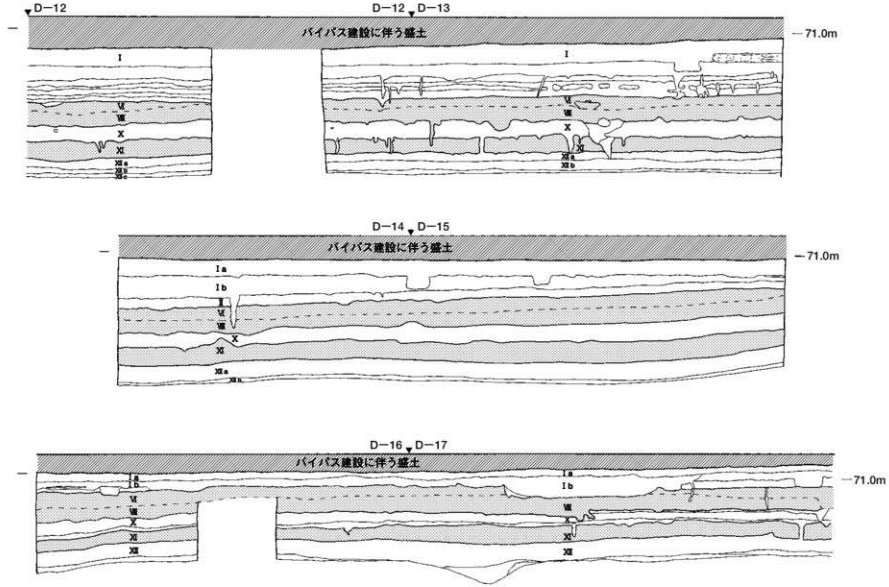
第3図　中ノ原遺跡グリッド配置図



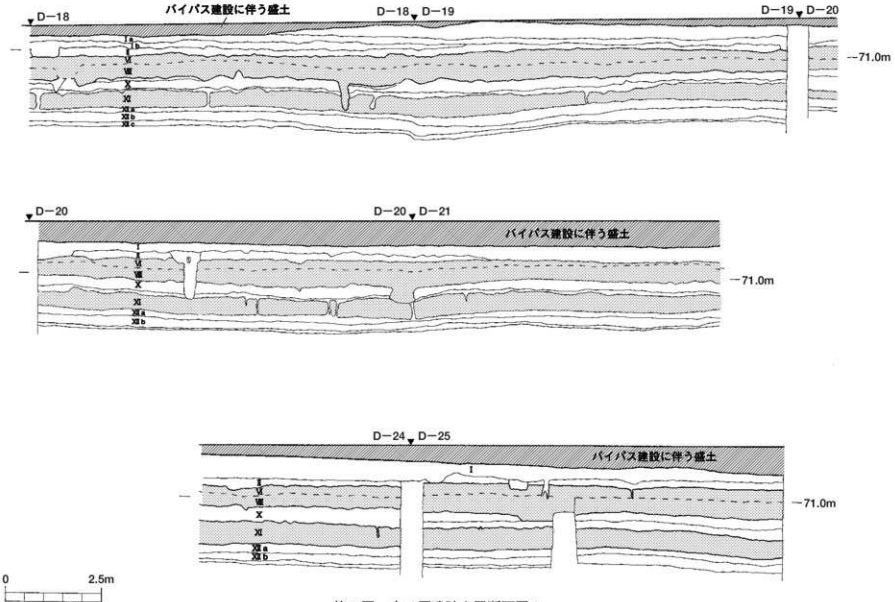
第4図　中ノ原遺跡遺構配置図及び調査範囲



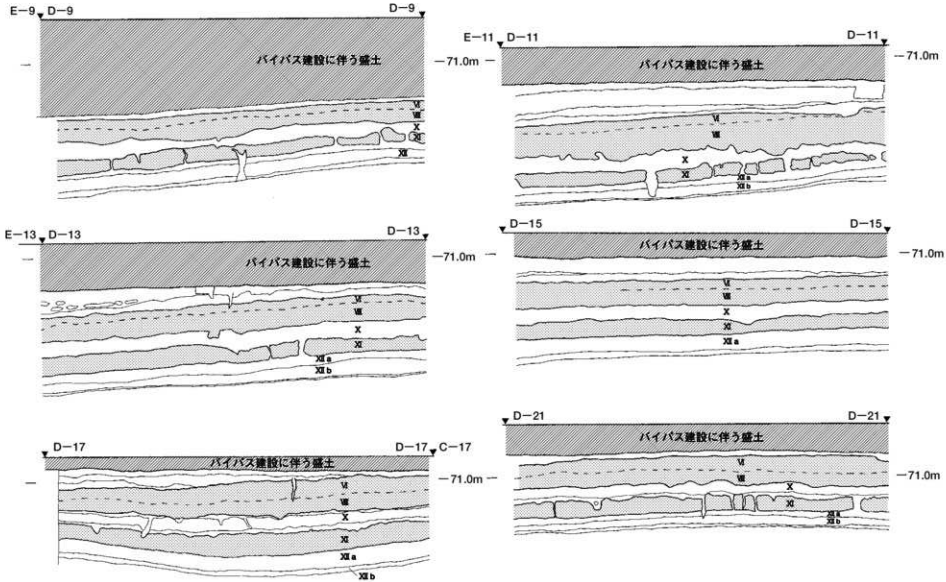
第５図　中ノ原遺跡土層断面図１



第6図　中ノ原遺跡土層断面図2



第7図　中ノ原遺跡土層断面図3



第8図　中ノ原遺跡土層断面図4

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節　縄文時代の成果

１　調査の概要

昭和61年度の中ノ原遺跡の調査により，縄文時代は，Ｘ層（アカホヤ火山灰下）に早期に該当する時期（Ｄ・Ｅ－６・７区とＤ・Ｅ－18・19区付近）やⅥ層に前期と後期に該当する時期（当時の調査区のほとんど全域），Ⅴ層には晩期に該当する時期（Ａ～Ｆ－７区付近から以西）の三時期の包含層が確認されている。

今回の調査では，前回の調査で早期の包含層が確認されたＤ・Ｅ－６・７区とＤ・Ｅ－18・19区付近及びその他の区域においても早期の遺構・遺物の検出・出土は確認できなかった。前期はＡ・Ｂ－７区以西に中心が存在していると前回の調査で確認されており，今回の調査範囲では確認されなかった。後期に該当する遺物は，今回の調査においてもほぼ全域で検出されている。中でも後期に該当する竪穴住居跡が１軒検出された。晩期に該当する遺構・遺物はＦ－18区周辺に焼土跡１基，石器が出土した。

２　縄文土器の分類

土器の分類は前回の調査と同様に，早期該当のⅠ類から晩期のⅩⅣ類に分類することとする。

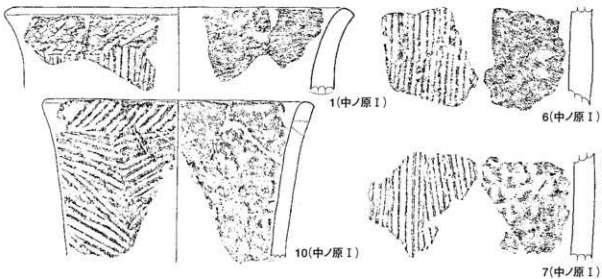
各類別土器の特徴は，次のようである。

Ⅰ類土器・・・貝殻文円筒系土器［Ｘ層　早期］
Ⅱ類土器・・・隆帯文系土器（隆帯文を貼付する系統）［Ⅵ層　前期］
Ⅲ類土器・・・条痕文系土器（条痕文で器面全体を整形する系統）［Ⅵ層　前期］
Ⅳ類土器・・・押引条線文系土器（数条の押引状の条線文で文様帯を作る系統）［Ⅵ層　前期］
Ⅴ類土器・・・沈線文系土器（沈線文を幾何学的に施文し文様構成する系統）［Ⅵ層　前期］
Ⅵ類土器・・・貝殻刺突文＋凹線文系土器［Ⅵ層　後期］
Ⅶ類土器・・・凹線文＋貝殻刺突文充填系土器［Ⅵ層　後期］
Ⅷ類土器・・・細形平行凹線文系土器［Ⅵ層　後期］
Ⅸ類土器・・・肥厚口縁＋磨消縄文系土器［Ⅵ層　後期］
Ⅹ類土器・・・肥厚口縁部屈曲系土器［Ⅵ層　後期］
ⅩⅠ類土器・・・口縁部屈曲系土器［Ⅵ層　後期］
ⅩⅡ類土器・・・型式不明土器［Ⅵ層　後期］
ⅩⅢ類土器・・・各種底部［Ⅵ層　後期］
ⅩⅣ類土器・・・黒色研磨土器

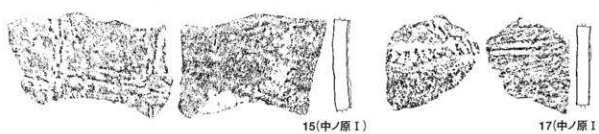
以上のように，便宜的に14類に類別したが，この中でⅩⅡ類は型式不明の土器を一括し，ⅩⅢ類土器は各種の底部を一括した。このように，各々の類別は，一型式を示すものではない。

今回の調査では，各類の特徴を十分に説明することができないので，前回の出土遺物を類別に何点か紹介する。

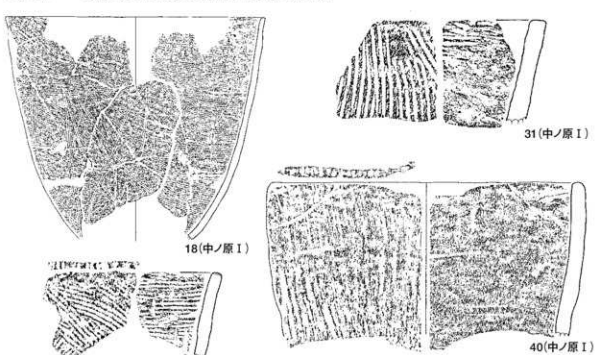
Ⅰ類土器・・・貝殻文円筒系土器



Ⅱ類土器・・・隆帯文系土器(隆帯文を貼付する系統)

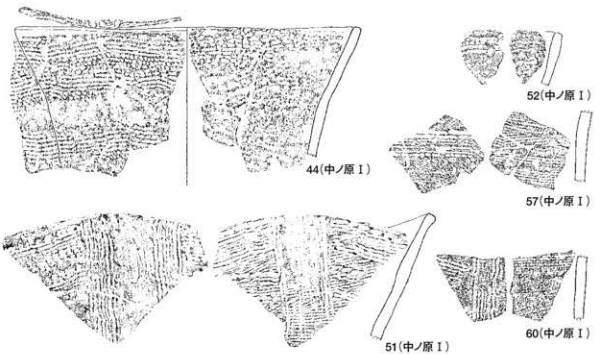


Ⅲ類土器・・・条痕文系土器(条痕文で器面全体を整形する系統)



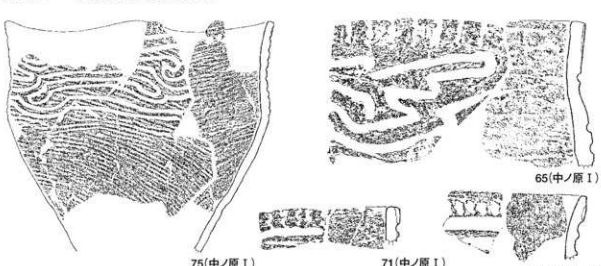
第9図　縄文土器分類図1

Ⅳ類土器・・・押引条線文系土器（数条の押引状の条線文で文様帯を作る系統）



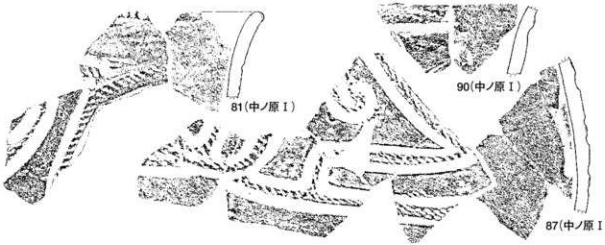
Ⅴ類土器・・・沈線文系土器（沈線文を幾何学的に施文し文様構成する系統）

Ⅵ類土器・・・貝殻刺突文＋凹線文系土器



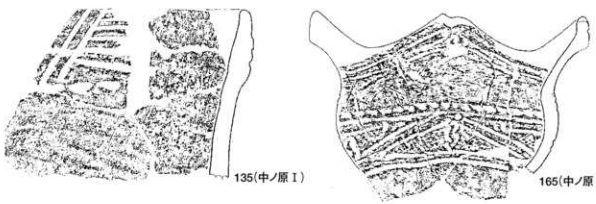
第10図　縄文土器分類図２

Ⅶ類土器・・・凹線文＋貝殻刺突文充填系土器



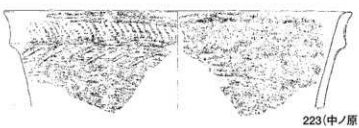
Ⅷ類土器・・・細形平行凹線文系土器

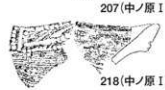
Ⅸ類土器・・・肥厚口縁＋磨消縁文系土器

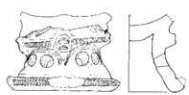


第11図　縄文土器分類図３

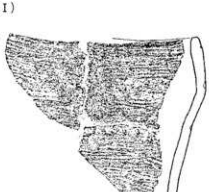
X類土器・・・肥厚口縁部屈曲系土器





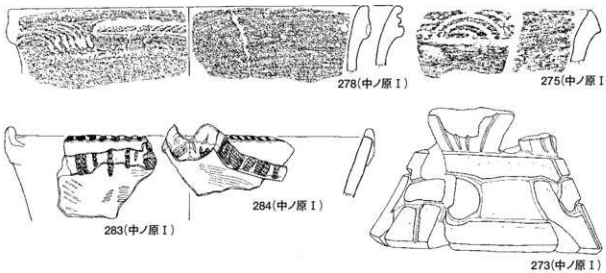


XI 類土器・・・口縁部屈曲系土器

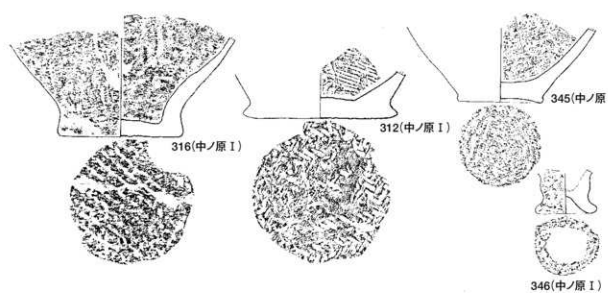


第12図　縄文土器分類図 4

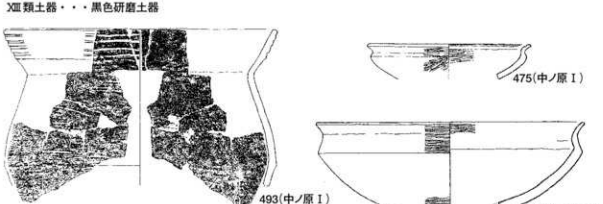
XII 類土器・・・型式不明土器



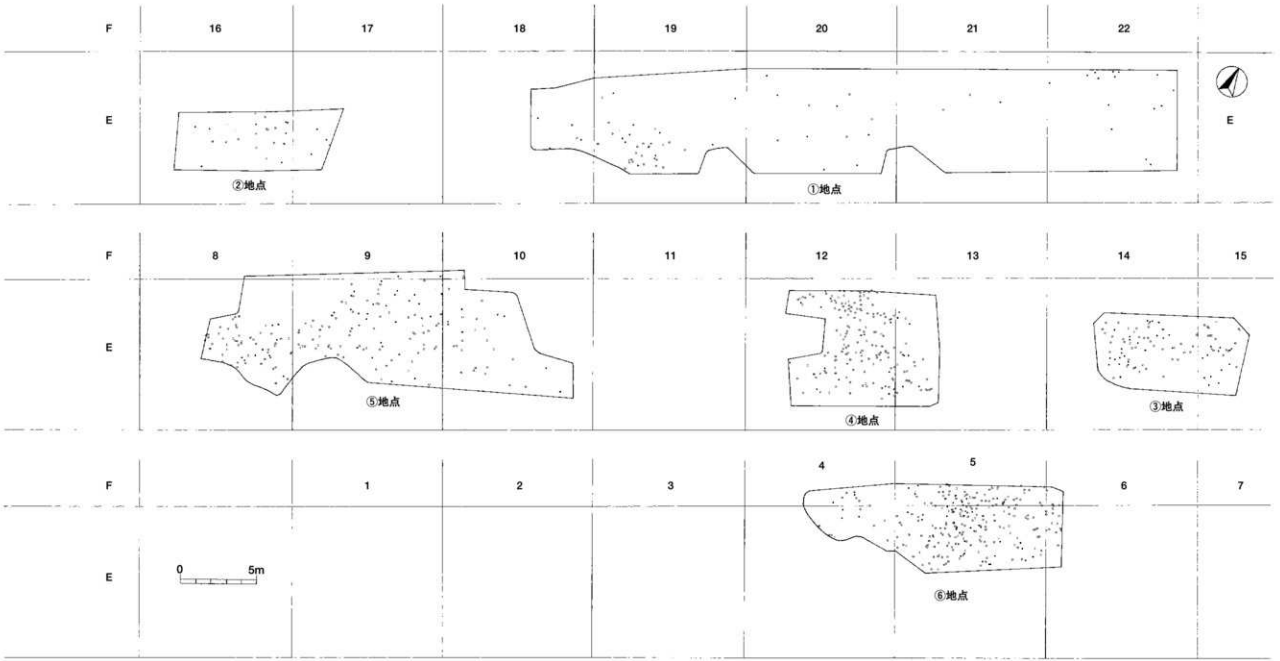
XIII 類土器・・・各種底部



XIII 類土器・・・黒色研磨土器



第13図　縄文土器分類図５



第14図　遺物出土状況図

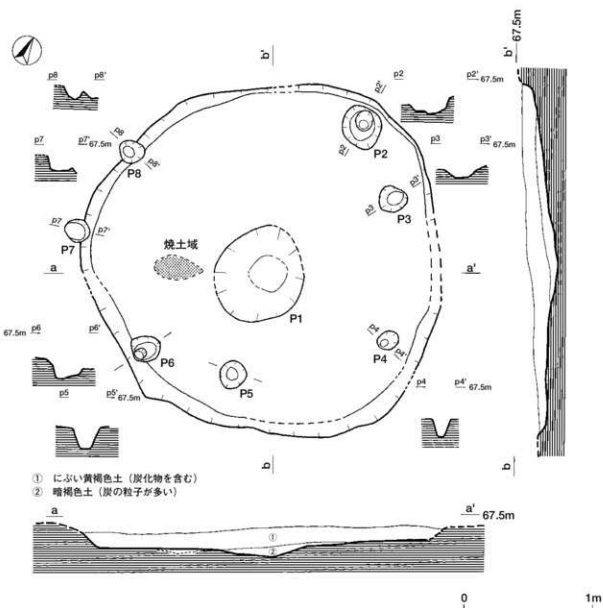
3　検出遺構及び遺構内遺物

(1)　竪穴住居跡（第15図）

竪穴住居跡はE・F－5区から検出された。第Ⅵ層上面の調査において，周囲と比較すると若干土色が濃く炭化物を含み土器も出土していた。しかし，壁の立ち上がりを示すような明確な土色の変化が現れず，竪穴住居跡であろうと判断するに至ったのはⅦ層の池田降下軽石面まで掘り下げてからであった。

平面形は円形を呈し，直径約2.7mを測る。検出面から床面までの深さは約30cmを測り，貼床はみられなかった。

P1は遺構中央部に位置し，78cm×68cmの楕円形を呈し，深さは約8cmと浅い。炭化物を多く含み，黒色の強い黒褐色で炉跡の可能性が考えられる。この黒褐色土は周囲へ広がるにつれ

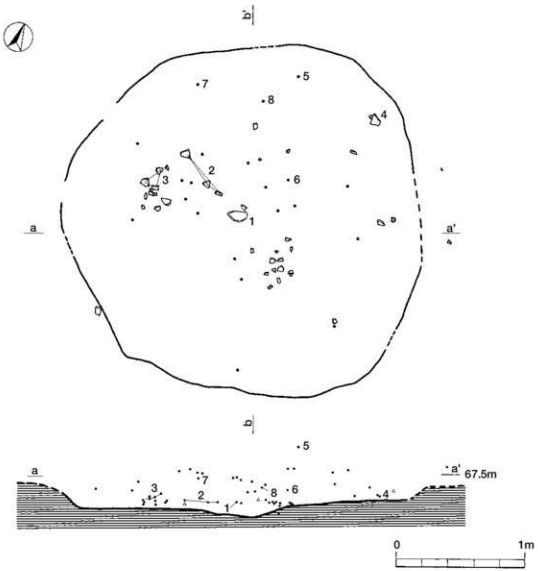


第15図　竪穴住居跡実測図1

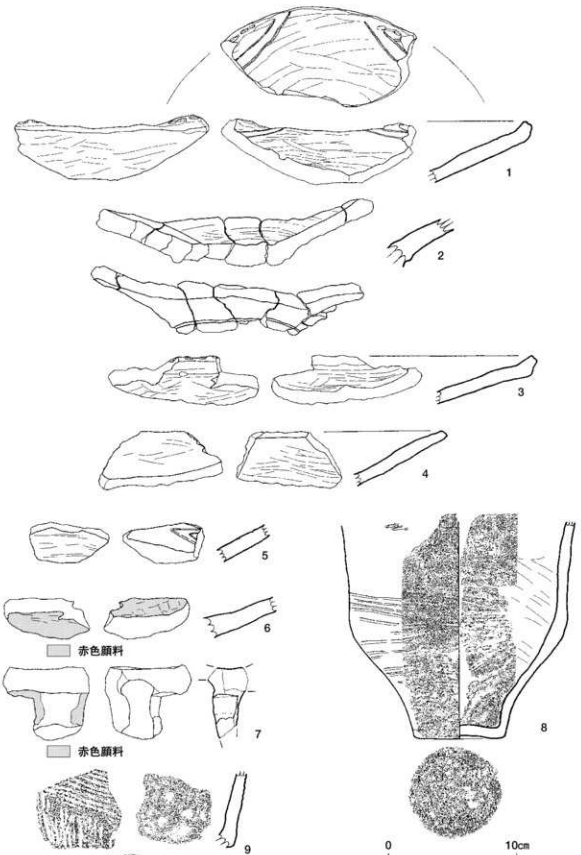
て第Ⅵ層に同化するように変化するという状況であり，明確な土色の変化が現れにくい。

Ｐ２～５は床面から検出された。Ｐ２は36cm×33cmを測る隅丸方形に近いピットで，床面からの最深部は７cmを測る。Ｐ３は22cm×21cmを測る略円形のピットで，床面からの最深部は６cmを測る。Ｐ４は18cm×15cmを測る楕円形のピットで，床面からの最深部は14cmを測る。Ｐ５は24cm×21cmを測る楕円形のピットで，床面からの最深部は16cmを測る。

Ｐ６～８は立ち上がりの壁面と切り合う位置から検出された。Ｐ６は24cm×18cmを測る略円形のピットで，最深部は，検出面から16cmを測る。Ｐ７は21cm×18cmを測る楕円形のピットで，最深部は検出面から11cmを測る。Ｐ８は20cm×18cmを測る楕円形のピットで，最深部は検出面から11cmを測る。それぞれ，竪穴住居跡に伴う柱穴であるかどうかは不明である。



第16図　竪穴住居跡遺物出土状況図１



第17図　竪穴住居跡出土遺物1

前述のように遺構検出が非常に困難であったため，遺構検出までに遺構上面をある程度カットしなければならなかった。本来の掘り込みはもっと深いものと考えられる。

北東部の壁の立ち上がりが明確に把握できないことから，詳細な復元は推定の域を出ない。しかし，平面形が略円形を呈し，床面中央部に炉跡と考えられる円形の浅い掘り込みを有し，おおよそⅦb層の黄橙色軽石層までを掘り下げていたと考えられる。

(2) 竪穴住居跡出土遺物（第17図　1～9）

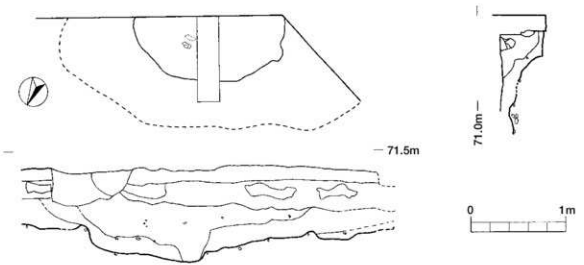
第16図は，住居跡内の遺物分布図に遺物の出土状況を表したものである。遺物は中央部付近に集中していることがわかる。また、土器の遺存状態が悪く脆いものも多く，接合できた遺物は2個体と少ない。

1～7は台付皿形土器であると考えられる。皿部は有文のものと無文のものがある。1は皿の上面観が円形を呈すると考えられる。2本の平行沈線が弧を描くように施文され，その沈線が施された範囲の口唇部は7㎜ほどの高さで突起状に盛り上げられ，連続した刺突が施される。2は皿部と脚台部の接合部分と考えられ，外面に1条の沈線が巡らされている。外面は比較的丁寧なナデ調整が施され，内面はヘラによる調整が施されている。3は皿の上面観が円形を呈すると考えられる。残存する口唇部は7㎜ほどの高さで突起状に盛り上げられ，口唇部に連続した刺突が施されている。4は皿部の一部と考えられ，ほぼ床面と思われる場所から出土した。5は外面に比較的丁寧なナデ調整を施し，内面には鋭利な器具を用いて施されたと思われる2本の平行沈線が「く」字状に施文される。6はほぼ床面と思われる位置から出土している。7は脚台部の一部と考えられる。赤色顔料が残存し，透かしの一部が確認できるが無文である。接地面は円形であると考えられる。

8は北西部の壁面寄りの場所からまとまって出土した深鉢である。口唇部や口縁部は残念ながら出土しなかったが，胴部から底部にかけて復元することができた。底部は内湾気味に立ち上がりながら大きく外反していく。底部と胴部の接合付近では器壁は7㎜と薄いが，胴部中央付近では14㎜と厚くなり口縁部下端では7㎜の厚さにもどる。底径は7.5㎝である。口縁部下端に貝殻腹縁による刺突文の一部がわずかながら確認できる。外面は貝殻条痕による斜方向の調整を施した後にナデ調整が施されている。胎土には金雲母を含む。9は底部である。外面は貝殻条痕による縦方向と斜方向の調整を施した後にナデ調整が施されている。

(3) 焼土跡

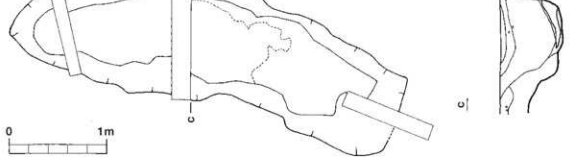
E－19・20区南側調査区境で検出された。Ⅵ層内で確認した炭化物を含む範囲である。調査区外へ広がるため全体は検出できないが，平面形は直径約150cmの略円形を呈すると考えられる。深さは最深部で検出面から約60cmを測り，Ⅶ層の池田降下軽石を含むⅥ層の混土で多量の炭化物を含み上部には10cm程度の焼土のブロックを含む。焼土の周辺のⅥ層から磨石等が出土しており，縄文時代晩期の所産であると考えられる。



第18図　焼土跡実測図

(4) 炭化木

E－19・20北側で検出された。Ⅵ層面で炭化物を含む範囲として検出した。概ね長径4ｍ，短径1.5mの楕円の範囲で炭化物を確認できたが，遺構プランを把握することが困難であった。そのためミニトレンチを設け炭化物を含む範囲を確認していたところ，検出面から深さ約50cmの部分に炭化木が検出された。炭化木は，最長部82cm，最大幅62cmで加工痕等は確認できなかった。自然木が炭化したものと思われる。



第19図　炭化木実測図

4　出土遺物

(1)　土器

昭和60年度の調査では，早期該当のⅠ類土器，前期に該当するⅡ類土器からⅤ類土器の4系統の土器群，後期に該当するⅥ類土器からⅫ類土器の7系統の土器群及びⅫ類土器の底部の一群，晩期に該当するⅩⅢ類土器が出土している。

今回の調査では，早期，前期及び晩期に該当する土器は出土していない。後期に該当する土器はⅥ類土器からⅫ類土器，底部のⅫ類土器が出土した。

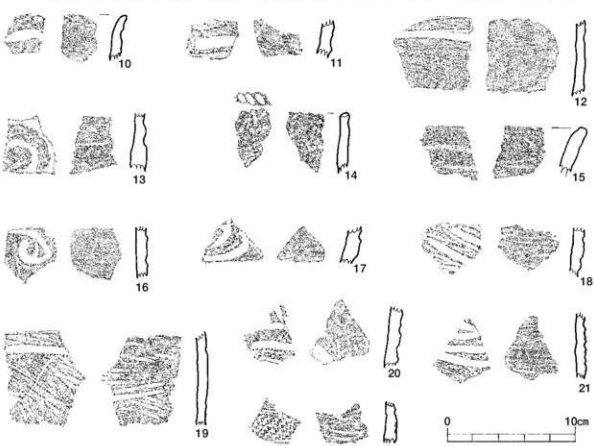
(2)　Ⅵ層出土の土器

今回の調査でⅥ層からは，後期に相当するⅥ類土器～Ⅻ類土器の7系統土器群が出土し，他にⅫ類土器の底部の一群がある。この類別を基本に順次説明する。

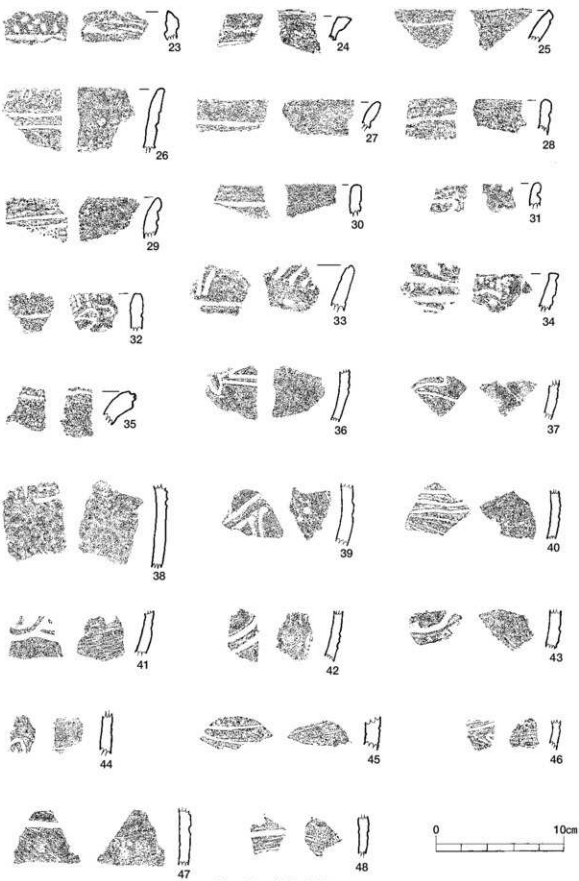
①　Ⅵ類土器（第20図　10～22）

Ⅵ類土器は，10～19で貝殻刺突文＋凹線文系土器とした系統の土器である。貝殻刺突文を口縁部の上端に1条巡らせてその下位には凹線文を展開するタイプである。口縁部上端に突帯文が巡り，突帯文上または突帯文下位に貝殻刺突が巡るタイプ，貝殻刺突に代わって竹管状の刺突文を口縁部上端に施すタイプもある。

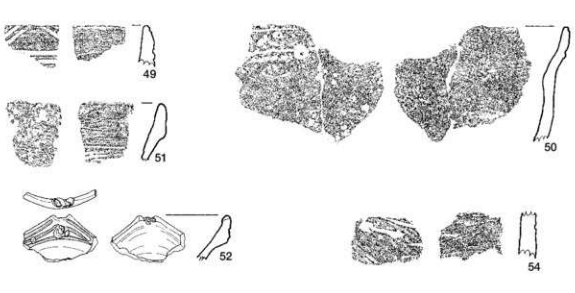
10～19は口縁部上端の貝殻刺突文は看取することはできないが，凹線文よって施文されて



第20図　縄文土器1


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
10cm

第21図　縄文土器 2



第22図　縄文土器３

いることからⅥ類土器とした。

10～13は，凹線文が８㎜程度と太いタイプである。10はやや外反して立ち上がる口縁部である。口唇部は丸味をもって納める。11は10㎜，12は６㎜～９㎜の横位の凹線文が施文されている。13は８㎜の凹線が渦文を展開している。14は口唇部に刻目が施される。15は外反する口縁部である。二本平行の浅い凹線文が施文される。17・18・19は胴部片である。４～５㎜の比較的細い凹線文で施文されている。

② Ⅶ類土器

Ⅶ類土器は，20・21・22で二本平行の凹線文間に貝殻刺突文を施文充填させるタイプである。

いずれも胴部片である。20・22は貝殻腹縁の２から３肋程度の短い施文具で平行凹線文間に斜位に押引き状に施文される。21は５肋程度の貝殻腹縁を凹線文に平行に刺突し刺突後にナデ調整を施している。

③ Ⅷ類土器

Ⅷ類土器は23～48で細形平行凹線文系土器である。形態上同一系統に括れても，同一型式とするには特徴の違いが大きい。23・24は凹線文の上部に刺突をもつものである。23は口縁部上端に刺突を巡らせる。24は口唇部に二本平行の沈線を巡らせナデ消している。口縁部上端に丸い刺突が施される。25～30は口縁部がわずかに肥厚し丸味をもって納めるもので，このタイプの一般的な口縁部である。器面には26・29は二本，25・27・28・30は一本凹線文が看取される。31は口縁部がやや細くなり丸く納める。32・33は口縁部がわずかに肥厚し丸味をもって納めるもので，32は口唇部から口縁部内側上端にかけて刻目が施される。33は口縁部内側にも文様が施文される。

小片のためはっきりと確認はできないが，これらの文様は波状口縁の山形に高くなった部分に施文されている場合が多い。34は口唇部を平たく納め，器面には三本凹線文が施文される。35は肥厚し外反する口縁部であるが，口唇部に2条の凹線文を巡らせ口唇部を凸状に納める。凸状になった部分に刺突が施される。

36～48は細形凹線文によって施文された胴部片である。

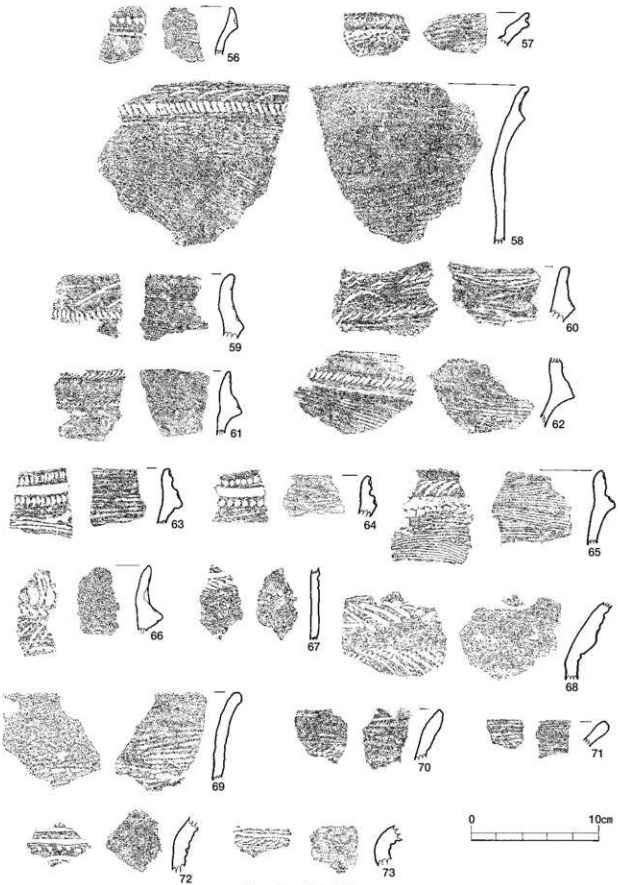
④ Ⅸ類土器

Ⅸ類土器は，肥厚口縁を呈した磨消縄文系土器である。49は口縁部が肥厚し口唇部を細く納める。肥厚口縁部に斜位の直線文と横位の直線文を組み合わせた文様を施す。50は口縁部は外反して内湾し，肥厚した口縁を呈する。肥厚口縁部は無文である。51は肥厚した口縁部で，口縁部は無文である。52・53は胴部片である。53は短線の両端に刺突文状に突いてアクセントをつけている。54は山形口縁の頂部には刻目が施され，山形口縁の幅広くなった肥厚帯には直線文に半弧文を組み合わせて主体文様をつくっている。55は頸部から胴部上半部分で頸部には，連点文状の刺突が横位に巡らされ，その下の頸部から胴部上半には，二本平行の横走する沈線文間に二本平行沈線文で三角文を描き，その間には「C」字及び「Ↄ」字状の半弧文が施文される。出土地点も近く54・55は165（中ノ原Ⅰ）と同一個体の可能性が高い。165（中ノ原Ⅰ）は胴部は球状に張り，頸部はわずかに締まり，口縁部は大きく外反して内湾肥厚した口縁をもつ形態である。口縁部は波状の山形口縁を呈し，口縁径約17cm，胴径約14．5cmの比較的小型の鉢形土器である。

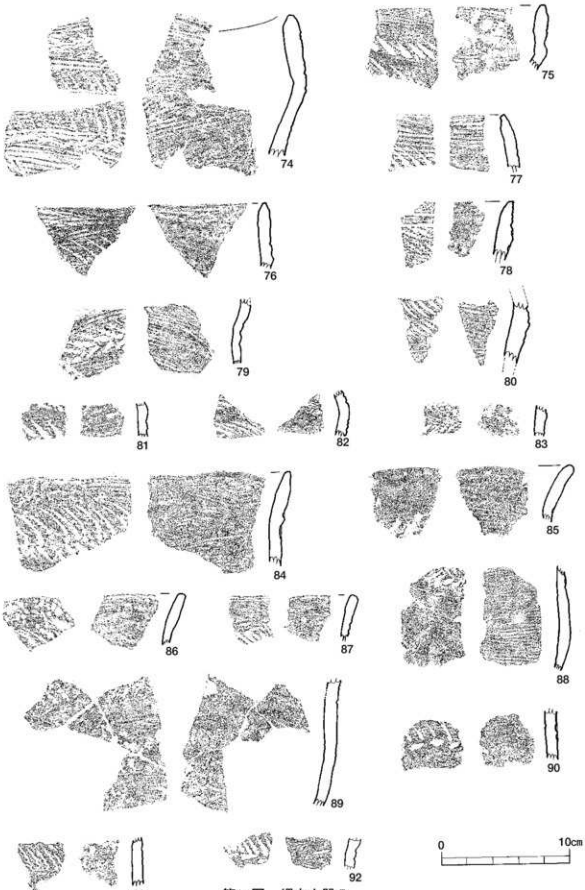
⑤ Ⅹ類土器

Ⅹ類土器は，56～73で口縁部が肥厚して屈曲するタイプである。このタイプは，口縁部に特徴がみられる。口縁部を肥厚させて断面三角形あるいは「く」の字形に形づくり，口縁外面下端には強い稜ができる。この稜を中心に文様帯がつくられる。稜と文様帯の位置で次のように区分して説明する。

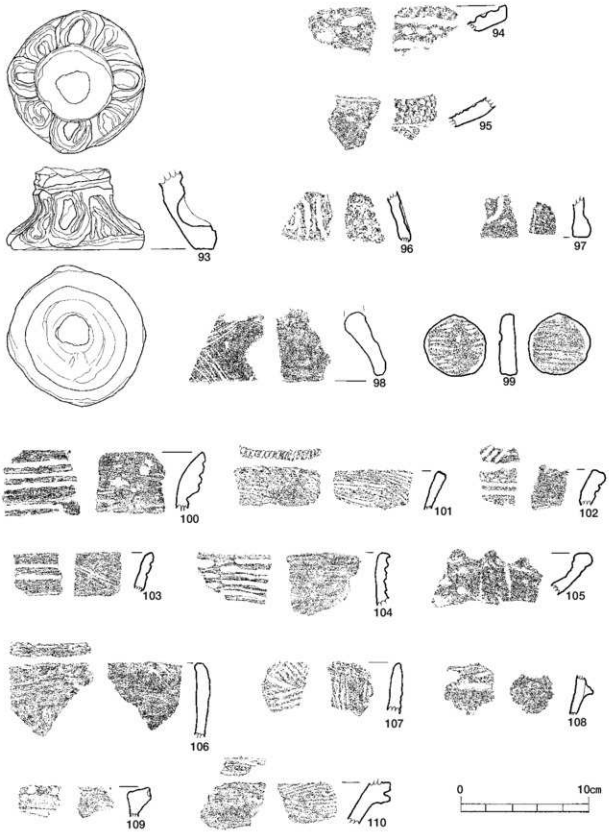
［稜の上部にのみ施文させるタイプ］56・57は刺突文のみで施文されるタイプである。56は口縁部を肥厚させ断面三角形に形づくる。稜から口唇部までが比較的短い。稜の上部に半竹管状の施文具により刺突が巡らされる。57は外反しながら開く口縁部で稜から口唇部までが約1cmと短い。稜の上部に巻き貝の先端部と思われる施文具により刺突が巡らされる。58～60は稜の上部にヘラ状の施文具で刺突文を巡らせ，その上部に貝殻腹縁による刺突文（線）で施文するタイプである。58は稜から口唇部までの文様帯が2.7cmと幅が比較的狭い。59・60は波状の山形口縁を呈する。60は稜の上部に刺突文を巡らせ，その上部に貝殻腹縁による刺突文（線）で施文し，更にその上部にヘラ状の施文具で刺突文を施す。61～65は稜の上部に刺突文（線）と凹線文で施文するタイプである。61はヘラ状施文具による細形の浅い刺突文を1.4cmと幅広の凹線文の上下に巡らせる。62は強い稜をもち稜の上部にヘラ状施文具による刺突文を施し幅広の凹線文を施す。63は7㎜と幅の狭い凹線文の上下にヘラ状の施文具による刺突を巡らせる。64は幅4㎜の凹線文の上下に半竹管のヘラ状施文具で刺突を巡らせる。65は幅7㎜の凹線文の上部に貝殻腹縁による刺突文（線）下部にヘラ状の施文具による刺突を巡らせる。



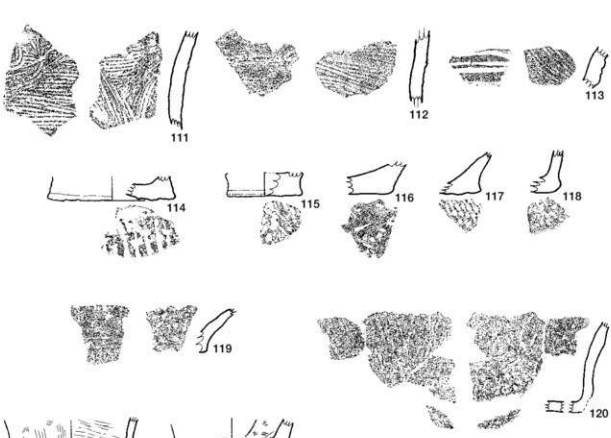
第23図　縄文土器 4



第24図　縄文土器 5


94
95
93
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
0
10cm

第25図　縄文土器 6



第26図　縄文土器 7

［稜の下部にも施文させるタイプ］66～68，72・73は稜の下部にも文様帯をもつものである。66は稜上部の凹線文帯にアクセント的に大きな刺突が施され，上下にヘラ状の施文具による刺突が巡らされる。稜の下部には貝殻腹縁による刺突文（線）が施される。67はヘラ状凹線文と刺突文が施文された胴部片である。69は稜の上部に細形凹線文の短直線文を斜位に巡らせ，短直線の端部には刺突文が施される。これは凹線文の施文具と同一のもので文様にアクセントをつけたものである。稜下部には貝殻腹縁による刺突文（線）が施される。69～71は肥厚口縁部の文様帯部分や頸部付近に文様が施文されない無文のタイプである。72・73はヘラ状凹線文と刺突文が施文された胴部片である。いずれも刺突文と凹線文は同一の施文具で施される。

⑥　XI類土器（第24図　74～92）

XI類土器は外反する口縁部が内湾して屈曲し，口縁外面に稜をつくるタイプである。口縁部は頸部から外反し途中で稜をつくって屈曲し，内湾気味に立ち上がる。口縁外面には，屈曲部の上下に貝殻腹縁の連続刺突文を施文する。このタイプには，平縁口縁と波状の山形口縁がある。さ

らに，同様の施文で屈曲せずに外反するだけのものも存在する。屈曲するタイプをⅪ－A類土器とし，外反するタイプをⅪ－B類土器に細分する。

74～78はⅪ－A類土器に該当するもので，口縁部の器壁は肥厚せず胴部壁とほぼ同じ厚さである。口縁部の形態は，74～77は波状の山形口縁である。78は小片のため確認が困難である。口縁外面の文様は，屈曲部の稜の上下に比較的長い貝殻腹縁の連続刺突文が施文される。74は貝殻刺突文と貝殻刺突文の間に貝殻腹縁による条痕文が施されナデ消されている。78は稜の上部に2本の平行する沈線を横位に施文し貝殻腹縁による刺突文（線）を施す。79～83は屈曲部の小片である。

84～87はⅪ－B類土器に該当するものである。このタイプは口縁部は屈曲せずに外反するだけのものである。口縁の形態は，いずれも平縁口縁である。口縁外面の文様は外反する頸部付近に貝殻腹縁の連続刺突文を巡らせている。その中で，84は貝殻腹縁刺突文の下位に短い貝殻腹縁刺突文を巡らせている。88～92は外反する頸部付近である。貝殻腹縁の連続刺突文を巡らせている。その中で，90は貝殻腹縁刺突文の下位に短い貝殻腹縁刺突文を，92は貝殻腹縁刺突文の下位にヘラ状刺突文を巡らせている。

⑦ Ⅻ類土器

Ⅻ類土器は，型式不明の土器を一括して説明する。93は台付皿形土器の脚部である。粘土紐を「U」字状に4箇所貼り付け，貼り付け部分の間に棒状工具によって「S」，逆「U」字状の沈線を施す。貼り付け部分の頂部にも「U」字状の沈線を施す。「U」字状に粘土紐を貼り付けた部分の上部には横位の粗い沈線を巡らす。脚の接地部分は著しく摩滅し平たくなっている。脚のほぼ全体に白土が塗彩されていたと思われる。94・95は台付皿形土器の皿部である。94は沈線の間に凹線を施す。95は細めの沈線間に多条の凹点を施している。96～98は台付皿形土器の脚部である。96は93に胎土や色調，それに白土を塗っている点などよく似ている。97は石英を多く含み，93とは異質であるが，白土がみられる点など共通性がある。98は「ハ」字状に開く器形で上部に透かしが入る。細めの沈線間を貝殻腹縁による刺突で埋める。99は円盤状土製加工品であり，直径4.5cm，重さ34.6gを測る。両面から丁寧に加工されている。細かな時期は不明であるが，器面調整や胎土から市来式土器に該当する。100は肥厚した口縁部に3条の沈線を巡らすもので，肥厚部分の下にも区画した文様を施す。101は口唇部を平に面取りし櫛状工具もしくは細かな貝殻腹縁による刻目を施すものである。102は厚めの器壁で，口唇部も広めにもつものである。口縁部に平行線が巡らされ，口唇部の一部には斜位の短線が施される。103は平行線が間隔をおいて施されるもので，口唇端部を尖りぎみに納める。104は文様帯の一部で欠損しており，肥厚部をもつかどうか分からない。短沈線を横位に施す文様構成であることから，市来式土器に含まれると思われる。105は大きく開く器形であり，口唇部に少なくとも3箇所の突起をもつ。粘土紐を貼り付けて突起をつくるが内面の方を強調している様子がうかがえる。つくりは粗いが台付皿形土器の可能性もある。106は内湾ぎみに立ち上がる口縁で丸味を帯びた口唇部をもつ。107は口縁部として提示したが摩耗しており断定はできない。108はⅥ層出土であるが突帯を巡らすもので弥生土器である可能性もある。109は口唇部に沿って台形状の突帯を巡らし，竹管状工具による刺突を施すものである。弥生土器のつくりにも似ており類例を待って判断したい。110は肥厚

部分の下半で欠損したものであり，少なくとも２条の深い沈線が巡らされる。内面に貝殻条痕がみられることから市来式土器と考えられる。

111は底部に近い部分であり，内外面とも貝殻条痕による器面調整である。外面上半は貝殻条痕による文様効果も意識している。後期中頃の土器であると考えられる。112は胴部片と思われ，微隆帯の上に貝殻腹縁を刺突するものである。類例を知らないが花崗岩質の胎土であることから後期中頃の在地のものと考えられる。113は横位に多条の沈線が巡るもので市来式土器と考えられる。

⑧ Ⅷ類土器

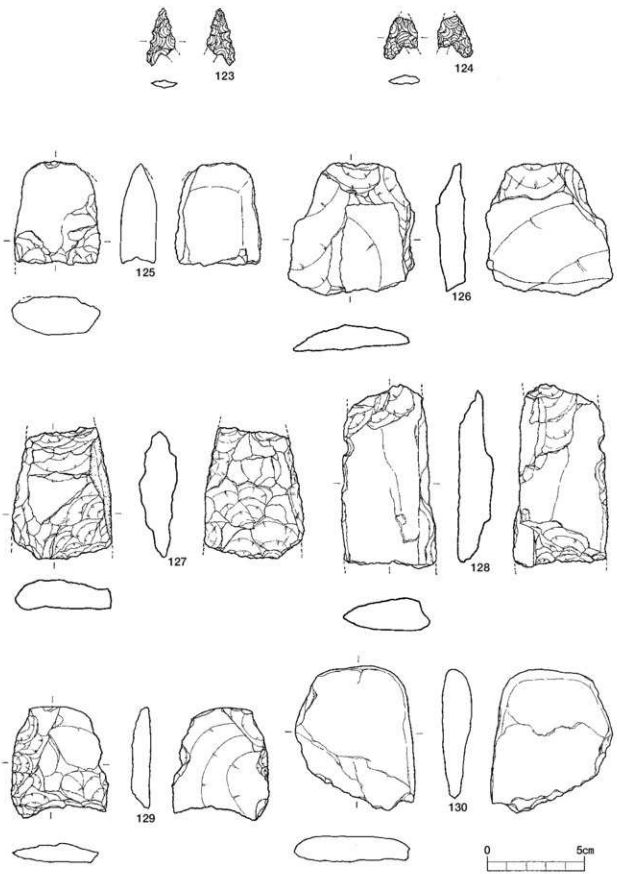
114～122は深鉢型土器の底部である。114はわずかに張りのあるもので底面に１本越え１本替わりの網代圧痕がある。115は底面に１本越え２本替わり１本送りの網代圧痕がある。116は網代痕をケズリによって消している。117は１本越え１本替わりの網代である。118は何らかの圧痕はみられるがはっきりしない。119は張りがなく大きく外反しながら胴部へいたるもので，弥生土器の可能性もある。120は縁辺が丸味を帯び直に立ち上がった後大きく外反するものである。121はやや内傾ぎみに立ち上がってから外反するものである。122は底面外周部分が厚く上げ底状になるものである。底面には白色の付着物がみられる。特に114，121，122は多い。

(3) 石器（第27～30図　123～147）

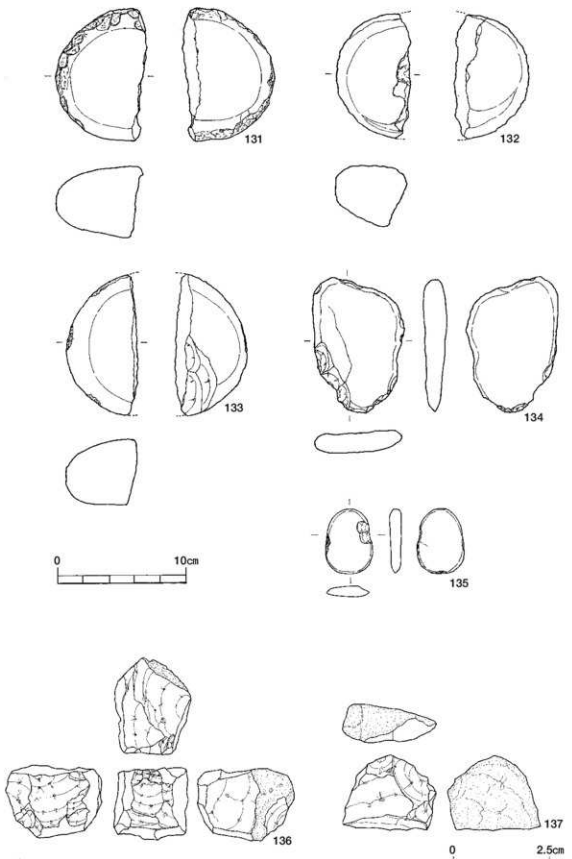
本遺跡出土の石器はⅥ層から出土しているもので，昭和61年度の調査ではアカホヤ火山灰の上層にあたり，この層からは前期と後期に該当する土器と石器などが出土している。時期は土器の分類からみてみると，Ⅱ類土器からⅤ類土器は縄文時代前期，Ⅵ類土器からⅧ類土器は縄文時代後期の土器が出土している。なお，石器は石器Ⅰ～Ⅶの７種に分類されており，どの時期に該当するか定かでないとされている。今回の調査で出土した123～147は，第Ⅵ層から出土した石器で，主体的には市来式土器や丸尾式土器などが出土している。このことから縄文時代後期に該当する時期が考えられるものである。

出土石器は，そのほとんどが欠損しているものばかりである。123・124は打製石鏃，125・128・130は磨製石斧，126・129は打製石斧で，127は片側側縁に磨面が確認できることから磨製石斧の破損品であるか局部磨製石斧の範ちゅうに入るかは不明である。131は磨石兼敲石，132は磨石や敲石そして凹石としての機能を備えた資料である。131～133は半分ほどを欠損した資料で，133は磨石を主体としたもので，用途としては一部敲石の機能を兼ね備えたものである。134は礫器，135は小形の礫器，138～146は石皿，147は砥石が考えられる資料である。

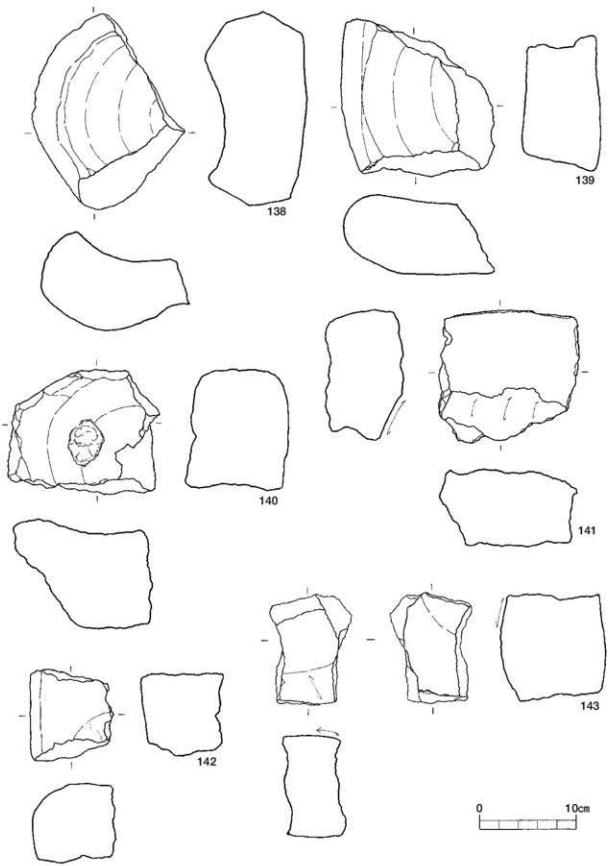
123・124は黒曜石を素材に用いた二等辺三角形状を呈する打製石鏃である。ともに，凹基式の無茎鏃で，基部の抉りはともに深く，Ⅴ字状を呈するものである。123は片脚部が，124は先端部と片脚部を欠損し，調整はともに交互剥離を施している。123の両側縁は，先端部と基部側端を結ぶ線からみてふくらみ度はあまりない。124は欠損しているため定かでないが若干のふくらみ度が認められる。125は安山岩の磨製石斧で，胴部下位から基部にかけて欠損している。さらに，刃部の一部から片側刃部側縁にかけても欠損し，刃部には使用による大小の刃こぼれが両面に確



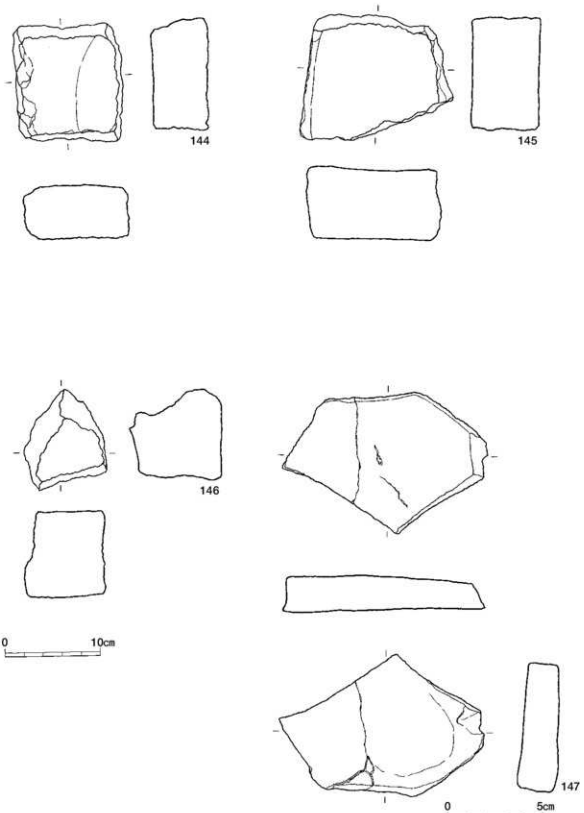
第27図　縄文石器１



第28図　縄文石器 2



第29図　縄文石器 3



第30図　縄文石器 4

認できる。128は基部や刃部，一部側縁部を欠損している破損品で，130は磨製石斧の基部である。

126は両面ともに大小の剥離痕が確認できる扁平な石器で，胴部から刃部にかけて欠損しているが，破損した打製石斧が考えられる資料である。127は両面ともに大小の剥離が顕著に認められる破損品で，残存している片側側縁の一部に磨面を認める。129は片面の一部に自然面が残る打製石斧が考えられ，大半が破損している。

131～133はともに約半分だけを残している磨石としての機能を主体としたもので，131は安山岩を，132は花崗岩を素材としたもので，両面ともに磨面が観察できる。ともに側縁に敲打痕跡が認められ，132は上面一箇所に敲打による凹面を認める。磨る・敲くなどをはじめ凹石としての機能も兼ね備えている。133は砂岩を素材としたもので，両面には丁寧な磨面を観察でき，側縁に敲打痕を認められることから敲石の機能も兼ね備えている。134は扁平で不定形な礫を素材として用いた礫器で，片側の下端から側縁にかけて簡単な大小の剥離を加えただけのものである。135は扁平で小形の自然円礫を素材として，両側の側縁に大小の剥離を施し，上縁と下縁にも敲打によると考えられる痕跡が認められる礫器である。

石核は2点出土している。136は鹿児島市吉野町の三船産の黒曜石礫を素材にし，その時得られた平坦面を打面にし，順次打面を移動しながら不定形な剥片を剥離したものとみられる。137も三船産の扁平な黒曜石礫を素材にし，平坦面を打面にし，不定形な剥片を剥離したものである。

138～146は大形扁平礫を素材として，礫の形を皿状に整えた石皿で，すべてのものが破損品である。138～142，145は安山岩を素材とした石皿で，一部に丸縁の縁辺部を形成し，一部に皿状の凹み面を認めるものである。138・139の上面観は隅丸方形の形状を呈するものと考えられるもので，138は中央部が弓状に大きく凹むもので，139はそれほどではないが弓状に凹みが観察できる。140はわずかに丸縁の縁辺部を残すが，上面からの観察では138・139などと同様な形状を呈するものである。皿部は弓状に凹部をもち，皿部の左側上部隅丸側には3×4cm，深さ1.5cm大の敲打によると考えられる凹み部が観察できるものである。141は丸縁の縁辺部を一部に残し，そのほとんどは大きく欠落し，遺残している皿部の状況から凹部は弓状に大きく凹むものと推察できる資料である。142はわずかに遺残している石皿の破片で，丸縁の縁辺部を形成しているが，皿部の凹部はわずかに観察できるものである。143は皿部を含む上面と下面の一部を残した石皿の破片で，側辺部は観察できない。144・145は板状の礫を素材とした方形状に遺残した資料で，144は丸縁状の側縁を残し，145は平面状の側縁を残したもので，ともに上面に全体には磨面が観察できる。146は石皿の小破片で，平面状の下面と丁寧な磨面をもつ皿部としての凹部が観察できる資料である。147は扁平な礫を素材とした砥石が考えられる資料で，その大半を欠損している。上面と下面ともに磨面が観察できる。

第2節　弥生時代の成果

1　調査の概要

昭和61年度の県教育委員会の調査及び，平成9年度の鹿屋市教育委員会の調査の結果，弥生時代の遺構として，4軒の竪穴式住居跡が検出されている。竪穴式住居跡の時期はいずれも弥生時代中期から後期初頭に位置づけられる山ノ口式土器を伴う時期に該当するものである。

今回の調査では遺構は検出されなかった。遺物は山ノ口式土器が出土しているものの，明らかに弥生時代に該当すると思われる石器は出土していない。また，古墳時代の可能性も残るが，弥生時代の包含層より鉄鏃が1本出土した。

2　出土遺物

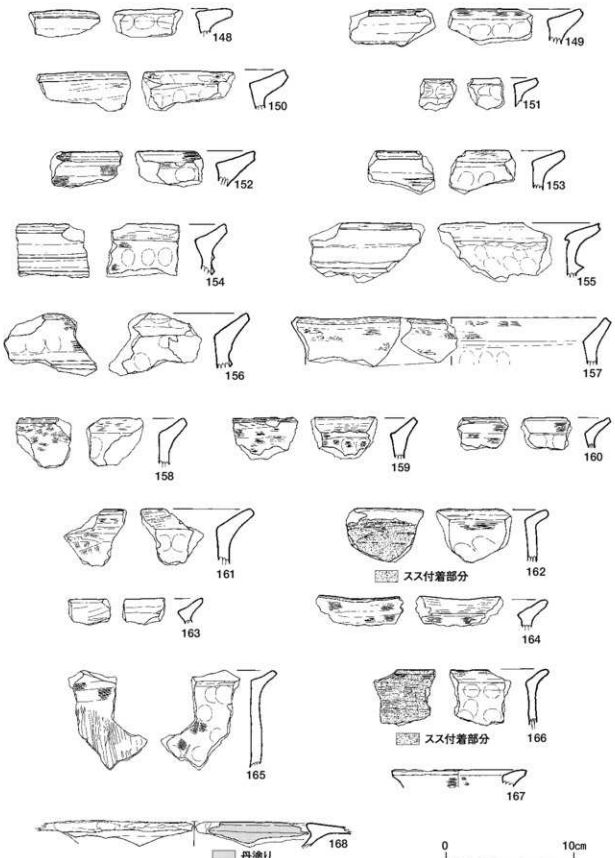
(1)　土器

土器は，大きく甕形土器，壺形土器，高坏形土器，特殊土器に分けられる。

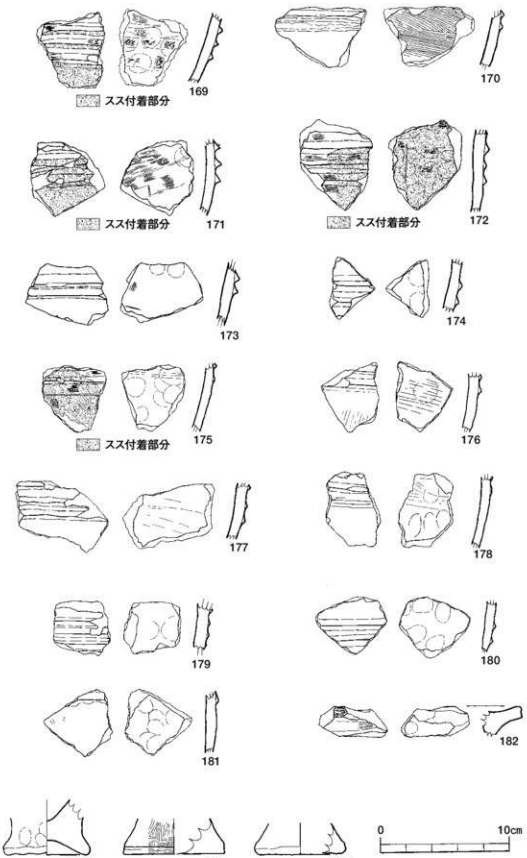
①　甕形土器（第31図　148～167，第32図　169～185）

148～167は甕形土器の口縁部である。148～160は口唇部がわずかに凹むタイプである。148は口縁部が外側に水平に拡張したもので，いわゆる逆「L」字状を呈する。口縁部外側へはさほど長く伸びない。口縁部内側が弱く張り出す。149～153は口縁部がさらに長く伸びるとともに，わずかに立ち上がりを見せ内傾する。内面は横位のナデを利用して内側への張り出しを意識しているが，まだそれほど明瞭ではない。151は口縁部外側から頸部付近にかけてユビオサエの痕跡が認められる。他のものに比べ器壁が薄く，サイズも小型である。152は口縁部上面がわずかに凹む。154・155は口縁部がさらに外側へ長く伸びるとともに，立ち上がり内傾する。154は口縁部上面がわずかに凹むとともに，口縁部直下に2条の断面三角形突帯が巡る。内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に認められる。155は口縁部が大きく伸びるが口縁部上面の凹みはみられない。外面の頸部付け根のあたりには，ハケを縦位に施した際の工具痕が明瞭に残る。頸部には1条の断面三角形突帯が巡る。内面は口縁部内側への張り出しが明瞭に認められる。粘土をつまみ出すような感じで作り出しており，頸部付け根にはユビの爪状の痕跡が認められる。他の土器の作り方とはやや異質な印象を受ける。156～161は口縁部がさらに長く伸びるとともに，立ち上がりが強くなり，いわゆる「く」字状口縁を呈するようになる。内面は内側への張り出しが認められなくなるものの，しっかりした稜線がみられる。157～159は口縁部上面が若干くぼむ。この3点の土器は色調・胎土・調整等に類似性が認められ，同一個体の可能性も考えられる。160は器壁が薄く，サイズも小さいものである。

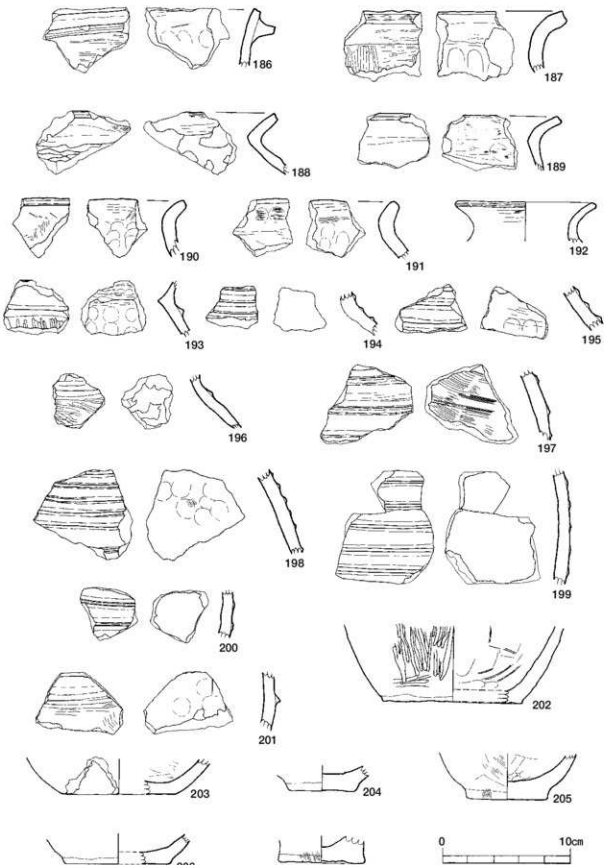
162～166は口唇部を丸く納めたものである。口縁部は「く」字状に近く立ち上がる。162・163は器壁が薄くサイズも小さい。162の外面にはススの付着が見られる。163は口縁部上面が強く凹む。163・164は口縁部内側への張り出しが認められる。165は内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。また外面には，2㎜幅程度の縦位のミガキが加えられている。他の土器より精製度の高いものである。ただし，胎土的に差は認められない。


148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
スス付着部分
162
163
164
165
スス付着部分
166
167
丹塗り
168
0
10cm

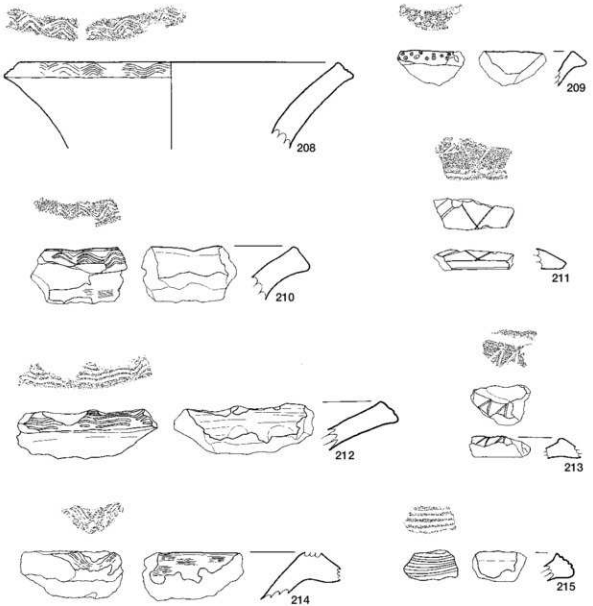
第31図　弥生土器1


スス付着部分
169
170
スス付着部分
171
スス付着部分
172
173
174
スス付着部分
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
10cm

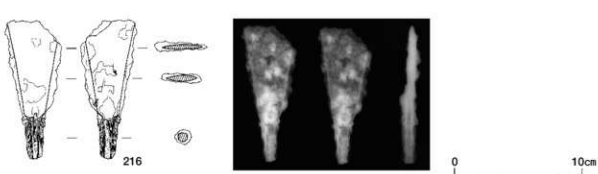
第32図　弥生土器 2


186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
0
10cm

第33図　弥生土器 3



第34図　弥生土器 4



第35図　鉄器

169～181は甕形土器の胴部片である。基本的にほぼ直立ぎみか，若干内傾して立ち上がる。外面には断面三角形の突帯が巡る。突帯は3条のものが一般的なようである。外面はナデ調整が行われている。内面は突帯を貼り付けた際の痕跡か，ユビオサエが認められる。内面はナデ調整が多いが，ハケ目調整の痕跡を残すものもみられる。特に170はハケ目調整痕が明瞭に残っている。171はハケ目調整の後にナデ調整が行われている。169・171・172・175にはススの付着が見られる。

182は一部分しか残存していないため推定の域をでないが，大甕の突帯部分と考えられるものである。一般の甕の断面三角突帯などと比べ，口縁部のように外側へ大きく伸び若干上向きに立ち上がる。口唇部が若干凹む。内面にはユビオサエの痕跡が認められる。内外面ともに丁寧なナデ調整である。

183～185は甕の底部である。183はやや上げ底を呈するもので，手づくね的に脚裾部を外側へつまみ出したような作りをしており，接地面が不安定である。外面にユビオサエの痕跡が認められる。184は安定した平底の中実脚台である。脚裾端部はナデ調整によってM字状に近く凹む。外面はハケ目が施されている。185は中実脚台と思われるが，作り的には183に近い印象を受ける。外面にはナデ調整が施されているが，粗めで雑な感じである。

② 壺形土器（第33図 186～207，第34図 208～215）

186～192は壺形土器の口縁部である。186はいわゆる二叉状口縁と呼ばれるものである。外側へ開く口縁部直下に，やや垂下ぎみに長く伸びた突帯を貼付している。口縁端部・突帯端部ともに若干凹む。外面突帯下部にはハケ目調整の痕跡が残る。187は素口縁の壺である。直立ぎみに立ち上がる頸部から外側へ折り曲げたような形態を呈する。口縁端部が若干凹む。内外面ともに丁寧なナデ調整が行われ，頸部外面には約3㎜幅の縦位のミガキが施される。内面にはユビオサエの痕跡が認められる。188～193は無頸壺と思われる。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。188・189は締まりのある頸部から口縁部が外側へ急激に開いたもので，結果として「く」字状に近い形状を呈している。190～192は頸部から口縁部を若干外側へ折り曲げたような形態を呈している。190は口縁端部に横位のナデが施され端部を四角く納める。191は端部を丸く納める。192は口縁端部を丸く納めつつも，端部中央に沈線状の凹みが見られる。193は素口縁ではなく，鋤先状に近い口縁部が付けられたものである。口縁部内側が若干張り出すとともに，口縁部上面は若干凹む。この凹みの部分には爪状の痕跡が認められることから，口縁部を若干指で曲げた可能性が考えられる。口縁部直下の頸部付け根には断面三角形突帯が1条巡り，突帯から下の胴部には約3㎜幅のミガキが施されている。このミガキは黒い線状になっており，見た目でハッキリと認識できる。内外面ともに丁寧なナデ調整である。194～196は壺の頸部である。194・195は断面三角形突帯が3条巡る。丁寧なナデ調整である。196は1条の断面三角形突帯が巡る。194・195とは形状が若干異なるものである。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。197～200は壺の胴部である。197・199・200は，断面M字状突帯が多重に巡っている。197は内面にハケ目調整の痕跡が明瞭に残る。198は多重突帯が巡っているが，突帯の断面形状がM字がつぶれたような形をしている。これらの胴部片はいずれも多重突帯壺のものと考えてよいだろう。201は器種の異な

るものである。外面に断面三角形突帯が1条巡る。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。202～207は壺の底部である。202は外面に4㎜幅程度のミガキが施されている。202・203は底部から直に外側へ大きく広がっていくもので，形状的に類似した印象を受ける。204・205は底部から若干立ち上がり，そこから外へ開くタイプである。206は204・205と同じような感じであるが，206の方が底径が大きく安定した印象を与える。207は壺に含めたが，疑問が残る。

208～215は壺の口縁部に文様の施されたものである。内外面ともに丁寧なナデ調整が行われている。208・210・212・214は，壺の口縁端部に4～5条の櫛描波状文が施されている。うち208・210・212は素口縁壺である。214は口縁端部を大きく垂下ぎみに拡張し，そこに櫛描波状文が描かれている。209は素口縁下端に断面三角突帯を貼り付けて口縁端部を拡張したところに，円形の刺突文が施されたものである。刺突文の直径は幅2㎜程度であり，中が空洞状のものであることがわかる。さらに円形の縁内面には微細な刺突状の痕跡が認められ，繊維状のものと思われる。おそらく植物質の茎状のものが施文具として使用されたものと考えられる。211・213は垂下口縁の上面に，ヘラ状工具によって沈線を鋸歯状に施したものである。215は素口縁端部を上下に拡張し，そこに4条の凹線文が施されている。

③　高坏形土器（第31図　168）

168は高坏形土器と考えられるものである。口縁部が外側へ大きくのび，若干垂れ下がるように外傾する。口縁部内側への張り出しも顕著であり，いわゆる「鍔先」状の口縁部形態をなす。口縁部内側や上面に赤色顔料の付着が認められる。器壁の調整は非常に丁寧なナデが施されている。胎土は若干石英粒や白粒の混入が認められるものの，水簸された精良な土が使用されている。北部九州の弥生中期に位置づけられている「須玖Ⅱ式土器」の高坏形土器と形状が類似する。いわゆる丹塗磨研土器である。形態的には北部九州のものと遜色がない印象を受けるが，持ち込まれたものかどうかは断定できない。今後胎土等の比較検討が必要であろう。

④　特殊土器（第31図　167）

167は特殊な器形である。器壁的には一般の甕などと変わらないが，口縁部が短く折れ曲がり逆「L」字状に近い形状をなす。内外面ともにナデが施される。口径も小さい。無頸壺の可能性も考えられるが，頸部以下の形状が不明なため，特定できない。

(2)　鉄器（第35図　216）

鉄鏃が1点出土した。Ⅲ層出土遺物ということで，弥生時代の中で説明することとする。

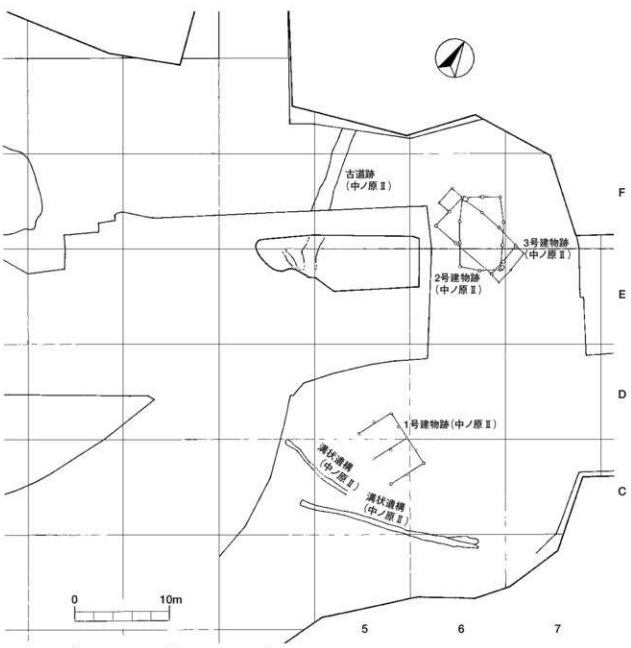
216は平根系鉄鏃である。刀部約4.7㎝，茎部約2.3㎝が残存する。矢柄の残存状況は比較的良好であり，矢柄装着痕が一部認められる。形状から判断すると平根系の中でも方頭鏃か柳葉鏃であると思われるが特定はできない。弥生時代に相当するⅢ層から出土したが，形態的には新しい雰囲気もあり時期は特定できない。

第３節　中・近世の成果

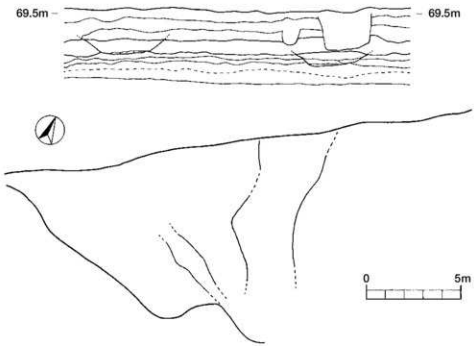
１　調査の概要

これまでの調査においても，中世から近世に該当する遺構・遺物は縄文時代などに比較すると非常に少なく断片的であり，機能や時期が不明なものが多い。前回の調査では，中世から近世に該当する遺構は，古道・溝状遺構・掘立柱建物跡等が検出されている。

今回の調査では，前回の調査でＦ・Ｇ－５区付近に南北方向に幅約1.5ｍを測る比較的しっかりした道路跡に続くと考えられる古道が検出された。そのほかに，削平を受けているため断片的な残存であるが硬化面が検出されている。



第36図　中・近世遺構配置図１



第37図　古道実測図１

古道（第37図）

古道は，E・F－4・5区に南北に向いた方向で検出されている。南側が谷部になっており，北側台地へ上る道跡である。埋土にはⅡ層の黒色土が混入している。幅約1.5mを測る比較的しっかりした道路跡である。硬化面も三層確認できる。ある程度長期に渡って使用されたこの地域の幹線道路と想定される。前回の調査で検出された古道跡（中ノ原Ⅱ）の延長部分と考えられる。

第38図　古代以降出土遺物１

出土遺物（第38図　217～220）

217は土師器の口縁部である。小片のため器種は不明である。218・219は黒色土器Ａ類の椀の口縁部と底部である。219は高台の形状が断面三角形で内外面ともヘラ磨きを施している。高台径6.8cmを測る。220は直径８㎜の花のようなスタンプが外面に押されている。火鉢の一部ではないかと思われる。

第Ⅴ章　出土遺物観察表

第４表　中ノ原遺跡縄文土器観察表（1）

挿図	番号	類別	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	色調		胎土					調整		備考
									内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
	1	X	台付皿	皿部	住居内	—	住33	—	明赤褐色	赤褐色	○	○	○		白粒	指オサエ	ヘラナデ	
	2	〃	〃	皿部	住居内	—	住10	—	明赤褐色	明赤褐色	○		○		石粒, 白粒	ヘラナデ	ヘラケズリ	
	3	〃	〃	皿部	住居内	—	住22	—	にぶい黄橙色(ススケ)	明赤褐色	○	○	○		石粒	ヘラナデ	ヘラナデ	
	4	〃	〃	皿部	住居内	—	住17	—	黄褐色	にぶい褐色	○		○		石粒	指オサエ, ヘラナデ	指オサエ, ナデ	
17	5	〃	〃	皿部	F－5	Ⅵ	1124	67.725	褐色	明赤褐色	○		○		石粒, 白粒	ナデ	板ナデ, ナデ	
	6	〃	〃	皿部	E－5	ⅥF	1402	67.387	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色(ススケ)		○	○		石粒, 白粒	指オサエ, ナデ	ヘラケズリ, ヘラナデ	赤色顔料
	7	〃	〃	脚部	F－5	ⅥF	1406	67.487	褐色	褐色	○	○	○		石粒, 白粒	ヘラケズリ	ヘラケズリ, ナデ	赤色顔料
	8	〃	深鉢	胴～底	F－5	ⅥF	1405	67.417	明赤褐色	明赤褐色				○	白粒	指オサエ, ヘラナデ	貝殻条痕, 板ナデ	
	9	〃	〃	底部	住居内	—	住30	—	にぶい黄橙色	にぶい赤褐色	○	○			石粒, 白粒	指オサエ, 板ナデ, ナデ	貝殻条痕, ナデ	
	10	Ⅵa	〃	口縁	E－18	Ⅳ	1289	70.815	にぶい褐色	灰褐色			○		白粒	ナデ	ナデ	
	11	〃	〃	口縁	E－20	Ⅵ	1588	70.401	明赤褐色	明赤褐色				○	白粒	ナデ	ナデ	
	12	〃	〃	胴部	E－20	Ⅳ	764	71.627	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○				白粒	板ナデ	板ナデ	
	13	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1233	71.237	赤褐色	赤褐色	○					板ナデ	ナデ	
	14	Ⅵb	〃	口縁	E－20	Ⅳ	747	71.532	橙色	にぶい黄橙色	○		○		白粒	ナデ	ナデ	
	15	〃	〃	口縁	E－12	Ⅶ	1810	69.634	にぶい黄橙色	橙色	○		○			板ナデ	板ナデ	
20	16	〃	〃	胴部	E－10	Ⅱ	170	68.796	にぶい褐色	にぶい黄褐色	○	○	○	○	白粒	ナデ	ナデ	
	17	〃	〃	胴部	E－22	Ⅵ	1238	71.332	暗赤褐色	黒褐色		○	○	○	白粒	ナデ	ナデ	
	18	〃	〃	胴部	E－22	Ⅶ	1716	71.224	にぶい褐色	にぶい黄褐色	○		○		白粒, 軽石	板ナデ	板ナデ	
	19	〃	〃	胴部	F－6	Ⅱ	485	68.661	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		○	○			貝殻条痕, 板ナデ	貝殻条痕, 板ナデ	
	20	Ⅶ	〃	胴部	E－9	Ⅳ	554	68.329	にぶい黄褐色	明赤褐色			○	○	白粒	ナデ	ナデ	
	21	〃	〃	胴部	E－15	Ⅵ	1779	69.477	にぶい赤褐色	暗赤褐色	○					板ナデ	板ナデ, ナデ	
	22	〃	〃	胴部	E－9	Ⅳ	519	68.498	明赤褐色	にぶい赤褐色			○	○	白粒	板ナデ	ナデ	
	23	Ⅶ	〃	口縁	E－21	Ⅳ	768	71.627	赤褐色	赤褐色		○	○		白粒	貝殻条痕, ナデ	ナデ	
	24	〃	〃	口縁	E－12	Ⅴ	1556	69.885	にぶい褐色	橙色		○	○		石粒, 赤粒	指オサエ, 板ナデ	ナデ	
	25	〃	〃	口縁	E－17	Ⅵ	1592	70.415	灰褐色	橙色		○		○	白粒	板ナデ	ナデ	
	26	〃	〃	口縁	E－5	Ⅵ	1104	67.635	暗灰黄色	にぶい黄橙色		○	○	○	白粒, 5㎜	ヘラナデ	ヘラケズリ, ナデ	
	27	〃	〃	口縁	E－16	Ⅴ	1493	69.495	にぶい黄色	にぶい黄橙色	○		○		石粒, 白粒	指オサエ, ヘラナデ	指オサエ, 板ナデ	
	28	〃	〃	口縁	E－14	Ⅵ	1782	69.153	にぶい褐色	灰褐色		○	○		白粒	板ナデ	板ナデ	
	29	〃	〃	口縁	E－16	Ⅴ	1505	69.395	にぶい橙色	にぶい橙色			○	○	白粒	ナデ	ナデ	
	30	〃	〃	口縁	E－14	Ⅵ	1756	69.260	橙色	橙色		○	○		白粒	ナデ	ナデ	
	31	〃	〃	口縁	E－14	Ⅶ	1659	69.269	橙色	灰褐色	○				白粒	ナデ	ナデ	
	32	〃	〃	口縁	E－19	Ⅲ	699	69.939	橙色	橙色		○	○	○	白粒	ナデ	ナデ	
	33	〃	〃	口縁	E－9	Ⅱ	188	68.746	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○				石粒, 白粒, 軽石, 7㎜	ナデ	ナデ	
21	34	〃	〃	口縁	E－14	Ⅵ	1760	69.302	明赤褐色	赤褐色			○			ナデ	板ナデ	
	35	〃	〃	口縁	E－14	Ⅶ	1670	69.195	にぶい橙色	橙色	○		○			ナデ	ナデ	
	36	〃	〃	胴部	E－16	Ⅵ	1581	70.377	灰褐色	明赤褐色		○	○		白粒	ナデ	ナデ	
	37	〃	〃	胴部	E－14	Ⅶ	1674	69.355	にぶい赤褐色	灰褐色	○		○		白粒	ナデ	板ナデ	
	38	〃	〃	胴部	E－12	Ⅵ	1565	69.830	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○	○		白粒	ヘラナデ	ナデ	
	39	〃	〃	胴部	E－16	Ⅴ	15025	69.420	にぶい黄褐色	灰褐色	○		○	○	白粒, 砂粒	板ナデ	ナデ	
	40	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1209	71.307	にぶい黄橙色	にぶい赤褐色	○	○			白粒	板ナデ	貝殻条痕, ナデ	
	41	〃	〃	胴部	E－12	Ⅶ	1825	69.759	にぶい黄橙色	黒褐色			○		白粒	貝殻条痕, ナデ	ナデ	
	42	〃	〃	胴部	E－12	Ⅴ	1543	69.805	にぶい褐色	にぶい赤褐色		○	○	○	石粒, 白粒	ナデ	ナデ	
	43	〃	〃	胴部	F－16	Ⅴ	1487	69.515	明赤褐色	明赤褐色			○	○	石粒, 白粒	ナデ	ナデ	
	44	〃	〃	胴部	E－16	Ⅴ	1500	69.465	にぶい橙色	にぶい褐色	○	○			白粒	板ナデ	板ナデ, ナデ	
	45	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1190	71.332	赤褐色	灰褐色		○		○	白粒	板ナデ	ナデ	
	46	〃	〃	胴部	E－15	Ⅶ	1681	69.435	赤褐色	灰褐色	○	○	○		白粒	板ナデ	板ナデ	

第４表　中ノ原遺跡縄文土器観察表（2）

挿図	番号	類別	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	色調		胎土				調整		備考
									内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
21	47	Ⅶ	深鉢	胴部	E－14	Ⅶ	1673	69.290	明赤褐色	赤褐色	○		○		白粒	板ナデ	板ナデ	
	48	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1214	71.287	赤褐色	灰褐色			○		白粒	板ナデ	板ナデ	
	49	Ⅸ	深鉢	口縁	E－9	Ⅵ	1350	68.311	赤褐色	にぶい褐色	○	○				板ナデ ヘラナデ	ヘラナデ	
	50	〃	〃	口縁	E－10	Ⅴ	1375	68.361	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	○	○				ヘラナデ	ナデ	内面にスス
	51	〃	〃	口縁	E－21	Ⅴ	1258	71.332	褐灰色	明赤褐色	○	○				貝殻条痕ナデ	板ナデ ナデ	
22	52	〃	〃	胴部	E－10	Ⅳ	503	68.714	赤褐色	赤褐色		○			白粒	ヘラナデ	ナデ	
	53	〃	〃	胴部	E－5	Ⅱ	428	68.676	にぶい黄橙色	橙色	○	○			白粒	ナデ	ナデ	
	54	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1187	71.387	にぶい橙色	にぶい褐色	○				白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	55	〃	〃	口縁	E－5	Ⅵ	1080	67.720	灰褐色	橙色	○	○				ヘラナデ	ナデ	
	56	Ⅹ	〃	口縁	E－21	Ⅳ	754	71.567	黒色	暗赤褐色	○					板ナデ	ヘラナデ	
	57	〃	〃	口縁	E－14	Ⅵ	1768	69.085	黒色	橙色					白粒	ヘラナデ	ヘラナデ	
	58	〃	〃	口縁	E－4	Ⅵ	1166	67.935	明赤褐色	橙色		○		○	白粒	貝殻条痕	貝殻条痕	
	59	〃	〃	口縁	E－1	Ⅵ	1697	—	明赤褐色	明赤褐色				○	白粒	貝殻条痕ナデ	ナデ	
	60	〃	〃	口縁	E－22	Ⅴ	1216	71.192	明赤褐色	明赤褐色		○		○	白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	61	〃	〃	口縁	E－5	Ⅵ	1149	67.825	暗赤褐色	赤褐色	○				白粒	ハケ,ナデ	ナデ	
	62	〃	〃	口縁	E－22	Ⅵ	1178	71.262	明赤褐色	暗赤褐色	○				白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	63	〃	〃	口縁	E－22	Ⅴ	1240	71.142	赤褐色	明赤褐色	○					貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
23	64	〃	〃	口縁	E－21	Ⅴ	1277	71.187	赤褐色	暗赤褐色	○		○			貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	65	〃	〃	口縁	E－20	Ⅳ	749	71.527	赤褐色	暗赤褐色		○			白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	66	〃	〃	口縁	E－5	Ⅵ	1091	68.005	明褐色	橙色	○	○				ナデ	ナデ	
	67	〃	〃	胴部	E－12	Ⅶ	1813	69.767	明赤褐色	明赤褐色		○			白粒	ナデ	貝殻条痕ナデ	
	68	〃	〃	胴部	E－5	Ⅵ	1146	67.965	橙色	褐色	○				白粒	貝殻条痕ナデ	ナデ	
	69	〃	〃	口縁	E－12	Ⅴ	1530	69.840	灰褐色	暗赤褐色	○	○			白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	70	〃	〃	口縁	E－19	Ⅵ	1603	70.832	赤褐色	にぶい赤褐色	○	○				貝殻条痕	貝殻条痕	
	71	〃		底部	E－22	Ⅴ	1247	71.322	橙色	にぶい橙色	○	○				板ケズリナデ	ナデ	
	72	〃	〃	胴部	E－21	Ⅴ	1269	71.252	にぶい赤褐色	灰褐色		○	○			ナデ	ナデ	
	73	〃	〃	胴部	F－16	Ⅴ	1497	69.410	赤褐色	赤褐色	○	○			小石粒, 6mm	ナデ	ナデ	
	74	Ⅺa	〃	口縁	E－9	Ⅵ	1466	71.451	赤褐色	にぶい赤褐色		○		○	白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	75	〃	〃	口縁	E－9	Ⅵ	1345	68.376	赤褐色	黒色				○	滑石, 白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕板ナデ	
	76	〃	〃	口縁	E－22	Ⅴ	1204	71.392	明赤褐色	明赤褐色		○		○	白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	77	〃	〃	口縁	E－10	Ⅴ	547	68.489	橙色	明赤褐色	○		○		白粒	貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	78	〃	〃	口縁	E－20	Ⅳ	743	71.407	明赤褐色	明赤褐色	○	○			白粒	板ナデ	板ナデ	
	79	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1205	71.392	暗赤褐色	暗赤褐色	○	○	○			貝殻条痕ナデ	貝殻条痕ナデ	
	80	〃	〃	胴部	E－22	Ⅵ	1626	71.234	明赤褐色	赤褐色	○		○	○	白粒	貝殻条痕板ナデ	板ナデ	
	81	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1212	71.357	褐色	にぶい赤褐色		○	○			ナデ	貝殻条痕ナデ	
	82	〃	〃	胴部	E－20	Ⅳ	765	71.617	暗赤褐色	黒褐色				○	滑石, 白粒	板ナデ	ナデ	
24	83	〃	〃	胴部	E－22	Ⅵ	1640	71.244	赤褐色	赤褐色	○	○			白粒	ナデ	板ナデ	
	84	Ⅺb	〃	口縁	F－5	Ⅳ	1054	68.025	橙色	橙色	○	○	○		茶粒, 白粒	指オサエ板ナデ	板ナデ	
	85	〃	〃	口縁	E－16	Ⅴ	1519	69.320	橙色	にぶい褐色	○	○			白粒	板ナデ	板ナデ	
	86	〃	〃	口縁	E－9	Ⅳ	513	68.352	黒褐色	橙色	○	○				ヘラナデ	ナデ	
	87	〃	〃	口縁	E－10	Ⅳ	508	68.533	にぶい赤褐色	明赤褐色	○	○			白粒	板ナデ	板ナデ	
	88	〃	〃	胴部	E－12	Ⅴ	1546	69.850	赤褐色	赤褐色	○	○	○	○	白粒	貝殻条痕板ナデ	板ナデ	
	89	〃	〃	胴部	E－21	Ⅳ	756	71.507	黒褐色	明赤褐色	○	○			白粒	指オサエケズリ,ナデ	ナデ	
	90	〃	〃	胴部	E－12	Ⅴ	1555	69.910	明赤褐色	にぶい赤褐色		○		○	白粒	板ケズリ	ナデ	
	91	〃	〃	胴部	E－10	Ⅵ	578	68.524	赤褐色	灰褐色	○			○	滑石	板ケズリ	ナデ	
	92	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1184	71.417	にぶい赤褐色	暗赤褐色		○				板ケズリ	ナデ	

第４表　中ノ原遺跡縄文土器観察表（3）

挿図	番号	類別	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	色調		胎土					調整		備考
									内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
	93	Ⅻ	台付皿	脚部	E－22	Ⅴ	1234	71.212	赤褐色	赤褐色				○	白粒	板ナデ	ナデ	
	94	〃	〃	皿部	E－14	Ⅳ	927	68.320	明赤褐色	にぶい黄橙色	○			○	砂粒	ナデ	ナデ	
	95	〃	〃	皿部	E－10	Ⅴ	544	68.454	明赤褐色	赤褐色	○		○			ヘラナデ	板ナデ	
	96	〃	〃	底部	E－20	Ⅳ	742	71.347	灰褐色	にぶい褐色					白粒	板ナデ	指オサエ	
	97	〃	〃	脚部	E－16	Ⅴ	1494	69.455	明赤褐色	橙色	○		○		ガラス	板ナデ	ナデ	
	98	〃	〃	脚部	E－22	Ⅴ	1286	71.292	橙色	橙色	○		○			指オサエ ナデ	ナデ	
	99	〃	メンコ	—	④地	—	—	—	褐色	灰褐色	○		○	○	白粒	板ナデ	貝殻条痕 ナデ	
	100	〃	深鉢	口縁	E－22	Ⅴ	1235	71.377	明赤褐色	明赤褐色		○	○		白粒	板ナデ	板ナデ	
25	101	〃	〃	口縁	E－12	Ⅵ	1573	69.785	明赤褐色	黒褐色		○		○	白粒	板ナデ	板ナデ	
	102	〃	〃	口縁	—	撹乱	一括	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○		○			板ナデ	ナデ	
	103	〃	〃	口縁	—	撹乱	一括	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○				白粒	ナデ	ナデ	
	104	〃	〃	口縁	F－16	Ⅴ	1484	69.490	赤褐色	赤褐色	○		○		白粒	板ナデ	ナデ	
	105	〃	〃	口縁	E－12	Ⅳ	1542	69.800	にぶい黄褐色	にぶい褐色	○		○		白粒	指オサエ ナデ	指オサエ ナデ	
	106	〃	〃	口縁	E－22	Ⅴ	1186	71.352	橙色	橙色	○		○			指オサエ 板ナデ	指オサエ 板ナデ	
	107	〃	〃	口縁	E－19	Ⅶ	1704	70.923	赤褐色	にぶい赤褐色		○			軽石, 3mm 白粒	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	
	108	〃	〃	胴部	E－6	Ⅵ	1073	67.875	明赤褐色	明赤褐色		○		○		白粒	ナデ	ナデ
	109	〃	〃	口縁	E－16	Ⅴ	1499	69.400	にぶい褐色	赤褐色	○	○	○			板ナデ	板ナデ	
	110	〃	〃	胴部	E－22	Ⅴ	1232	71.382	にぶい黄橙色	灰褐色					石粒, 白粒	貝殻条痕 ナデ	ナデ	
	111	Ⅻ	〃	胴部	E－16	Ⅵ	1585	70.449	明赤褐色	暗赤褐色	○		○		小石粒, 3mm	貝殻条痕	貝殻条痕	
	112	〃	〃	胴部	E－12	Ⅲ	1039	69.385	にぶい橙色	明赤褐色	○		○		白粒, 石粒	貝殻条痕 ナデ	板ナデ ヘラナデ	
	113	〃	〃	胴部	E－5	Ⅵ	1137	67.890	赤褐色	赤褐色	○			○	白粒	貝殻条痕	ナデ	
	114	〃	〃	底部	E－8	Ⅵ	614	68.254	灰赤色	にぶい赤褐色	○				小石粒	板ナデ	指オサエ 板ナデ	
	115	〃	〃	底部	E－16	Ⅴ	1517	69.370	にぶい橙色	灰褐色			○		小石粒	板ナデ	板ナデ	
26	116	〃	〃	底部	E－13	Ⅴ	1561	69.945	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	○		○		白粒, 石粒	板ナデ	板ナデ 指オサエ	
	117	Ⅻ	〃	底部	E－19	Ⅵ	1298	71.005	橙色	橙色			○			板ケズリ	板ナデ	
	118	〃	〃	底部	E－20	Ⅳ	742	71.347	灰褐色	にぶい褐色		○			白粒	板ナデ	指オサエ 板ナデ	
	119	〃	〃	底部	E－22	Ⅵ	1620	71.249	橙色	橙色	○					板ナデ	板ナデ ヘラケズリ	
	120	〃	〃	底部	E－5	Ⅵ	1404	67.377	赤褐色	明赤褐色	○			○	小石粒	指オサエ 板ナデ	指オサエ ヘラケズリ→ヘラナデ	
	121	〃	〃	底部	E－19	Ⅵ	1291	70.995	赤褐色	にぶい赤褐色				○	小石粒, 3mm	貝殻条痕	貝殻条痕 板ナデ	
	122	〃	〃	底部	E－22	Ⅴ	1247	71.322	橙色	にぶい橙色	○	○				板ケズリ ナデ	ナデ	

第５表　中ノ原遺跡弥生土器観察表（1）

挿図	番号	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	色調		胎土					調整		備考
								内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
	148	甕	口縁	E－9	Ⅱ	199	68.691	暗褐色	灰褐色					小石	指オサエ	ナデ	
	149	〃	口縁	E－9	Ⅱ	183	68.621	橙色	橙色		○	○	○	石粒	指オサエ ナデ, ハケ	ナデ	
	150	〃	口縁	E－13	Ⅱ	880	69.180	黄橙色	にぶい橙色	○	○	○	○	石粒	指オサエ ナデ, ハケ	ハケ, ナデ	
	151	〃	口縁	E－12	Ⅱ	819	69.410	にぶい黄褐色	灰黄褐色			○		白粒	指オサエ	指オサエ ハケ	
	152	〃	口縁	E－12	Ⅲ	1007	69.265	明赤褐色	赤褐色				○		指オサエ ハケ, ナデ	ハケ, ナデ	
31	153	〃	口縁	E－9	Ⅱ	232	68.776	にぶい橙色	灰黄褐色			○	○	白粒, 石粒	指オサエ ハケ	ナデ, ハケ	
	154	〃	口縁	E－12	Ⅲ	1016	69.345	にぶい黄橙色	橙色	○		○		白粒	指オサエ ハケ, ナデ	ナデ	
	155	〃	口縁	E－9	Ⅱ	189	68.746	黒褐色	暗赤褐色	○	○			石粒	指オサエ ハケ	ナデ, ハケ	
	156	〃	口縁	E－13	Ⅱ	869	69.340	明赤褐色	橙色		○			白粒	指オサエ ハケ	指オサエ ナデ, ハケ	
	157	〃	口縁	E－14	Ⅲ	903	68.675	にぶい橙色	にぶい橙色	○		○		石粒	指オサエ ハケ, ナデ	ナデ	
	158	〃	口縁	E－15	Ⅲ	908	68.550	橙色	橙色			○		石粒	指オサエ ハケ	ハケ, ナデ	
	159	〃	口縁	E－14	Ⅲ	887	68.495	にぶい橙色	にぶい橙色	○	○			石粒	指オサエ ハケ, ナデ	ハケ, ナデ	

第５表　中ノ原遺跡弥生土器観察表（2）

棟図	番号	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	色調		胎土					調整		備考
								内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
	160	甕	口縁	E－6	Ⅱ	484	68.956	にぶい黄橙色	橙色				○	石粒	指オサエ ハケ, ナデ	ハケ, ナデ	
	161	〃	口縁	F－10	Ⅱ	169	68.881	にぶい橙色	にぶい橙色			○		石粒	指オサエ ハケ	ナデ, ハケ	
	162	〃	口縁	E－9	Ⅱ	285	68.646	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○				指オサエ ハケ	ハケ	スス
	163	〃	〃	E－12	Ⅱ	829	69.410	にぶい褐色	灰褐色	○				茶粒, 小石	ハケ	ハケ	
31	164	〃	口縁	E－14	Ⅲ	898	68.522	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○					ナデ, ハケ	ナデ, ハケ	
	165	〃	口縁	E－14	Ⅳ	946	68.500	にぶい橙色	にぶい黄橙色	○				石粒	指オサエ ナデ, ハケ	ハケ, ナデ ミガキ	
	166	〃	口縁	E－12	Ⅲ	1040	69.360	橙色	にぶい黄橙色			○		石粒	指オサエ ハケ, ナデ	ナデ, ハケ	スス
	167	〃	口縁	E－6	Ⅱ	482	68.961	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		○				ナデ	ナデ	
	168	〃	口縁	E－14	Ⅳ	734	70.449	にぶい褐色	橙色	○				白粒	ナデ	ナデ	丹塗り
	169	〃	胴部	E－14	Ⅳ	947	68.495	にぶい橙色	橙色					石粒, 2～4㎜	指オサエ ハケ, ナデ	ナデ	スス
	170	〃	胴部	E－12	Ⅳ	1848	70.044	にぶい赤褐色	褐色			○	○	白粒	ハケ	ナデ	
	171	〃	胴部	E－13	Ⅱ	883	69.200	にぶい橙色	にぶい橙色	○		○		石粒	指オサエ ナデ, ハケ	ナデ	スス
	172	〃	胴部	E－18	Ⅲ	688	71.160	にぶい黄橙色	浅黄橙色	○				石粒	指オサエ ハケ, ナデ	ナデ	
	173	〃	胴部	F－5	Ⅱ	432	68.771	橙色	橙色	○		○		石粒	指オサエ ハケ	ナデ	
	174	〃	胴部	E－8	Ⅱ	306	68.721	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		○	○	○		指オサエ	ナデ	
	175	〃	胴部	E－9	Ⅱ	258	68.701	褐色	にぶい赤褐色			○	○	白粒	指オサエ ハケ	ハケ, ナデ	スス
	176	〃	胴部	E－12	Ⅲ	1032	69.335	橙色	にぶい赤褐色			○	○	石粒	指オサエ ハケ	ハケ, ナデ	
32	177	〃	胴部	E－12	Ⅲ	1004	69.405	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色		○		○	白粒	ハケ	ナデ	
	178	〃	胴部	E－5	Ⅱ	408	68.716	にぶい黄褐色	褐灰色				○	白粒	指オサエ ハケ	ハケ, ナデ	
	179	〃	胴部	F－6	Ⅱ	468	68.860	にぶい褐色	褐灰色		○		○	白粒	指オサエ	ナデ	
	180	〃	胴部	E－12	Ⅲ	1000	69.490	橙色	にぶい黄橙色		○	○		石粒	指オサエ	ナデ	
	181	〃	胴部	E－9	Ⅱ	290	68.646	にぶい黄褐色	にぶい褐色	○	○		○		指オサエ	ハケ, ナデ	
	182	大甕	胴部	E－6	Ⅱ	489	68.961	明赤褐色	橙色				○		指オサエ	ハケ, ナデ	
	183	〃	〃	E－5	Ⅵ	1112	67.755	にぶい赤褐色	赤褐色	○	○	○			—	指オサエ ナデ	
	184	甕	底部	E－9	Ⅱ	208	68.676	明赤褐色	橙色			○			—	ハケ	
	185	〃	〃	F－6	Ⅱ	488	69.141	橙色	橙色	○	○				—	ナデ	
	186	壺	胴部	E－8	Ⅱ	326	68.621	橙色	灰褐色			○	○	白粒	指オサエ ハケ	ハケ	
	187	〃	〃	E－14	Ⅲ	896	68.510	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○				指オサエ ハケ	ミガキ, ハケ	
	188	〃	〃	E－6	Ⅱ	481	68.761	赤褐色	明赤褐色		○	○		白粒	ナデ, ハケ	ナデ, ハケ	
	189	〃	〃	E－13	Ⅱ	860	69.220	橙色	にぶい褐色		○	○			指オサエ ナデ, ハケ	ナデ	
	190	〃	〃	E－6	Ⅱ	477	68.646	明赤褐色	橙色			○			指オサエ ハケ	ハケ	
	191	〃	〃	E－14	Ⅳ	943	68.460	にぶい褐色	にぶい褐色					茶粒	指オサエ ハケ	指オサエ ハケ, ナデ	
	192	〃	〃	E－14	Ⅳ	916	68.330	明褐色	にぶい赤褐色		○		○		ヘラナデ	ハケ	
	193	〃	〃	E－14	Ⅳ	945	68.495	にぶい褐色	褐灰色	○				茶粒	指オサエ ハケ	ミガキ	
	194	〃	〃	E－5	Ⅱ	406	68.821	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	○	○			白粒	—	ナデ	
	195	〃	〃	E－10	Ⅱ	161	68.826	褐色	褐色	○			○	白粒	指オサエ ハケ	ナデ	
33	196	壺	胴部	E－12	Ⅱ	803	69.155	にぶい橙色	にぶい橙色					茶粒	—	ハケ, ミガキ	
	197	〃	〃	E－12	Ⅱ	852	69.180	にぶい赤褐色	灰赤色				○	白粒	ハケ	ハケ, ナデ	
	198	〃	〃	F－5	Ⅱ	466	68.901	にぶい橙色	にぶい橙色	○				白粒	指オサエ ハケ	ナデ	
	199	〃	〃	E－5	Ⅱ	421	68.716	灰黄褐色	明褐色		○			白粒	ナデ	ナデ	
	200	〃	〃	F－5	Ⅱ	401	68.731	にぶい褐色	にぶい橙色				○	白粒	—	ナデ	
	201	〃	〃	F－5	Ⅱ	434	68.961	にぶい褐色	にぶい褐色		○				指オサエ	ハケ	
	202	〃	底部	E－14	Ⅳ	928	68.390	にぶい褐色	にぶい橙色					茶粒	指オサエ ハケ	ミガキ	
	203	〃	〃	E－15	Ⅲ	909	68.540	褐灰色	橙色		○			茶粒	ハケ	ナデ	
	204	〃	〃	E－10	Ⅵ	588	68.344	黒色	明赤褐色		○	○		茶粒, 白粒	板ナデ	ナデ	
	205	〃	〃	E－15	Ⅲ	913	68.665	橙色	にぶい赤褐色		○			茶粒, 小石	指オサエ	ハケ, ナデ	

第５表　中ノ原遺跡弥生土器観察表（3）

挿図	番号	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	色調		胎土				調整		備考
								内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
33	206	壺	底部	E－12	Ⅲ	1006	69.335	橙色		にぶい橙色	○	○			ナデ	ハケ	
	207	〃	〃	E－5	Ⅱ	453	68.531	にぶい赤褐色	橙色			○			指オサエ	ナデ，ハケ	
34	208	壺	口縁	E－5	Ⅱ	417	68.536	にぶい黄褐色	明褐色			○		○	茶粒	ナデ	ナデ
	209	—	〃	⑥地	Ⅱ	一括	—	褐色		にぶい褐色		○				ナデ	ナデ
	210	壺	口縁	E－5	Ⅱ	382	68.476	にぶい黄褐色	明赤褐色			○		○	茶粒	ナデ	ナデ
	211	—	〃	E－19	Ⅲ	681	71.385	明赤褐色	赤褐色					○		ナデ	ナデ
	212	壺	口縁	E－10	Ⅱ	165	68.986	にぶい褐色	灰黄褐色		○	○		○	白粒	ナデ	ナデ
	213	—	〃	E－12	Ⅱ	825	69.200	にぶい橙色	にぶい橙色		○	○	○			ナデ	ナデ
	214	壺	口縁	E－12	Ⅲ	1035	69.355	にぶい黄褐色	褐色		○	○	○	○		ナデ	ナデ
	215	—	〃	⑥地	Ⅱ	一括	—	にぶい褐色		にぶい褐色		○				ナデ	ナデ

第６表　中ノ原遺跡縄文石器観察表

挿図	番号	器種	出土区	層	遺物No.	標高(m)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
27	123	石鏃	E－22	横転	1709	70.764	29.6	13.0	4.1	1.23	黒曜石	針尾産
	124	石鏃	E－22	V	1244	70.087	21.2	16.5	5.5	1.37	黒曜石	三船産
	125	磨製石斧	E－12	Ⅵ	1532	69.865	54.5	45.0	19.0	67.02	頁岩	
	126	打製石斧	E－21	Ⅵ	1274	71.222	65.0	61.0	15.0	80.39	頁岩	
	127	磨製石斧	E－8	V	575	68.244	64.5	50.5	19.5	83.23	頁岩	
	128	磨製石斧	E－21	Ⅵ	1253	71.297	94.5	48.2	18.5	111.35	頁岩	
	129	打製石斧	E－12	Ⅵ	961	69.435	53.5	49.7	8.5	34.97	頁岩	
	130	磨製石斧	E－21	Ⅵ	1284	71.227	75.8	60.0	13.1	77.81	頁岩	
28	131	磨石	E－8	Ⅵ	612	68.269	73.4	104.2	57.6	525.00	安山岩	
	132	磨石	E－18	Ⅵ	1892	70.735	53.0	88.5	44.8	360.00	花崗岩	
	133	磨石	E－14	Ⅵ	1752	69.155	110.0	63.0	53.0	382.00	砂岩	
	134	礫器	E－21	Ⅵ	1254	71.262	103.0	68.2	15.0	154.58	頁岩	
	135	礫器	E－12	V	1539	69.820	51.7	37.0	8.5	19.66	頁岩	
	136	石核	E－10	Ⅳ	505	68.438	25.5	26.1	33.6	25.55	黒曜石	三船産
	137	石核	E－9	Ⅵ	1354	68.116	26.4	32.5	13.4	11.21	黒曜石	三船産
29	138	石皿	E－19	Ⅵ	1299	71.120	200.5	157.0	81.0	2839.00	安山岩	
	139	石皿	E－16	Ⅵ	1589	70.404	158.5	156.5	79.5	2862.00	安山岩	
	140	石皿	E－21	V	1265	70.082	127.5	148.0	98.0	2670.00	安山岩	
	141	石皿	E－5	Ⅵ	1403	67.437	140.0	148.0	77.0	2495.00	安山岩	
	142	石皿	E－5	Ⅵ	1117	67.565	81.0	77.5	76.0	1030.00	安山岩	
	143	石皿	E－21	Ⅵ	1893	70.823	107.5	56.5	110.3	1455.00	安山岩	
30	144	石皿	E－12	Ⅶ	1801	69.724	108.0	106.5	55.5	1448.00	安山岩	
	145	石皿	E－8	V	615	68.304	133.0	160.0	71.0	2625.00	安山岩	
	146	石皿	E－8	V	623	68.289	86.5	83.5	102.5	940.00	安山岩	
	147	石皿	F－10	V	1372	70.100	68.5	103.8	18.5	231.39	安山岩	

第７表　中ノ原遺跡古代以降出土遺物観察表

挿図	番号	類別	器種	部位	出土区	層	遺物No.	標高(m)	色調		胎土	調整		焼成	備考
									内面	外面		内面	外面		
38	217	土師器	—	口縁	E－6	Ⅱ	480	69.071	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	精緻	ナデ	ナデ	良好	
	218	黒色土器	椀	〃	E－5	〃	28	68.821	黒褐色	にぶい黄橙色	精緻	ミガキ	ヘラナデ	良好	内黒
	219	黒色土器	〃	底部	E－5	〃	44	68.961	黒色	にぶい黄色	砂粒	ミガキ	ヘラナデ	良	内黒
	220	火鉢	鉢	—	E－19	Ⅲ	725	68.814	にぶい黄橙色	明石褐色	砂粒	ナデ	ナデ	良	火鉢，外面に花模様

第Ⅵ章　中ノ原遺跡発掘調査のまとめ

縄文時代について

Ⅵ層上面で竪穴住居跡が１軒検出された。

円形のプランで直径3.2mを測る。出土遺物は，台付皿形土器の皿部及び脚部，丸尾式土器の深鉢形土器等が出土した。台付皿形土器は，皿の上面観が円形を呈するもので，沈線文が施文され，口唇部に連続刺突文を施している。Ⅸ類土器とした辛川式土器（あるいは西平式土器の前段階）の時期を想定したい。Ⅺ類土器とした丸尾式土器，Ⅸ類とした納曽式土器・辛川式土器（あるいは西平式土器の前段階）の同時性を追求する際の指標として有効なセットであるといえよう。

土器について

前回の調査では，縄文時代の土器をⅠ類土器からⅩⅣ類土器の14類の土器群に分類してある。今回の調査では，Ⅵ類土器からⅫ類土器の後期該当の土器が出土した。

Ⅵ類土器は，口縁部に貝殻刺突文を巡らせその下位には凹線による文様を展開させるものである。その中でも，10～13は凹線の幅が６～10㎜と広く，従来Ⅵ類土器としていたものより古い段階の土器群と考えられる。阿高式土器の系譜が想定される一群に比定することができる。

Ⅶ類土器は，凹線文の間の無文部に貝殻腹縁刺突文を充填させるタイプである。「擬似縄文」と呼称されるタイプである。

Ⅷ類土器は，細型の平行凹線文系の土器である。一般には二本平行の凹線文で文様を展開するもので，指宿式土器に該当するタイプである。

Ⅸ類土器は，肥厚口縁を呈した磨消縄文系土器である。52と53は同一個体と考えられ，辛川式土器に比定される。さらに，前回の調査で出土した165（中ノ原Ⅰ）とも同一個体である可能性が高い。

Ⅹ類土器は，口縁部が肥厚して屈曲するタイプで，市来式土器に比定される。口縁部を肥厚させ断面三角形あるいは「く」字状につくるもので，口縁部外面下端には強い稜ができる。この稜を中心に文様帯がつくられる。56～65はこの稜より上部にのみ文様をもつタイプで，66～68は稜より下位にも文様をもつタイプである。稜より下にも文様をもつタイプを，加治木町干迫遺跡では，「口縁部の文様が胴部まであふれているものとし，市来式の中でも後出のものと考えられ，河口貞徳氏によって市来Ⅲ式と呼ばれた土器群と同一である。」としている。また，69～71は先端がやや肥厚し，外反する口縁部で文様帯をもたないタイプである。草野式土器の無文タイプに比定される。

Ⅺ類土器は口縁部が屈曲するタイプである。このⅪ類土器には，口縁部は頸部から外反して途中で稜をつくって内湾するものと，頸部から外反するだけの二つのタイプがある。前者をⅪ－Ａ類，後者をⅪ－Ｂ類土器とした。それぞれに山形口縁を呈するもの，平口縁のものがある。文様は，沈線文と貝殻刺突文の組み合わせからなるものが多く，文様帯が，稜もしくは頸部より下位の胴部まであふれるものが多い。丸尾式土器に比定される。

Ⅻ類土器は出土量が少ないため，便宜的に一括して扱ったが，この中には多型式のものが含ま

れることが考えられる。台付皿形土器もⅫ類土器として取り扱った。93，96は台付皿形土器の脚部で，白色顔料を塗彩している。土器自体の色調が赤褐色とかなり赤っぽいことから，白色顔料がより引き立つ効果を意識して粘土の選定を行った可能性も考えられる。

Ⅻ類土器は各種底部を一括した。網代圧痕をもつものが3点出土している。

弥生時代について

弥生時代の遺構は今回は検出されなかった。遺物は調査区全体から出土しているが，傾斜面に近い⑥地点側からの出土が多い。甕形土器・壺形土器が出土している。いずれも山ノ口式土器の範ちゅうに収まるものであるが，口縁部の伸び具合や立ち上がり具合に若干時期差が認められる。また外来系土器の出土もみられ，北部九州の須玖式系の高坏形土器や，瀬戸内系の櫛描波状文・凹線文土器が出土した。須玖式系土器の出土に関しては，最近の調査事例では，薩摩川内市（旧里村）中町馬場遺跡・南さつま市（旧金峰町）下堀遺跡・川辺町寺山遺跡などの薩摩半島を中心にして，一括性はさほど高くないものの，黒髪式や山ノ口式土器との共伴がみられるようである。本遺跡出土の高坏形土器は，胎土も精良で形態的にも北部九州のものと遜色がないものである。ただし，搬入品かどうかは現時点では特定できなかった。今後胎土の比較検討などが必要であろう。瀬戸内系土器については，この時期に九州南部の宮崎から大隅半島を中心に見られる土器である。前畑遺跡や王子遺跡など周辺遺跡でも出土が見られる。梅木謙一氏の調査によると，九州南部出土の凹線文土器に関しては，搬入土器と在地模倣が見られるとのことである（梅木2004）。本遺跡の土器は胎土的には在地のものと差違がなく，形態的には山ノ口式土器に文様を施したと考えられるものであることから，在地模倣と見なしてもよいだろう。山ノ口式土器の時期をめぐっては，現在中期に収める考え方と，瀬戸内系土器の出土時期などをもとにして一部後期まで下るという考え方（中村1986）の二者がある。これは，近年議論が再燃している，九州と瀬戸内地域との併行関係をめぐる議論とも関連してくる問題である。本遺跡の弥生土器は，一括性は高くないものの，各地域との併行関係を検討していくうえで一助となりうる資料を提供したといえる。

〈引用・参考文献〉

・「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（48）概要編　中ノ原遺跡Ⅰ，Ⅱ　中ノ丸遺跡」1989
・「鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（22）　干迫遺跡」1997
・「鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（54）　中原遺跡」2003
・「鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（34）　中ノ原（Ⅰ）遺跡」1994
・「鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（46）　中ノ原（Ⅴ）遺跡」1997
・「鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（51）　中ノ原（Ⅵ）遺跡」1998
・「市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）　川上（市来）貝塚」1991
・「鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（9）　草野貝塚」1988
・中村耕治　1986　「弥生時代」『鹿児島考古』20
・梅木謙一　2004　「四国・南九州間における凹線文土器の交流」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』

中ノ丸遺跡

第Ⅶ章　中ノ丸遺跡発掘調査の概要

第1節　発掘調査の経過

中ノ丸遺跡は，一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴って昭和60年度～昭和61年度に県教育委員会が発掘調査を実施した。また，バイパス供用開始後の平成15年度に店舗・駐車場等の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を鹿屋市教育委員会が実施した。

今回の発掘調査は，バイパス改築工事に伴う中ノ丸遺跡北側延長部分の発掘調査である。

第2節　発掘調査の方法

昭和60年度調査グリッドと同様に，中ノ丸遺跡は，工事用センター杭№371と№373を基準に10m×10mのグリッド設定を行い，東端から１～10区，南から北へＡ～Ｄ区とし，発掘調査を行った。

また，昭和60年度の調査時と違い，現在はバイパス沿いに店舗ができており，調査区が進入路及び市道で途切れてしまうため，進入路・市道及び情報ボックスで区切られたブロックごとに，中ノ丸遺跡東側から順に⑦・⑧・⑨・⑩地点として発掘調査を行い，進入路及び市道の調査については遺構・遺物の状況を見て協議することとし，円形周溝状遺構及び中近世のピットの広がりが予想される⑦地点と⑧地点の間の市道部分，弥生時代の竪穴住居跡の広がる⑨地点と⑩地点の間の進入路部分を市道及び進入路の付け替えを行った後に，それぞれ新⑦地点，新⑨地点として調査を行った。

重機（バックホー）によって緑地帯となっていた部分の盛土，及び旧表土を除去し，それ以後は人力（山鍬・ジョレン・ねじり鎌・移植コテ等）でⅪ層（薩摩火山灰層）上面まで掘り下げを行った。

第Ⅷ章　発掘調査の成果

第1節　縄文時代の成果

1　調査の概要

昭和60年度の調査では，縄文土器の出土は若干みられるものの，遺構は検出されていない。

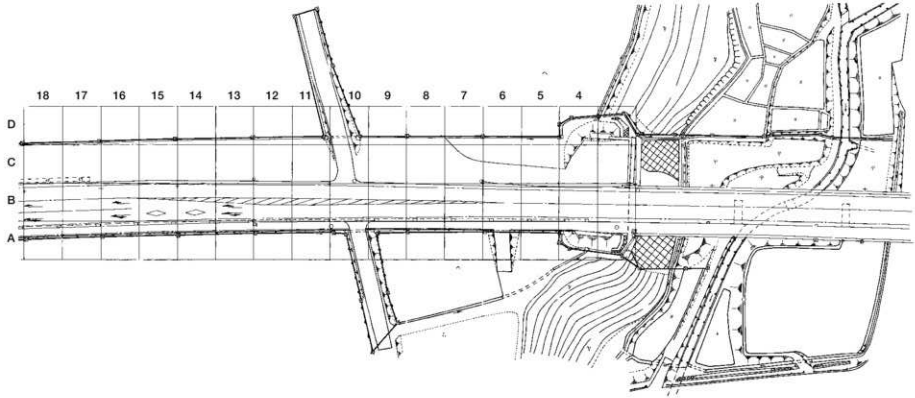
中ノ丸遺跡の縄文土器は，前期と後期と晩期に該当する。前期と後期土器はＡ－３・４区とＡ－９区とＡ－12区に散在し，晩期の土器はＢ－19区に集中している。

今回の調査では，Ｃ－12区，Ｃ－15区のⅩ層上面より早期の集石３基が検出されたほか，Ｃ－12・13区を中心にⅩ層より早期該当の土器及び石器が出土した。

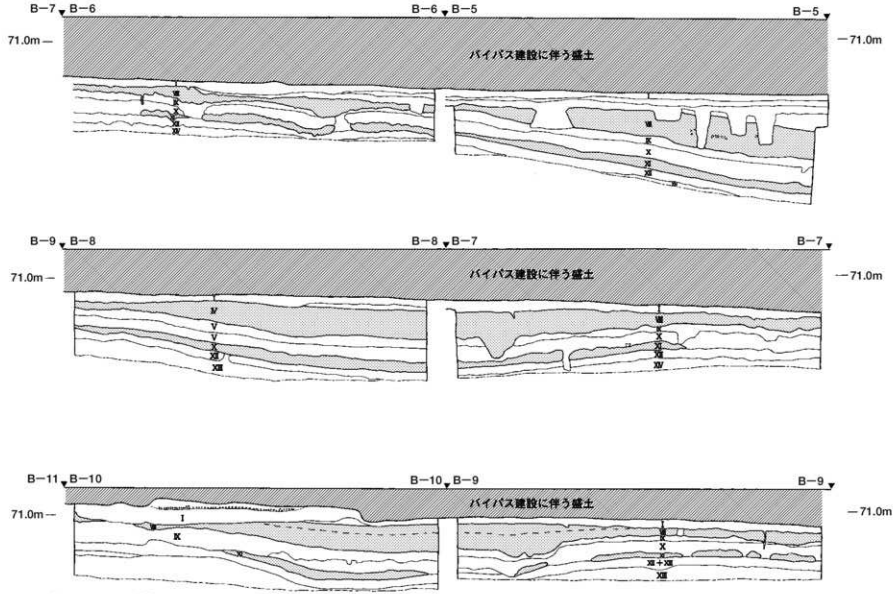
Ｃ－15区からは，早期の磨製石鏃１点が出土した。

Ⅵ層では後期から晩期と考えられる土坑１基がＣ－12区で検出された。

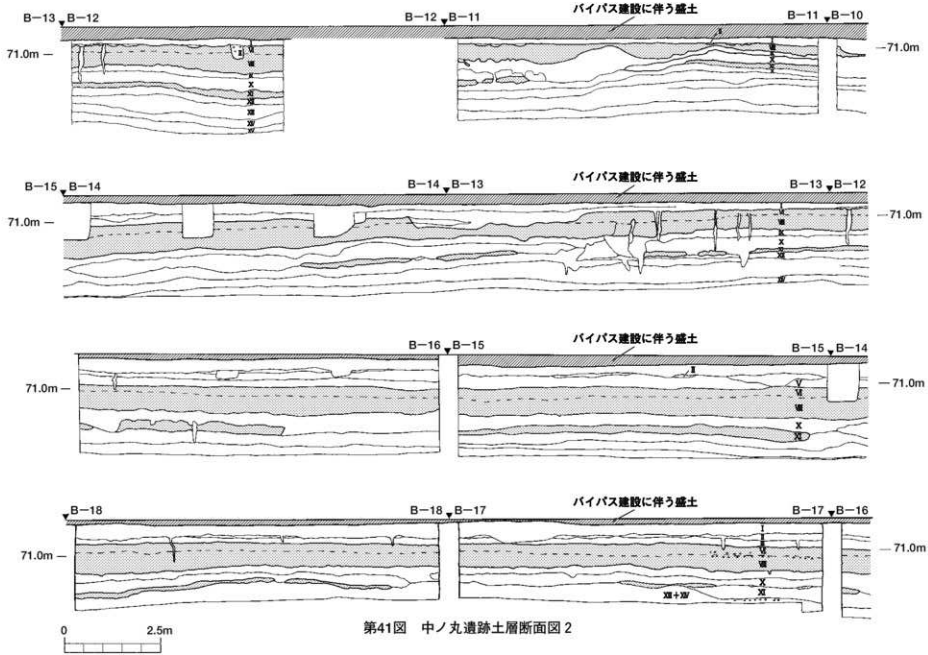
晩期に該当する遺構は検出されなかった。晩期該当の遺物も今回の調査では出土しなかった。



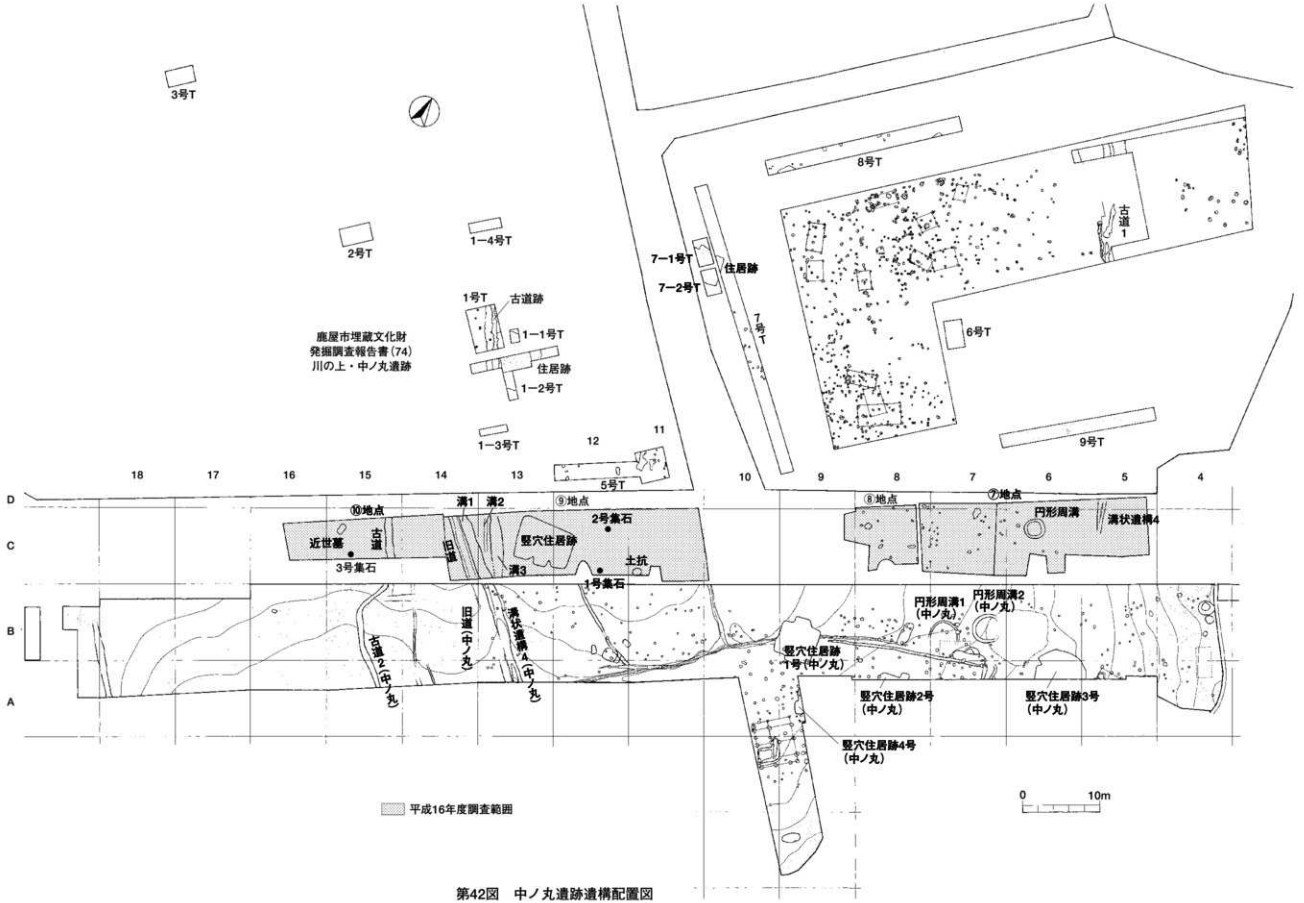
第39図　中ノ丸遺跡グリッド配置図



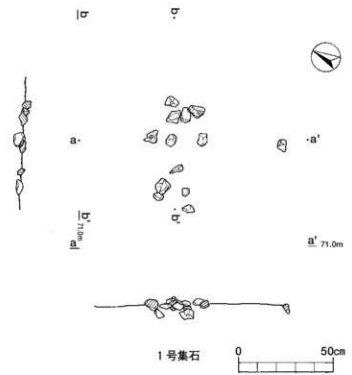
第40図　中ノ丸遺跡土層断面図1

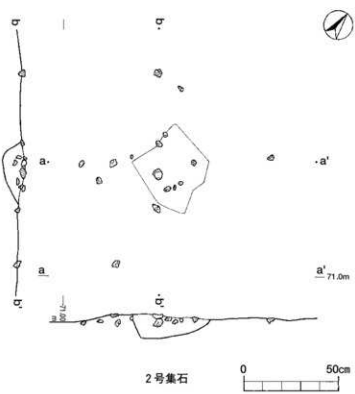


第41図　中ノ丸遺跡土層断面図 2



第42図　中ノ丸遺跡遺構配置図





第43図　1・2号集石実測図

2　検出遺構

(1)　1号集石

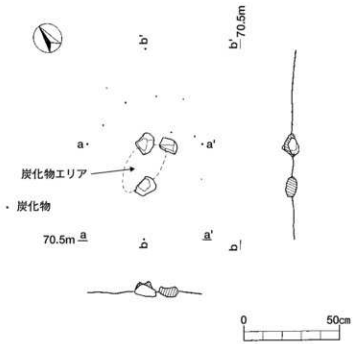
C－12区で検出し，径76㎝×62㎝を測る。

13個の礫を確認したが，掘り込み等は確認できなかった。

(2)　2号集石

C－12区で検出し，径119㎝×75㎝を測る。

15個の礫を確認し，集石の可能性を考慮して調査をすすめた。しかし，礫は小さく長径も10㎝に満たず，中央部分には長径が５㎝に満たない小石が集中していた。また，Ⅷ層の砂礫層から続く自然堆積の可能性も否定できない。

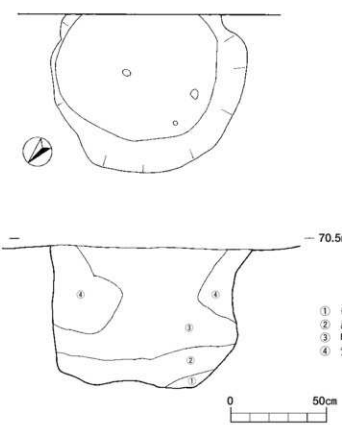


第44図　3号集石実測図

(3)　3号集石

C－15区で検出し，径33cm×22cmを測る。

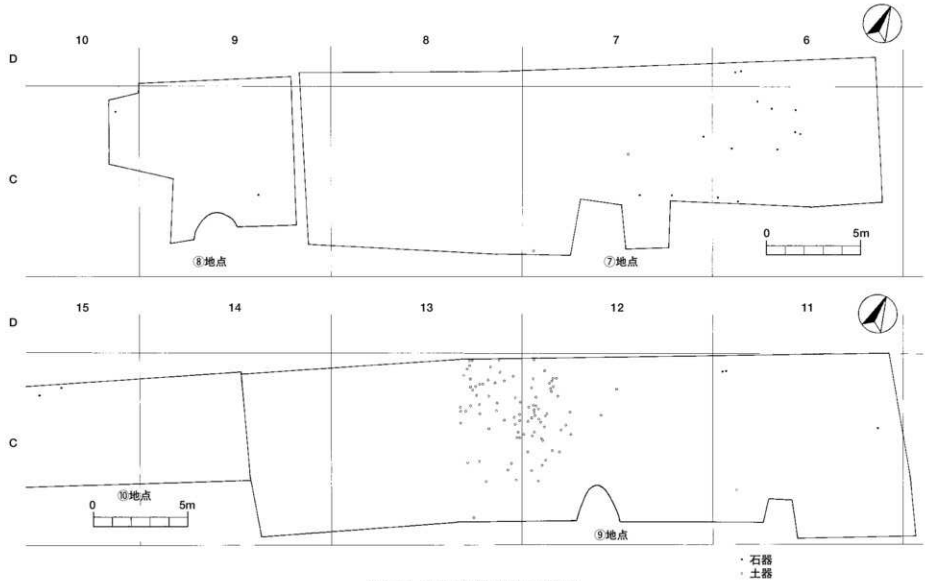
3個の礫を確認し，炭化物エリアを検出した。礫の個数は少ないが中心が想定される。周辺には炭化物が散在していた。



第45図　土坑実測図

(4)　土坑

C－11区で検出したが，既設建造物（国道220号鹿屋バイパス）により完全には検出できなかった。しかし，径が約120cm×103cmの楕円形の平面プランになる可能性が高い。深さは70cmを測る。落とし穴遺構の可能性も含めて調査したが，逆茂木等は確認できなかった。性格は不明である。



第46図　縄文時代遺物出土状況図

3　出土遺物

前回の調査では，中ノ丸遺跡からは前期該当の土器と後期該当の土器及び石器，更に晩期該当の土器がみられた。前期の土器は，刻みを施した微隆帯文を巡らせた轟式土器に比定されるものと沈線文系の曽畑式土器に比定されるものがわずかに出土している。後期の土器は，凹線文と刺突文を施した指宿式土器に比定されるものと「く」字状の口縁部をもつ市来式土器に比定されるものなどが出土している。晩期の土器は断片的な資料ではあるが入佐式土器に該当することが考えられる。

今回はX層から早期該当の土器が出土した。

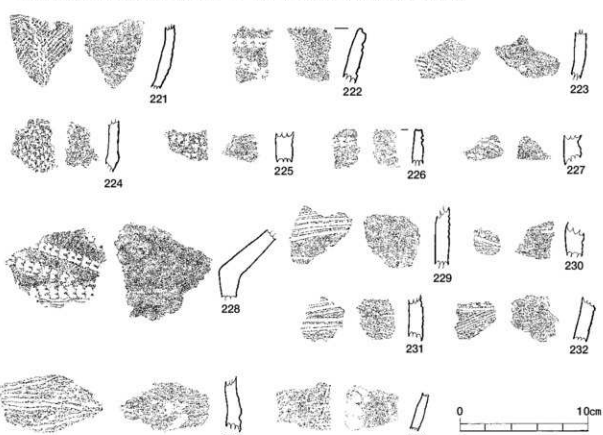
(1)　早期該当土器（第47図　221～234）

221と223・234は単節の縄文が施され，221には結節した部分もみられることから平椿式土器であると考えられる。

224は肥厚した口縁部と考えられ，貝殻腹縁による刺突がみられる。花崗岩質の胎土であり平椿式土器であると考えられる。

222，225～228は貝殻腹縁の2本もしくは3本分を単位とする施文具を連続して施すものであり，口唇部にも同じ施文具で刻みを施す。口唇部は大きく開き，塞ノ神式土器に該当する。

229～233は多条の条線で間隔をおいて文様を描いているものである。232には貝殻腹縁による連続した刺突もみられることから，塞ノ神式土器の胴部と考えられる。



第47図　縄文土器 8

(2) 石器（第48図　235～239）

本遺跡出土の縄文時代の石器としては5点が出土している。昭和61年度の調査では縄文時代前期・後期・晩期の土器が出土しているが，数量はそれほど多くない。石器は，前期と後期の時期のものが総計12点出土している。その内訳は打製石鏃3点，磨製石斧1点，磨石1点，敲石2点，凹石2点，石皿2点，その他の石器1点となっている。

今回の調査ではX層から2点が出土し，縄文時代早期の時期で，Ⅵ層からは3点が出土し，縄文時代後期の時期が考えられる。

［早期］

235は二等辺三角形状の磨製石鏃で，尖頭部先端や両側縁，そして基部の一部を欠損し，両面ともに研磨により仕上げられ，稜線や擦痕が観察される。236は最大長2.6cm，最大径3.5cmを測る筒状の石製で，最大内径1.9cmの穴が穿っており，表面が磨滅を受けている。石器の可能性は薄いものであるが，装飾品としての可能性が考えられる資料である。

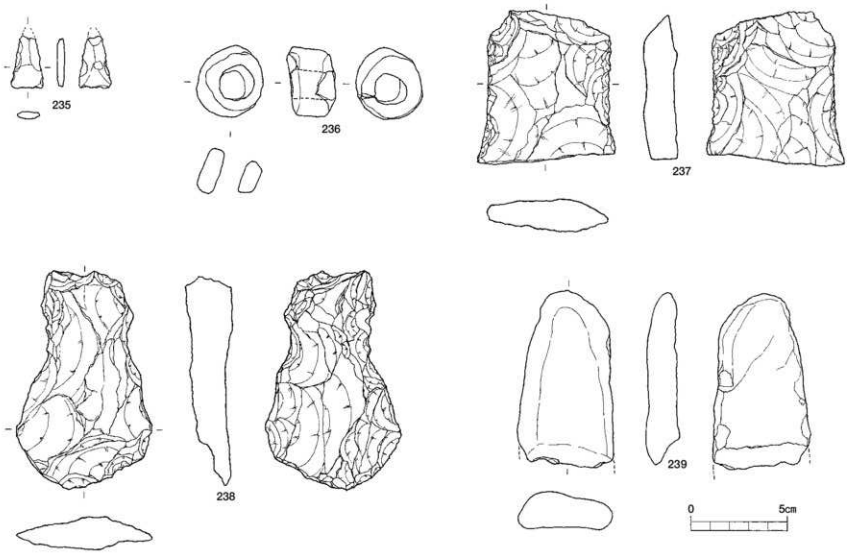
［後期］

237・238は扁平打製石斧で，237は頭部のみで，両面より大小の剥離により調整され，抉り部から下位については欠損している。238は頁岩製の素材を利用した抉りをもつ小形の石斧で，頭部端部，片側刃部側縁，片側刃縁側は敲打により大きく欠損している。

239は下縁部を欠損して不明であるが，自然石の可能性の強い資料である。

石器観察表

挿図	番号	器種	出土区	層	遺物No	標高 (m)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考
48	235	石鏃	C－15	X	265	70.455	27.0	16.0	4.0	2.06	頁岩	
	236	穿孔石	C－15	X	264	70.418	35.0	23.2	11.0	30.79	ホルンフェルス	
	237	打製石斧	C－16	V	245	71.123	75.4	69.0	16.0	133.62	頁岩	
	238	打製石斧	C－13	Ⅲ	44	71.230	100.5	69.7	22.6	182.12	頁岩	
	239	磨製石斧	C－13	Ⅲ	106	－	89.5	47.0	18.2	124.52	安山岩	



第48図　縄文石器 5

第2節　弥生時代の成果

1　調査の概要

昭和61年の調査と同様に，中ノ丸遺跡では，弥生時代の遺構・遺物が中心に出土した。

しかし，弥生時代の包含層であるⅢ層が削平されてしまっている部分が多く，Ⅲ層が確認できたのは，竪穴住居跡が検出された⑨地点のC－13区だけであった。そのため，C－13区以外は出土遺物は極端に少ない。

2　検出遺構及び遺構内遺物

竪穴住居跡1軒，円形周溝1基が検出された。

(1)　竪穴住居跡（第49図）

竪穴住居跡は，C－12・13区に位置し，全形が検出された。しかし，一部が店舗の進入路の部分に掛かっていたため，全形を同時に調査することができず，進入路以外の部分の調査を終わらせた後に，一部竪穴住居跡に掛かる形で進入路の付け替えを行い，全形の調査を行った。竪穴住居跡の発掘調査の結果，住居跡の内部構造は次のようである。

［竪穴住居跡のプランと規模］

基本的には南北方向5.3m～5.7m×東西方向7.5m～7.7mの隅丸方形を呈する。住居跡中央南側の南辺に南北方向2.8m×東西方向2.6～3.1mの隅丸方形状の一段深い竪穴部をもつ。竪穴部の周りは10～29cm高いいわゆるベッド状を呈している。竪穴の深さは，中央南辺寄りの竪穴部で45cmを測る。

［竪穴住居跡流入埋土］

竪穴住居跡を検出したC－12区西側は，凹地になっており，Ⅲ層の弥生時代包含層が残っている部分であった。Ⅲ層の包含層を掘り下げていく中で，Ⅵから Ⅷ層のアカホヤ火山灰層内に黒褐色土の流入埋土が検出された。流入埋土は，検出面から順にⅢ層の黒褐色土に白色パミスがわずかに混入した土（第49図中①），パミスの混じらないⅢ層黒色土（同図中②），Ⅲ層黒色土に茶褐色土の混じった土（同図中③）へとレンズ状に堆積している。

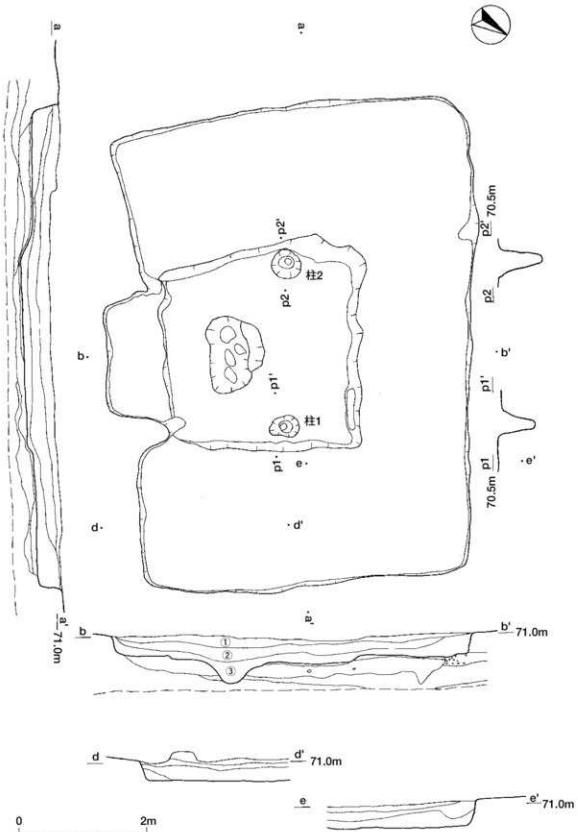
竪穴はⅧ層アカホヤ1次堆積からX層上面まで掘り込み，床面は貼床になっている。

［中央ピット］

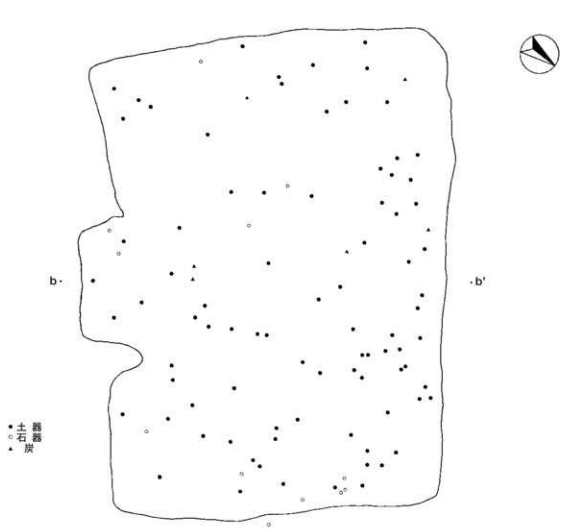
中央ピットは，中央南辺寄りの竪穴部のやや南寄りに南北方向70cm×東西方向110cmの楕円形のプランを呈し，深さは22cmでボール状に凹まっている。ピットの下面には炭化物がみられ炉跡として利用されたことが考えられる。

［柱穴］

住居跡に伴う柱穴は2本検出された。床面で柱穴を検出することが難しく，床の硬化面



第49図　竪穴住居跡実測図 2



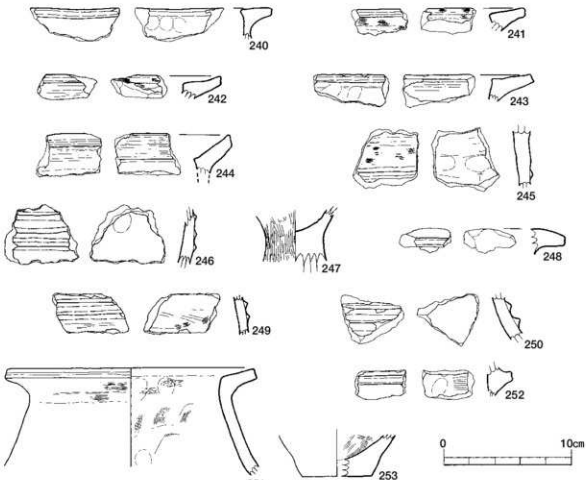
第50図　竪穴住居跡遺物出土状況図２

及び貼床部分を剥いでⅨ層及びⅩ層上面まで掘り下げて検出できた。埋土は貼床の土と同じアカホヤ土と黒色土の混土であるが硬く締まっていない。

竪穴部の東側の柱１は径48×35㎝，検出面からの深さ64㎝。西側の柱２は径46㎝，検出面からの深さ68㎝を測る。柱１と柱２の芯芯距離は2.6mを測る。

規模や柱の位置からこの住居跡の主柱にあたるものと考えられる。底面には径10㎝の柱圧痕が柱１，柱２のどちらにも観察された。

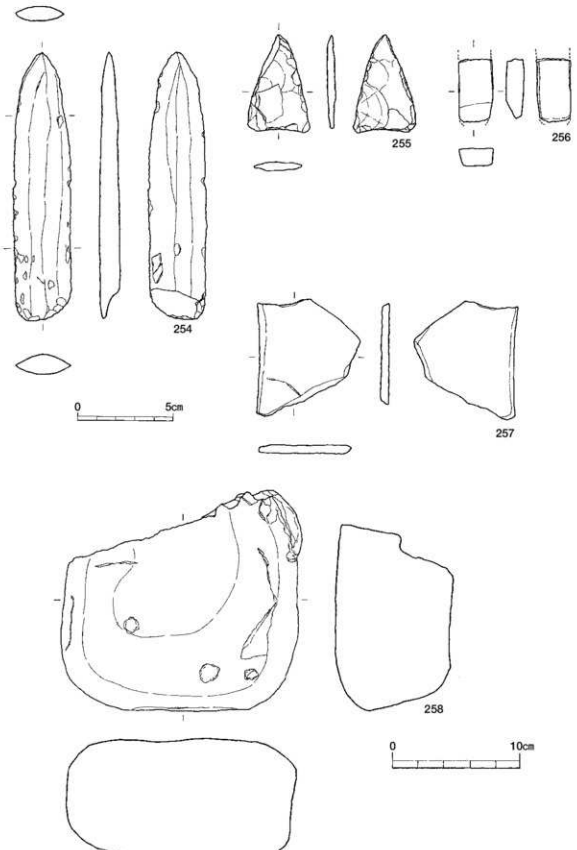
２本の主柱以外の柱穴は検出することができなかった。



第51図　竪穴住居跡出土遺物２

第８表　中ノ丸遺跡竪穴住居跡一覧

	形　状	規　模	柱　穴	主な出土遺物	検出状況
平成16年度 竪穴住居跡	方形住居跡	5.3～5.7m × 7.5～7.7m	２本	石剣１点 磨製石鏃未製品１点	全形検出
昭和61年度 竪穴住居跡１号	方形住居跡	4.4～4.8m × 5.1～5.4m	８本	土製勾玉２点 磨製石鏃未製品５点 凹石３点	全形検出
昭和61年度 竪穴住居跡２号	方形住居跡	側辺 約3.5m	－	弥生土器細片	一部検出
昭和61年度 竪穴住居跡３号	円形住居跡	最大径 約6.8m	６本	敲石１点 打製石鏃１点	一部検出
昭和61年度 竪穴住居跡４号	方形住居跡	側辺 約3.5m	－	弥生土器細片	一部検出



第52図　竪穴住居跡出土遺物 3

［出土遺物］

土器（第51図　240～253）

竪穴住居跡から出土した弥生土器のうち，図化できたのは14点である。

240～247は甕形土器である。240～244は甕形土器の口縁部で，口唇部がわずかに凹むタイプである。240は口縁部が外側に水平に拡張したもので，いわゆる逆「L」字状を呈する。口縁部外側への伸びはさほど長くない。口縁部内側が弱く張り出す。241～243は口縁部がさらに長く伸びるとともに，わずかに立ち上がりを見せ内傾する。口縁部内側への張り出しは弱い。242・243は口縁部上面が凹む。244は口縁部がさらに外側へ長く伸びるとともに，立ち上がり内傾する。口縁部内側はわずかに張り出す。245・246は甕形土器の胴部片である。ほぼ直立ぎみに立ち上がる。外面には断面三角形の突帯が巡る。247は甕の脚部である。外面にはハケ目調整の痕跡が明瞭に残る。

248～253は壺形土器である。248は広口壺の垂下口縁である。内外面ともにナデ調整が施されている。249・250は壺の頸・胴部である。外面に断面三角形突帯が巡る。252は同じく胴部付近の突帯と考えられるものである。いわゆる「M」字状突帯である。251は無頸壺である。締まりのある頸部から口縁部が外側へ折り曲がるように開いており，逆「L」字状を呈する。内外面ともにナデ調整である。253は壺の底部である。内面にハケ目調整の痕跡が残る。

石器（第52図　254～258）

254～258は竪穴住居跡の埋土中から出土した石器５点で，254は石剣，255は磨製石鏃未製品，256は扁平片刃柱状石斧，257は極扁平な砥石，258は石皿である。

254は頁岩を素材としたほぼ完形品の磨製石剣である。全長14.0㎝，基部の幅2.9㎝，厚さ1.1㎝を測り，先端部は若干まるみをもつ。鎬は表裏ともに鮮明さを欠くが中央部に通っている。剣身部の大部分は断面がレンズ状を呈する。刃部は両刃とも基部まで鋭利であり，両刃ともに随所に刃こぼれがみられる。

255は二等辺三角形状の磨製石鏃未製品で，基部には抉りを認める。

256は胴部から頭部にかけて欠損した小形で扁平な片刃柱状石斧である。両面や側縁ともに丁寧に研磨されており，刃部は使用によるためか欠損している。

257は砂岩を素材に用いた砥石である。両縁及び側縁部とも使用による研磨痕が顕著にみられ，手に持つ研磨石器と考えられる。

258は砂岩を素材とした石皿の破損品であるが，約半分以上を残している。丸縁の縁辺部を形成し，上面観は隅丸方形の形状を呈するもので，上面にわずかな凹面や磨面を認める。

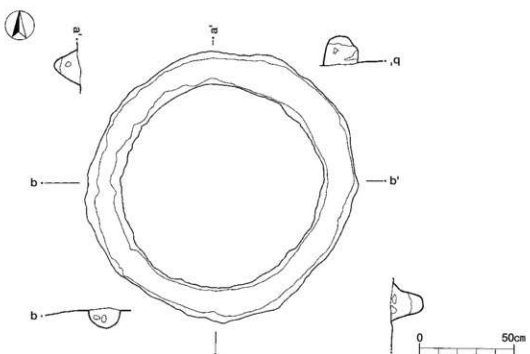
その他加工痕等はみられないため，図化はしていないが，２～3.5㎝の丸い白っぽい石英の小石が５個出土している。

(2) 円形周溝状遺構（第53図）

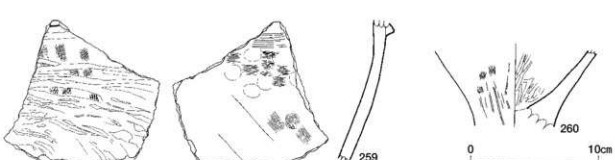
円形周溝状遺構は，C－6区に1基検出された。直径2.9mを測る真円の平面形を呈する。周溝の幅は30～40cm，周溝の深さは20～30cmを測る。C－6区付近では上部が削平を受けており，表土の直下がⅥから Ⅶ層となっており，円形周溝状遺構も削平を受けている。周溝の断面は，U字状を呈し平坦な底面をつくる。周溝に取り囲まれた内面には，これに付随する遺構は検出されなかった。周溝の流入埋土は，Ⅵから Ⅶ層のアカホヤ火山灰層内に黒褐色土の流入埋土が検出された。埋土から10余点の遺物が出土している。図化できたのは2点のみである。

［出土遺物］（第54図　259・260）

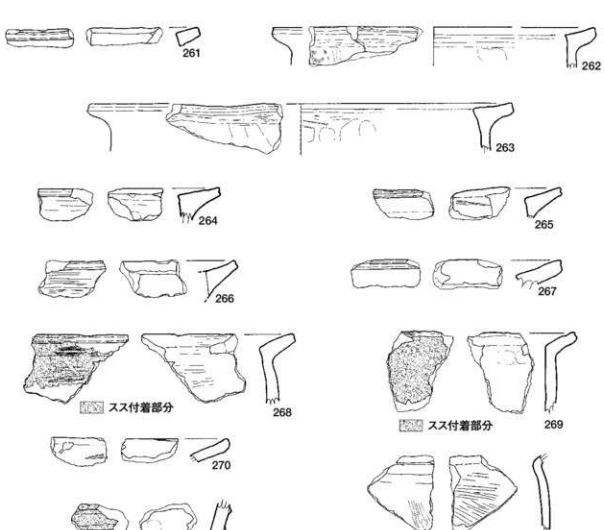
出土した遺物のうち，実測に耐えうる2点を図化した。259は壺形土器の胴部である。「コ」字状の突帯が1条残存する。外面は丁寧なナデ調整ののち，約5㎜幅のミガキが施される。ミガキは隙間が目立ち全体的に雑な印象を受ける。260は甕形土器の脚部付け根部分である。外面にはハケ目調整の痕跡が弱く残り，内面にはミガキが施されている。



第53図　円形周溝状遺構実測図



第54図　円形周溝状遺構出土遺物



第55図　弥生土器5

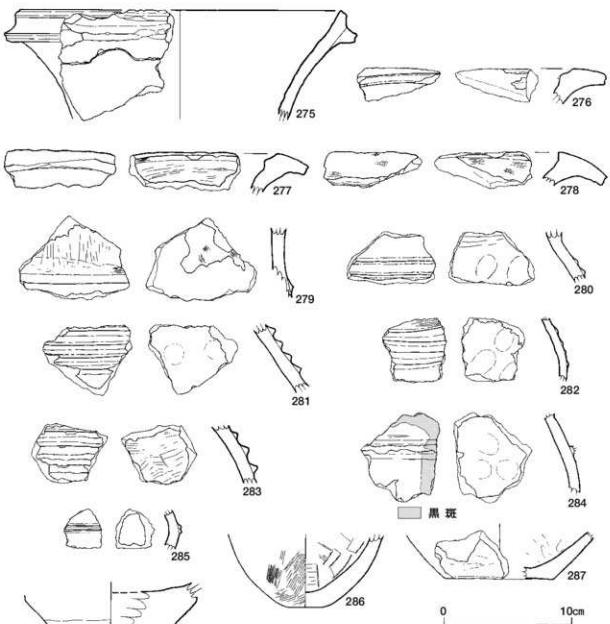
3　出土遺物

弥生土器

土器は，甕形土器と壺形土器に分けられる。

①　甕形土器（第55図　261～274）

261～270は甕形土器の口縁部である。261・263～269は口唇部がわずかに凹むタイプで，262・270は口唇部を丸く納めるものである。261～263は，口縁部が水平に伸びた逆「L」字状から，わずかに立ち上がりを見せ内傾する。261は頸部との接着面が剥がれたと思われるもので，擬口縁状を呈する。口縁部の外側への伸びは短い。262は口縁部内側に強い横位のナデが



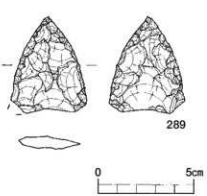
第56図　弥生土器 6

施され，突出部が作出されている。263は口縁部上面が若干くぼむ。外面にはヘラナデ調整の際の工具の痕跡が弱く残り，内面には比較的明瞭にユビオサエの痕跡が認められる。264～267は口縁部がさらに伸びて長くなるとともに，立ち上がって内傾するものである。口縁部上面はヨコナデ調整によって弱く凹む。264・265は内面は横位のナデを利用して内側への張り出しを意識している。266は頸部との接着面から剥がれたと思われるもので，擬口縁状を呈する。267は口縁部内側への張り出しがしっかりしている。張り出し部は逆L字状にはがれている。266・267は接合方法の相違をうかがわせるものであり興味深い。268～270は口縁部が伸びながらさらに立ち上がりが大きくなったもので，「く」字状に近いものである。口縁部上面の凹みはみられず，逆に反るような状態になっている。口縁部内側への張り出しはほとんどない。268・269は外面にススの付着が認められる。

270は口縁端部に向けて肥厚する。この形状は，一般的に北部九州の弥生中期末～後期初頭の時期に見られるものに類似する。271は甕形土器の頸胴部である。頸部内面は稜線が付かずゆるく折れ曲がり，胴部がやや張る。内面はハケ目調整の痕跡が明瞭に残る。270・271は色調や胎土も類似しており，同一個体と思われる。272は甕形土器の胴部片である。若干内傾して立ち上がる。外面には断面三角形の突帯が巡る。口縁部外面にはススの付着が認められる。273・274は甕の底部である。いずれも中実脚台の平底である。273は脚端部が凹む。274は脚台としては短く，厚底といった感じである。内面にはハケ目調整の際の起点痕が明瞭に残る。

② 壺形土器（第56図　275～287）

275～278は壺形土器の口縁部である。275はいわゆる二叉状口縁と呼ばれるものである。外側へ開く口縁部直下に，やや垂下ぎみに長く伸びた突帯を貼付している。276～278は広口壺の垂下口縁である。276・277は口縁部内側端部を挟み込むように非常に強いヨコナデが施され，内側の張り出しを作出している。張り出しの上下には，調整によって生じたユビくらいの幅の凹線状の凹みがみられる。278は大きく伸びて垂下している。口縁部内側には張り出しが見られる。279は壺形土器の頸部である。ほぼ直立ぎみに立ち上がり，断面三角形の突帯が巡る。外面は縦位のハケ目調整の痕跡が残る。280～285は壺形土器の胴部である。280～283は多重の断面三角形突帯が巡っている。280～282の内面にはユビオサエの痕跡が，283の内面にはハケ目調整の痕跡が認められる。284は胴部に1条の突帯が巡り，胴部が強く張る。無頸壺かもしれない。285は1条の「M」字状突帯が巡る。このタイプは胴部が逆玉葱形を呈し，素口縁が大きくひらく広口壺である。286～288は壺の底部である。286は底径が4㎝程度しかない不安定な平底である。胴部は底部から膨らむように丸みをもって立ち上がる。外面には細かいハケ目調整の痕跡が，内面にはハケ目調整の際の起点痕が明瞭に残る。287は底部の厚みが薄いものである。胴部は底部から直線気味にひらいている。288は厚底でどっしりとしている。胴部は底部から少し直立気味に立ち上がってから外へひらいている。外面突帯下部にはハケ目調整の痕跡が残る。



第57図　弥生石器

石器（第57図　289）

石器は，石鏃が1点出土した。

289はC－13区Ⅳ層出土の石鏃である。石材はハリ質安山岩を素材に用い，扁平無茎のもので先端部は鈍く側辺は外湾的で最大幅が下方にある。最大長2.4㎝，最大幅2.0㎝，厚さ0.3㎝，重量1.53ｇを測る。

第３節　中・近世の調査

１　調査の概要

中ノ丸遺跡では，これまでに近世の遺構として，掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，古道，旧道などが検出されている。古代から中世については，須恵器や土師器の出土はあるが遺構は検出されていない。

今回の調査においても，近世の遺構・遺物が検出された。中世のものには土師器などの出土が数点あるのみで遺構は検出されていない。

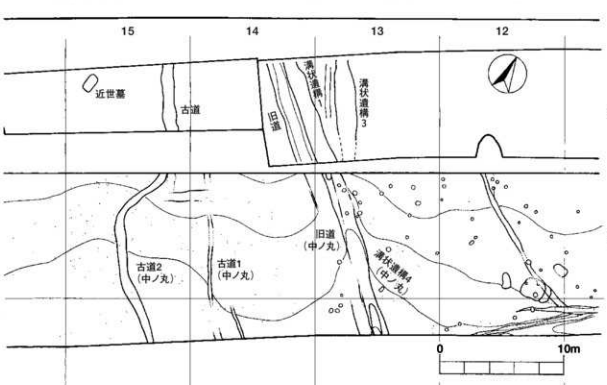
２　近世の遺構

近世の遺構は，Ｃ－15区に近世墓１基，古道１条，Ｃ－13・14区に旧道１条，溝状遺構３条，Ｃ－６区に溝状遺構１条が検出された。これまでの県教委及び鹿屋市教委の調査で検出された古道・溝状遺構の延長部分と考えられるものもある。掘立柱建物跡の柱跡の可能性のあるピットも検出されたが，調査区が狭いため建物跡とは確認できなかった。

(1)　近世墓

近世墓はＣ－15区にⅥ層面で検出された。埋土はⅢ層の黒色土に白パミスの混じった旧耕作土である。長辺160㎝，短辺70～85㎝の方形を呈する。深さは検出面より15㎝と浅いが，上部は耕作等によって削平されたためである。長辺の方向が南北方向を示している。

人骨，木棺等は出土しなかった。出土した古銭から17世紀中頃の墓であると考えられる。



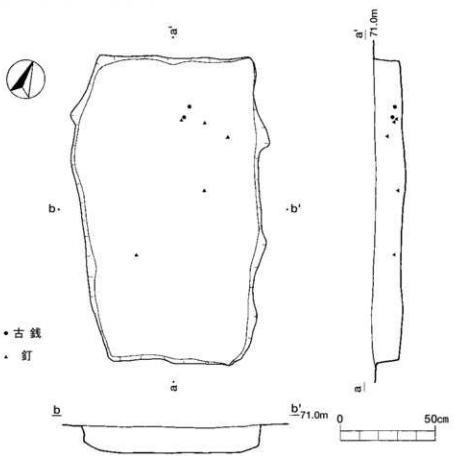
第58図　中・近世跡遺構配置図２

近世墓出土遺物（第60図　290～294）

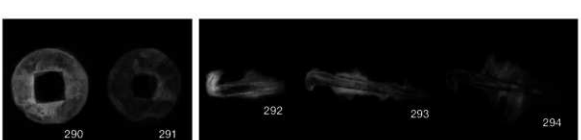
近世墓からは古銭と釘が出土した。290～294はそのレントゲン写真である。290は洪武通宝を含む4枚の古銭である。洪武通宝は初鋳が西暦1368年の明銭であるが290は加治木銭と呼ばれる模鋳銭である。291は隷書体の元豊通宝を含む2枚の古銭である。元豊通宝は初鋳が西暦1078年の宋銭である。

1636年に寛永通宝が初鋳されてたが，1670年に宋銭や明銭の使用禁止令がでたことからも宋銭等が使用されていたと考えられる。寛永通宝が確認されていないので断言はできないが出土した古銭から17世紀中頃の墓であると考えられる。（下関市立大学　櫻木　晋一教授に御教示頂いた。）

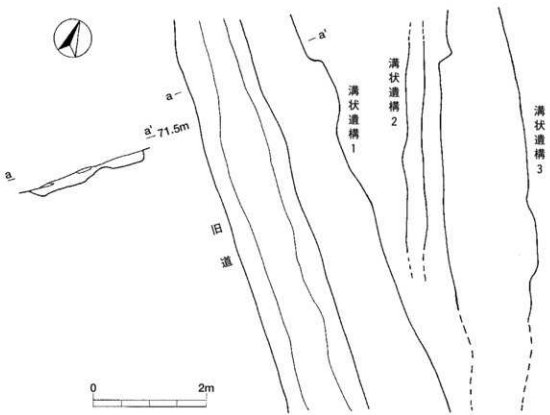
292～294は頭部が基部より横一方向に突き出る鉄釘である。



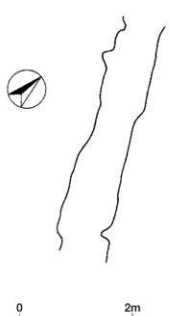
第59図　近世墓実測図



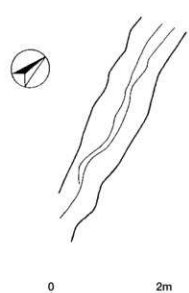
第60図　近世墓出土遺物



第61図　旧道・溝状遺構１～３実測図



第62図　古道実測図２



第63図　溝状遺構４実測図

(2) 旧道（第61図）

旧道は前回の調査時にB－13区からA－13に溝状遺構4（中ノ原Ⅰ）の西側に平行して検出されている。今回はその延長部分がC－14区から検出された。前回の検出時と同じように溝状遺構と平行している。

旧道の上面には，幅20～30cmで，窪んだ小溝が120cm間隔に平行して二本検出されている。そして，この平行する二本の小溝の中央部は硬く踏み固められている。この小溝は荷車状の車輪の痕跡であり，中央部の踏み固められた部分が往来の道と想定される。中央部の硬化面は幾層にもなっており，長い間道として使用されていたことがうかがえる。時期は不明である。

(3) 古道（第62図）

古道はC－15区に検出された。北西方向から南東方向に走る。前回の調査時に検出された古道2（中ノ丸）の延長部分と考えられる。硬化面が確認できたのは，幅120cmを測る。古道の東側に浅い溝状遺構のような部分もあったが，上部が削平を受けているため溝状遺構であるとは確認できなかった。鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（74）「川の上・中ノ丸遺跡」で報告されている1号トレンチで検出された古道とつながる可能性も考えられる。

(4) 溝状遺構1（第61図）

溝状遺構1は，C－14区旧道の東側に平行して検出された。北西方向から南東方向に走る。幅は約50cmを測る。前回の調査時に検出された溝状遺構4（中ノ丸）の延長部分と考えられる。旧道と供伴する溝と考えられる。

(5) 溝状遺構2（第61図）

溝状遺構2は，溝状遺構1の東側に検出された。北北西方向から南南東方向に走る。幅は40cmを測る。削平を受けているため検出できた深さは5cmを測る。

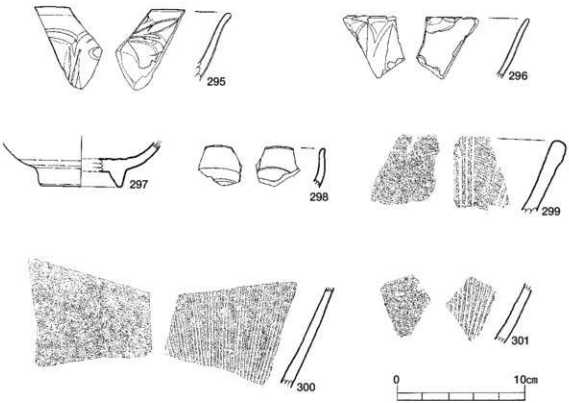
(6) 溝状遺構3（第61図）

溝状遺構3は，溝状遺構2の東側に平行して走る。幅は1mから1.2mを測る。深さは約40cmを測る。

(7) 溝状遺構4（第63図）

溝状遺構4は，C－6区に検出された。北方向から南方向に走る。幅は1.2mを測る。深さは削平を受けているため20cm程度である。溝に並行して硬化面も何箇所か検出された。青磁片や現代の陶器片などが出土している。

鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（74）「川の上・中ノ丸遺跡」で報告されている古道1とつながる可能性も考えられる。



第64図　古代以降出土遺物２

3　出土遺物

295～297は龍泉窯系青磁碗である。295は口縁部片で外面が蓮弁で内面に花文をヘラで描くもので釉薬が１㎜程度で厚く掛かる。口縁端部が外反する。296は鎬蓮弁の碗口縁部である。297は無文で高台の畳付から一部高台の内部まで釉薬が掛かる。高台径6.6cmを測る。299は須恵質の擂鉢である。口縁端部がわずかに平坦で内面がハケ目調整後掻目を間隔をおいて施す。口縁部付近まで磨痕がみられる。298は白磁の皿の口縁部である。300・301は黒薩摩の擂鉢である。釉薬が内外面に掛かる。

第Ⅸ章　出土遺物観察表

第９表　中ノ丸遺跡縄文土器観察表

挿図	番号	器種	部位	出土区	層	遺物№	標高(m)	色調		胎土				調整		備考
								内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
	221	深鉢	胴部	C－7	X	—	—	灰黄褐色	にぶい黄橙色	○		○			指オサエ 板ナデ	ナデ	
	222	〃	口縁	C－12	X	281	71.130	暗赤褐色	黒褐色	○		○		小石粒, 2㎜	板ナデ	ナデ	
	223	〃	胴部	C－7	一括	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○	○	○			指オサエ 板ナデ	ナデ	
	224	〃	〃	C－6	X	228	69.190	黒褐色	褐色	○			○	白粒	板ナデ	ナデ	
	225	〃	〃	C－12	X	281	71.130	暗赤褐色	極暗赤褐色	○		○		白粒	板ナデ	ナデ	
	226	〃	〃	C－11	X	184	70.905	暗赤褐色	暗赤灰色	○	○				板ナデ	ナデ	
47	227	〃	〃	C－11	X	183	70.835	暗赤褐色	暗赤灰色	○		○			板ナデ	ナデ	
	228	〃	〃	⑤地	住居	住136	70.685	暗赤褐色	赤黒色	○	○	○		小石粒	指オサエ 板ナデ	板ナデ ナデ	
	229	〃	〃	C－12	Ⅵ	165	71.000	赤褐色	赤褐色	○	○	○			板ナデ	板ナデ	
	230	〃	〃	C－12	X	278	70.955	黒褐色	極暗赤褐色	○				黒粒, 白粒	板ナデ	ナデ	
	231	〃	〃	C－12	X	279	71.085	にぶい赤褐色	暗赤褐色	○		○		小石粒	指オサエ 板ナデ	板ナデ	
	232	〃	〃	C－12	X	276	71.065	赤褐色	にぶい黄褐色	○		○		小石粒	板ナデ	ナデ	
	233	〃	〃	C－11	X	196	70.795	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○		○		黒粒, 小石粒	指オサエ 板ナデ	ナデ	
	234	〃	〃	C－6	Ⅵ	303	69.440	黒褐色	にぶい黄橙色	○	○	○			指オサエ 板ナデ	ナデ	

第10表　中ノ丸遺跡縄文石器，採集石器観察表

挿図	番号	器種	出土区	層	遺物№	標高(m)	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	石材	備考
	235	石鏃	C－15	X	265	70.455	27.0	16.0	4.0	2.06	頁岩	
	236	穿孔石	C－15	X	264	70.418	35.0	23.2	11.0	30.79	ホルンフェルス	
48	237	打製石斧	C－16	V	245	71.123	75.4	69.0	16.0	133.62	頁岩	
	238	打製石斧	C－13	Ⅲ	44	71.230	100.5	69.7	22.6	182.12	頁岩	
	239	磨製石斧	C－13	Ⅲ	106	—	—	89.5	47.0	18.2	124.52	安山岩
	254	石剣	住居内	—	150	72.335	141.0	29.0	11.0	55.05	安山岩	
	255	磨製石鏃	〃	—	—	—	51.0	32.0	5.0	8.05	安山岩	
52	256	柱状片刃石斧	〃	—	117	—	33.0	17.5	10.0	10.15	頁岩	
	257	研磨石器	〃	—	145	—	60.0	55.1	5.0	26.07	砂岩	
	258	石皿	〃	—	81	—	167.6	185.3	91.1	4400.00	安山岩	
57	289	石鏃	C－13	Ⅳ	98	—	24.0	20.0	3.0	1.53	安山岩	
	302	打製石斧	採集品	—	—	—	274.0	101.5	18.0	720.00	頁岩	
66	303	打製石斧	〃	—	—	—	208.3	121.0	21.2	588.00	頁岩	
	304	打製石斧	〃	—	—	—	177.5	108.0	20.8	431.00	頁岩	
	305	磨製石斧	〃	—	—	—	87.5	32.0	10.8	51.96	蛇紋岩	

第11表　中ノ丸遺跡弥生土器観察表（1）

挿図	番号	器種	部位	出土区	層	遺物№	標高(m)	色調		胎土					調整		備考
								内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
	240	甕	口縁	住居内	—	189	70.495	黒褐色	にぶい赤褐色	○	○		○		指オサエ	ナデ	
	241	〃	〃	〃	—	75	70.860	橙色	橙色				○		ハケ, ナデ	ハケ, ナデ	
	242	〃	〃	〃	—	83	71.000	橙	明褐色(スス)				○		ナデ	ハケ, ナデ	
	243	〃	〃	〃	—	111	70.705	にぶい褐色	にぶい褐色				○	白粒	ハケ	指オサエ ハケ	
	244	〃	〃	〃	—	59	71.075	灰黄褐色	にぶい黄褐色		○		○		ハケ	ハケ	
	245	〃	胴部	〃	—	72	71.105	褐灰色	にぶい黄橙色		○		○		指オサエ ハケ, ナデ	ハケ, ナデ	
51	246	〃	〃	〃	—	5	70.850	にぶい赤褐色(スス)	暗赤褐色(スス)		○		○		指オサエ	ハケ, ナデ	
	247	〃	脚部	〃	—	92	70.750	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○			○	白粒	板ナデ	ハケ, ナデ	
	248	〃	口縁	〃	—	39	71.017	にぶい橙色	にぶい橙色				○	白粒	ナデ	ハケ, ナデ	
	249	〃	胴部	〃	—	107	70.710	明赤褐色	にぶい褐色				○		ハケ, ナデ	ハケ, ナデ	
	250	壺	〃	〃	—	15	70.66	赤褐色	にぶい赤褐色				○		ナデ	ハケ, ナデ	
	251	〃	口縁	〃	—	77	71.005	明赤褐色	橙色		○		○	白粒, 茶粒	指オサエ ナデ, ハケ	ハケ, ナデ	
	252	〃	頸部(突帯)	〃	—	10	70.785	にぶい黄橙色	橙色				○		指オサエ ハケ	ハケ, ナデ	
	253	〃	底部	〃	—	22	70.800	暗赤褐色	暗赤褐色	○			○		ハケ	—	
54	259	〃	胴部	円周溝内	—	3	70.935	褐灰色	にぶい橙色	○	○	○			指オサエ ハケ, 貼ナデ	ナデ, ミガキ	
	260	甕	底部付近	〃	—	6	70.855	灰褐色	にぶい赤褐色	○	○			茶粒	ミガキ	ヘラナデ	

第11表　中ノ丸遺跡弥生土器観察表（2）

掛図	番号	器種	部位	出土区	層	遺物№	標高(m)	色調		胎土					調整		備考
								内面	外面	石英	長石	角閃	金雲	その他	内面	外面	
	261	甕	口縁	C－12	Ⅳ	111	—	橙色	橙色	○			○		板ナデ	板ナデ	
	262	〃	〃	C－12	Ⅲ	64	71.200	橙色	橙色	○		○		茶粒	指オサエナデ	板ナデ	
	263	〃	〃	C－12	Ⅲ	73	71.305	にぶい褐色	明赤褐色	○		○	○	小石粒	指オサエヘラケズリ	ヘラナデ	
	264	〃	〃	C－12	〃	109	—	橙色	橙色	○		○	○	白粒	指オサエヘラナデ	ハケ,ナデ	
	265	〃	〃	〃	〃	56	71.155	橙色	にぶい橙色	○		○	○		ハケ,ナデ	板ナデ	
	266	〃	〃	〃	〃	64	71.200	にぶい橙色	灰褐色	○			○		ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	
55	267	〃	〃	C－16	〃	134	71.213	にぶい赤褐色	暗赤褐色	○			○		ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	
	268	〃	〃	C－6	Ⅵ	321	69.560	にぶい黄橙色	黒褐色				○	白粒	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	ススス
	269	〃	〃	C－12	Ⅳ	114	—	赤褐色	暗赤褐色	○	○			茶粒	指オサエナデ	ナデ	ススス
	270	〃	〃	C－13	Ⅲ	35	71.195	にぶい黄橙色	浅黄橙色	○		○			ハケ,ナデ	ナデ	
	271	〃	〃	〃	Ⅳ	102	—	浅黄橙色	にぶい黄橙色	○		○			ハケ,ナデ	ナデ	
	272	〃	胴部	C－16	Ⅲ	136	71.233	明赤褐色	暗赤褐色	○			○		指オサエ	ハケ,ナデ	ススス
	273	〃	底部	③地	住居	163	71.155	明赤褐色	にぶい黄橙色	○		○	○	茶粒	—	ナデ	
	274	〃	〃	C－12	Ⅲ	55	71.220	浅黄色	明赤褐色	○				小石粒(5mm)	板ナデ	—	
	275	壺	口縁	C－12	Ⅲ	52	71.235	橙色	橙色	○	○	○		茶粒	—	—	
	276	〃	〃	C－13	〃	31	71.180	にぶい褐色	にぶい橙色		○		○	白粒,茶粒	ナデ	ナデ	
	277	〃	〃	C－13	〃	28	71.285	橙色	橙色	○	○		○	茶粒	ハケ,ナデ	—	
	278	〃	〃	C－12	〃	32	71.310	赤褐色	赤褐色		○	○	○	石粒	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	
	279	〃	胴部	C－13	〃	2	71.250	灰褐色	灰黄褐色		○		○	茶粒,白粒	ナデ	ハケ,ナデ	
	280	〃	〃	C－6	Ⅵ	321	69.560	にぶい黄橙色	明赤褐色		○		○	軽石,5mm	指オサエハケ	ナデ	
56	281	〃	〃	C－7	Ⅲ	234	70.080	黒色	明赤褐色	○	○		○	黒曜石	指オサエナデ	ナデ	
	282	〃	〃	C－13	〃	34	71.150	にぶい橙色	にぶい橙色				○	石粒(4mm)	指オサエナデ	ハケ,ナデ	
	283	〃	〃	C－12	〃	75	71.355	赤褐色	灰赤色	○	○		○	白粒	ハケ	ナデ	
	284	〃	〃	C－12	〃	68	71.215	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		○		○	白粒	指オサエ	ハケ,ナデ	黒斑
	285	〃	〃	C－13	Ⅳ	86	—	灰黄色	にぶい黄橙色	○			○		ナデ	ナデ	
	286	〃	底部	C－16	Ⅲ	135	71.173	橙色	にぶい赤褐色	○				茶粒	板ナデ	ハケ,ナデ	
	287	〃	底部	C－15	いも穴	149	71.293	黄灰色	にぶい黄橙色		○			白粒,茶粒	指オサエナデ	ハケ	
57	288	〃	〃	C－13	Ⅲ	25	71.170	にぶい褐色	橙色	○	○	○		白粒,茶粒	ナデ	ハケ	

第12表　中ノ丸遺跡古代以降出土遺物観察表

掛図	番号	類別	器種	部位	出土区	層	遺物№	標高(m)	色調		胎土	調整		焼成	備考
									内面	外面		内面	外面		
	295	青磁	碗	口縁	C－9	溝内	352	71.245	緑色(やや白)	緑色(やや白)	黒細粒	—	—	良好	龍泉窯
	296	〃	〃	〃	C－6	〃	302	69.605	灰色	灰色	黒細粒	—	—	良好	〃
	297	〃	〃	底部	—	Ⅲ	—	—	灰色	灰色	黒粒	—	—	良好	〃
64	298	白磁	Ⅲ	底部	C－15	〃	147	71.233	灰白色	灰白色	黒粒	—	—	良好	〃
	299	須恵器	鉢	口縁	C－9	溝内	364	71.240	灰白色	灰白色	白粒	—	—	良	中世
	300	瀬戸焼	鉢	胴部	—	溝内	—	—	黒褐色	黒褐色	白粒	—	—	良好	中世
	301	〃	〃	〃	C－15	撹乱	145	71.274	黒褐色	黒褐色		—	—	良好	中世

第X章　中ノ丸遺跡発掘調査のまとめ

縄文時代について

これまでの調査において，断片的ではあるが，前期該当の土器と後期該当の土器及び石器，さらに晩期該当の土器が出土している。しかし，遺構などは確認されていない。今回の調査では，X層から縄文時代早期相当の土器及び石器が出土し，早期該当の集石が検出された。

集石遺構は3基検出されたが，掘込みや石組みの状態が看取されるものは無く，石を集めたままの状態の集石となっている。

X層出土土器

今回の調査で出土したX層出土の土器は，C－7区とC－12区を中心に約20点出土した。いずれも小片のため器形等を看取できるものはないが，平棺式土器に比定されるもの（221，223，224）と塞ノ神式土器に比定されるもの（222，225～233）である。

X層出土石器

C－14区から磨製石鏃1点が出土した。二等辺三角形状の磨製石鏃で，先端部や両側縁，そして基部の一部を欠損し，両面ともに研磨により仕上げられ，稜線や擦痕が観察される。

Ⅵ層検出遺構

土坑が1基検出された。調査範囲外に広がるため全形は確認できなかったが，直径1mほどの円形で，検出面からの深さは70cmを測る。落し穴状遺構の可能性もあると考え，逆茂木等の調査を行ったが，確認できなかった。性格については不明である。

弥生時代について

前回の調査で，竪穴住居跡4軒，円形周溝2基，土坑5基が検出されている。今回も竪穴住居跡1軒，円形周溝1基が検出された。竪穴住居跡は，南北方向5.3～5.7m×東西方向7.5～7.7mの隅丸方形状を呈しており，方形の平面形に張り出し部を備えた住居跡である。住居跡中央南側に南北方向2.8×東西方向2.6～3.1mの隅丸方形状の一段深い部分をもつ。その周りは，10～30cm高いいわゆるベッド状を呈している。竪穴の深さは，中央南辺寄りの竪穴部で45cmを測る。竪穴部中央やや南寄りに炉跡とみられるピットをもつ。主柱と思われる柱穴は2本検出されたがそれ以外の柱穴は確認できなかった。

前回の調査で検出された住居跡は，方形の平面形に張り出し部を備えた住居跡を「方形住居跡」，基本的には円形住居跡で検出されるが，多角形の中央部にそれぞれベット状の張り出し部を備え，間仕切りをもった花弁形住居と呼称される住居跡を「円形住居跡」とプランの形態から2つのタイプに分類している。それによると「方形住居跡」が張り出し部を含め6.1m×5.45mなのに対し，「円形住居跡」は径は約7mと「方形住居跡」より一回り大きい。今回検出された竪穴住居跡は，プランの形態では「方形住居跡」であるが，大きさは7mを超えるという特殊な例と考えられる。

出土遺物は，前回の調査に比べて土器，石器ともに少ない。土器は小片が多いが，山ノ口式の甕形土器，壺形土器が出土している。石器は，頁岩を素材としたほぼ完形品の磨製石剣が１本，磨製石鏃の未製品１点，砥石１点，打製石斧１点，石皿１点が出土した。このほかに，加工痕等はみられないが，２cm～3.5cmの白っぽい石英の丸い小石５個が出土した。前回の調査では，住居跡１号から磨製石鏃の未製品が５点出土している。また，王子遺跡では，磨製石鏃は総数27軒中，12軒の住居跡から出土している。

円形周溝は，前回検出された円形周溝の北側約10mの位置に検出された。直径2.9mを測る真円の平面形を呈する。周溝の幅は30～40cm，周溝の深さは20～30cmを測る。前回の調査で検出されたものより一回り小さい。出土遺物も山ノ口式土器の土器片が数点出土したのみで，前回と同じように周溝が囲む内部からは埋葬施設など痕跡は検出されず，また周溝内からも祭祀に関係するような遺物の出土や出土状態は確認されなかった。円形周溝遺構の性格は不明である。

出土遺物

包含層が削平されている部分が多いため，出土遺物は少ない。出土土器は，甕形土器と壺形土器が出土している。甕形土器は口縁部が逆「L」字状に外反するタイプと，「く」字状に外反するタイプの二者がみられる。「く」字状に外反するタイプが主体を占める。

壺形土器は，大きく外反して比較的長い口縁部をつくるタイプと，直線的に立ち上がり比較的短い口縁部をつくるタイプがある。石器は石鏃が１点出土した。

中・近世について

近世の遺構は，近世墓１基，古（旧）道２条，溝状遺構４条が検出された。古（旧）道，溝状遺構の中には，前回の調査，または，鹿屋市教育委員会の調査で検出されたものの延長部分と考えられるものもある。近世墓の出土遺物に古銭が６枚出土した。４枚と２枚がくっついており全部の古銭を調べることができなかったが，X線撮影により，洪武通宝の模鋳銭（加治木銭）と隷書体の元豊通宝が確認できた。

1636年に寛永通宝が初鋳されたが，1670年に宋銭や明銭の使用禁止令がでたことからも宋銭等が使用されていたと考えられる。寛永通宝が確認されていないので断言はできないが，出土した古銭から17世紀中頃の墓であると考えられる。（下関市立大学　櫻木　晋一教授に御教示頂いた。）

〈引用・参考文献〉

・「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（48）概要編　中ノ原遺跡Ⅰ，Ⅱ　中ノ丸遺跡」1989
・「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34）　王子遺跡」1985
・「鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（74）　川の上・中ノ丸遺跡」2004

第XI章　遺跡の周辺状況

第1節　中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡とその周辺遺跡

中ノ原遺跡の広がりは，今回調査した地点の北側約300mの間に縄文土器がまんべんなく出土していることから，北側を中心に広がることが考えられ，並松遺跡やコラケバッケ遺跡も一連の遺跡に属することが想定される。さらに，今回の調査区の約200m南側の台地縁辺の畑から，石斧4本が採集された。(第66図　302～305) 4本がまとまって発見されていることから，石斧デポであると考えられる。中ノ原遺跡南側についても遺跡が広がるものと考えられる。

中ノ丸遺跡は，この台地東南部隅に広がる弥生中期末～後期初頭の集落遺跡と近世の遺構を備えた遺跡が重複して広がっている。鹿屋市の調査で遺跡北側に近世の掘立柱建物跡や鍛冶炉跡，弥生時代と考えられる竪穴住居跡も検出されている。バイパスを中心に台地縁辺付近に弥生時代の集落，近世の遺構群が広がると考えられる。今回の調査で，さらに，縄文時代早期の遺構・遺物も検出された。

第2節　中ノ原遺跡周辺より採集の石器について（第66図　302～305）

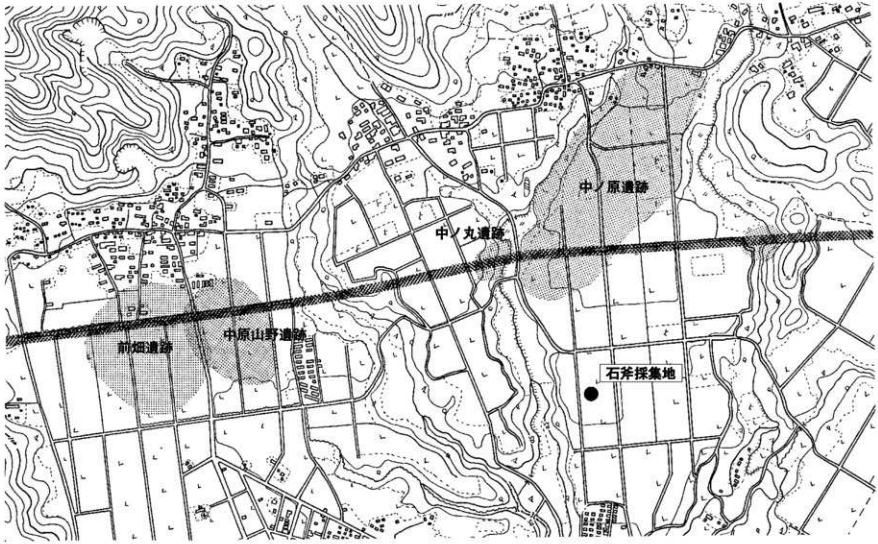
本採集品は，扁平打製石斧（土掘り具）と呼ばれている打製石器である。中ノ原遺跡より南西方向の位置にある畑地で，内田氏が薩摩芋の保存用芋穴を掘削中に302～305が採集され，同じ場所からまとまって（デポ）発見されている。

302は，扁平な頁岩を素材として用い，大小の剥離により調整され，全長29cm，最大幅10cm，最大厚2cmを測る扁平で大形の打製石斧である。その形状は，隅丸長方形状を呈し，片側の側縁中央部がわずかにくぼむが，反対の側縁はほぼ直線に仕上げられている。刃部は，使用によるためか大きく刃こぼれや磨滅が観察でき，上面の頭部側には装着によるためか磨滅痕を認める。

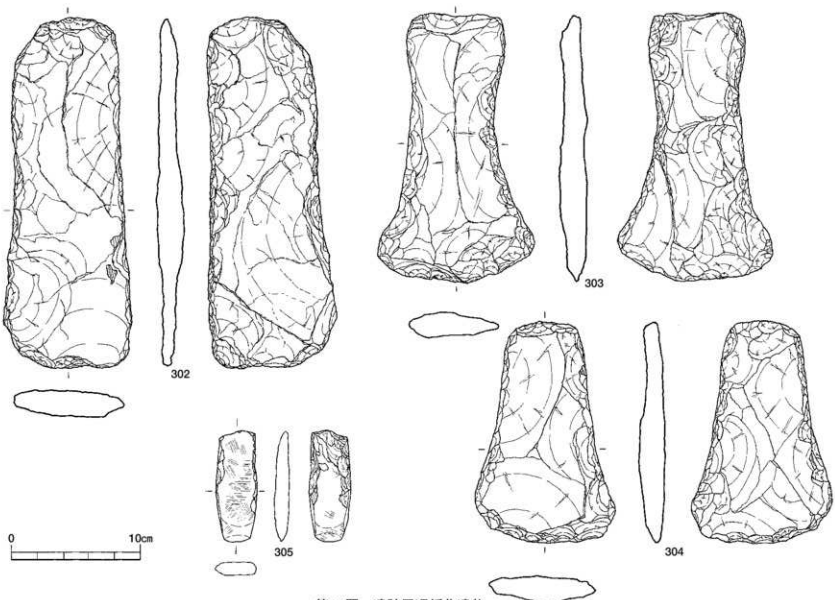
303は，扁平な頁岩を素材として用い，大きい剥離痕を残し，周縁より大小の剥離により調整され，全長21.1cm，最大幅15.5cm，最大厚2.3cmを測る扁平で大形の打製石斧である。その形状は，頭部が一部欠損しているが，分銅状の形状を呈し，両側縁の中央部がくぼんでいる。刃部は，使用によるためか刃縁の一部の刃こぼれや磨滅が観察でき，上面の頭部は何らかの力が加わったのか敲剥ぎの痕跡を認める。

304は，扁平な頁岩を素材として用い，大きい剥離痕を残し，周縁より大小の剥離により調整され，全長17.7cm，最大幅10.9cm，最大厚2cmを測る扁平で大形の打製石斧である。その形状は，バチ状の形状を呈し，両側縁の中央部がくぼんでいる。刃部は，刃縁の幅が広く，使用によるためか刃縁の一部の刃こぼれや磨滅が観察できる。

305は，扁平な蛇紋岩を素材として用いた小形で扁平な磨製石斧で，胴部側縁の一部から頭部をはじめ両面の一部が欠損している。全長8.7cm，最大幅3.1cm，最大厚1.1cmを測る石斧で，両面ともにその一部に研磨による擦痕が観察できる。



第65図　遺跡の周辺状況図



第66図　遺跡周辺採集遺物

鹿児島県中ノ原遺跡の^{14}C年代測定

国立歴史民俗博物館・炭素14年代測定グループ

概要

鹿児島県中ノ原遺跡から出土した資料について加速器を用いた年代測定を行ったので，その結果を報告する。試料の採取は，鹿児島県埋蔵文化財センターにおいて，藤尾慎一郎とともに，小林謙一が，他の遺跡とともに採取した。資料の出土層位や大凡の所属土器型式は，鹿児島県埋蔵文化財センターの見解によるものである。

試料の前処理は，炭素年代測定グループが行い，測定は㈱パレオ・ラボ社によるものである。測定結果は計測値（補正）とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また，その根拠となった較正曲線を示した。

この遺跡の年代測定の考古学的目的は，この遺跡の年代を調べることであるが，同時に中期初頭および晩期初頭の土器の実年代が推定可能な測定結果を得ることができた。

1　採取試料と炭化物の処理

中ノ原遺跡からは土器7個体から採取した。前処理した結果，土器付着物の多くは，土壌等不純物の混入が多く，炭素量が十分ではないと判断され，結果的に土器付着物2点について結果を得ることができた。

測定できた土器は，KAMB－95は以前の報告書の26図51の土器で，縄文時代前期末葉から中期初頭に位置づけられている，深浦式土器の口縁部外面の貝殻条痕文の上に付着していた煤状の炭化物である。KAMB－77は同じく90図489の土坑1出土土器で，縄文時代晩期入佐式土器の胴部外面付着物である。

試料については，補注に示す手順で試料処理を行った。(1)前処理の作業は，国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において新免歳靖，(2)燃焼と(3)グラファイト化の作業は，㈱パレオ・ラボ社に委託した。

2　測定結果と暦年較正

AMSによる^{14}C測定は，㈱パレオ・ラボ社（機関番号PLD）へ委託した。測定結果については，補注2に示す方法で，補正し，較正年代を計算した。

3　測定結果について

暦年較正年代についてみると，KAMB－95は較正年代で紀元前3635－3515年に含まれる可能性が85%で高く，前3400－3380年の可能性も5%ある。筆者らのこれまでの測定（今村ほか2004）からみると，縄文前期末から中期初の時期ととらえられる。

KAMB－77は，較正年代で紀元前1220－1050年に含まれる可能性が85%で高い。縄文晩期前葉の年代であろう。

この分析は，国立歴史民俗博物館　平成17年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（研究代表　今村峯雄），平成17年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア―炭素年代測定による高精度編年体系の構築―」（研究代表　西本豊弘）の成果である。

本稿を草するにあたり，暦年校正については今村峯雄氏のご教示を得た。本稿は，概要を西本豊弘，補注1を遠部慎が執筆した稿をもとに，小林謙一（以上国立歴史民俗博物館）が執筆した。

＜補注＞

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理に先立ち，土器付着物については，アセトンに浸け振とうし，油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として，80℃，各1時間で，希塩酸溶液（1N－HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し，さらにアルカリ溶液（NaOH，1回目0.01N，3回目以降0.1N）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は，5回行い，ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（1N－HCl 12時間）を行いアルカリ分を除いた後，純水により洗浄した（4回）。

試料の重量は，KAMB－77，95がそれぞれ，AAA処理を行った量（処理量）34.58mg，35.0mg，処理後回収した量（回収量）5.55mg，8.22mg，二酸化炭素を得るために燃焼した量（燃焼量）3.70mg，5.20mg，精製して得られた二酸化炭素の量に相当する炭素量（ガス）2.18mg，2.99mgである。燃焼時の炭素含有率が60%近くあり，不純物が少ない良好な年代測定用試料といえる。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化），真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を，500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ，真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので，ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し，二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し，水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉でおよそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり，グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後，穴径1㎜のアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

＜補注2＞

年代データの^{14}CBPという表示は，西暦1950年を基点にして計算した^{14}C年代（モデル年代）であることを示す。^{14}C年代を算出する際の半減期は，5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差，68%信頼限界）である。

AMSでは，グラファイト炭素試料の^{14}C／^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには，試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C／^{12}C比により，^{14}C／^{12}C比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C／^{12}C比は，標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C／^{12}C比）に対する千分率偏差δ^{13}C（パーミル，‰）で示され，この値を－25‰に規格化して得られる^{14}C／^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C／^{12}C比から，^{14}C年代値（モデル年代）が得られる。δ^{13}C値については，加速器による測定は同位体効果補正のためであり，必ずしも^{13}C／^{12}C比を正確に反映しないこともあるため，パレオ・ラボ測定分については，加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線IntCal04（^{14}C年代を暦年代に修正するためのデータベース，2004年版）(Reimer.P et al 2004）と比較することによって暦年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため，統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち，測定値と較正曲線

データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより，暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは，歴博で独自に開発したプログラムRHcal（OxCal Programを応用した方法）を用いる。統計誤差は２標準偏差に相当する，95%信頼限界で計算した。年代は，較正された西暦（cal BC）で示す。（）内は推定確率である。図は，各試料の暦年較正の確率分布である。

＜参考文献＞

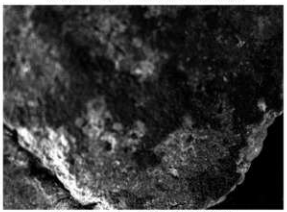
今村峯雄2004『課題番号13308009基盤研究（A・1）（一般）縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』（代表今村峯雄）

Reimer, Paula J. et al　2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP *Radiocarbon* 46(3), 1029-1058(30).

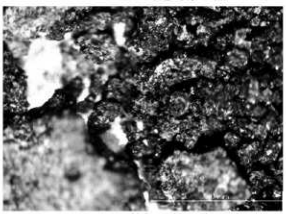
KAMB－95　測定対象土器

KAMB－95　口縁外面付着状況

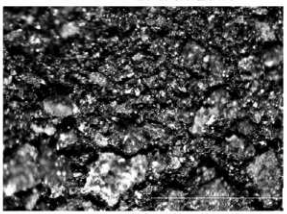
KAMB－77　測定対象土器



KAMB－77　胴外面付着状況



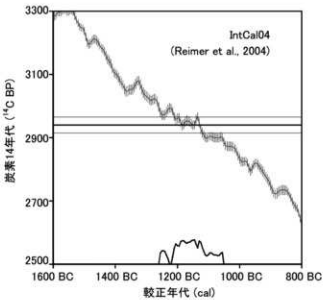
KAMB－95　前処理前　約35倍



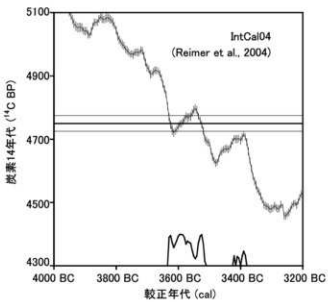
KAMB－77　前処理前　約35倍

図　測定試料の暦年較正確率密度分布

中央値はその左右で確率密度が等しくなる値、最頻値はもっとも高い確率を与える値であるが、
どちらも統計学上の数値であり、試料の年代として推奨される値とは限らない。



試料番号	KAMB-77			
機関番号	PLD-4645			
炭素14年代	2940	± 25	14C BP	
較正年代	1260 cal BC	–	1230 cal BC	10.3%
	1220 cal BC	–	1050 cal BC	85.2%
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
				95.4%
中央値	1165 cal BC			
最頻値	1145 cal BC			



試料番号	KAMB-95			
機関番号	PLD-4649			
炭素14年代	4750	± 25	14C BP	
較正年代	3635 cal BC	–	3515 cal BC	85.8%
	3420 cal BC	–	3415 cal BC	1.5%
	3415 cal BC	–	3400 cal BC	2.7%
	3400 cal BC	–	3380 cal BC	5.5%
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
	–	–		–
				95.4%
中央値	3580 cal BC			
最頻値	3595 cal BC			

表3　測定結果と暦年較正年代

試料番号	測定機関番号	炭素年代 δ13C‰	14C BP（補正値）	暦年較正cal BC	確率密度（%）
KAMB－95	PLD－4649	(－26.3±0.1)	4750±25	3635－3515	85.8
				3420－3415	1.5
				3415－3400	2.7
				3400－3380	5.5
KAMB－77	PLD－4645	(－26.8±0.1)	2940±25	1260－1230	10.3
				1220－1050	85.2

図　　版

中ノ原遺跡近景（平成16年）

中ノ原遺跡近景（昭和60年）

図版 2

竪穴住居跡

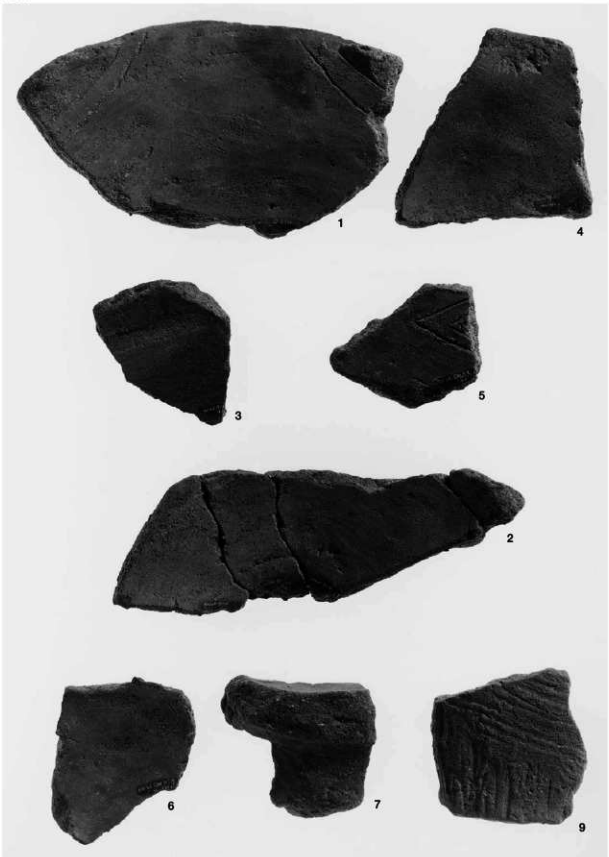
床面検出状況

竪穴住居内炉跡

竪穴住居跡遺物出土状況（1）

竪穴住居跡遺物出土状況（2）

図版 4



竪穴住居跡出土土器（1）

竪穴住居跡出土土器（2）

XII 類土器

図版 6

Ⅰ類土器

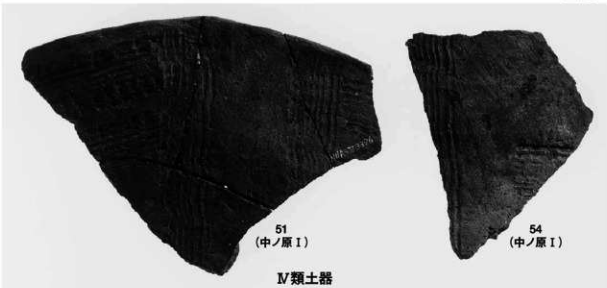
Ⅳ類土器

Ⅸ類土器

Ⅺ類土器（1）

Ⅺ類土器（2）

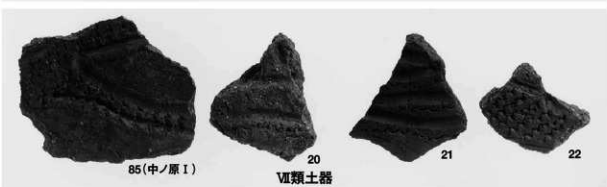
ⅩⅣ類土器



Ⅳ類土器

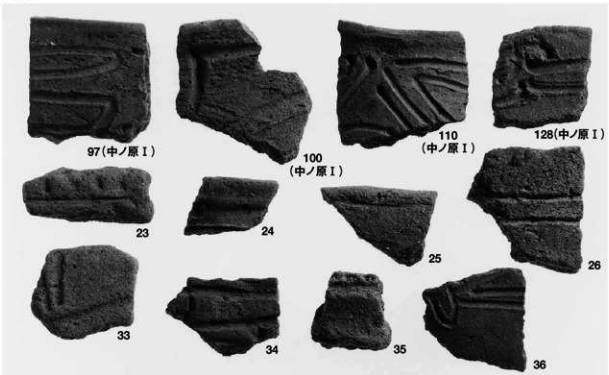
Ⅴ類土器

Ⅵ類土器

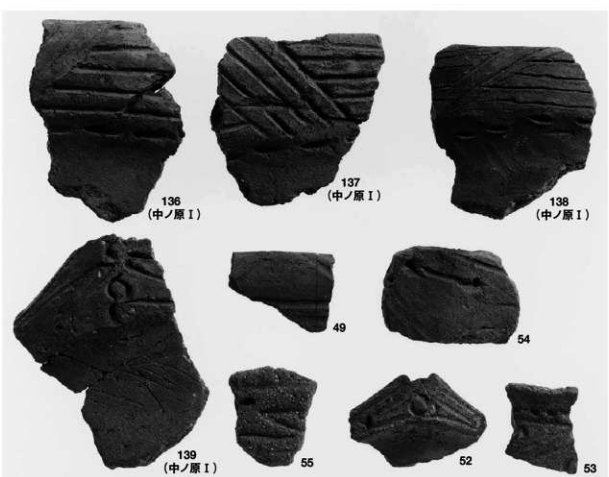


Ⅶ類土器

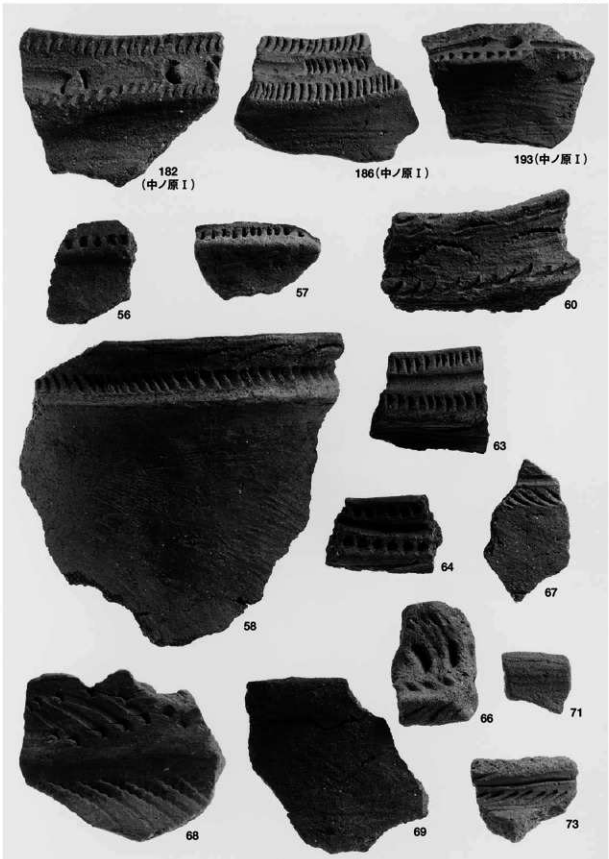
図版 8



Ⅷ類土器

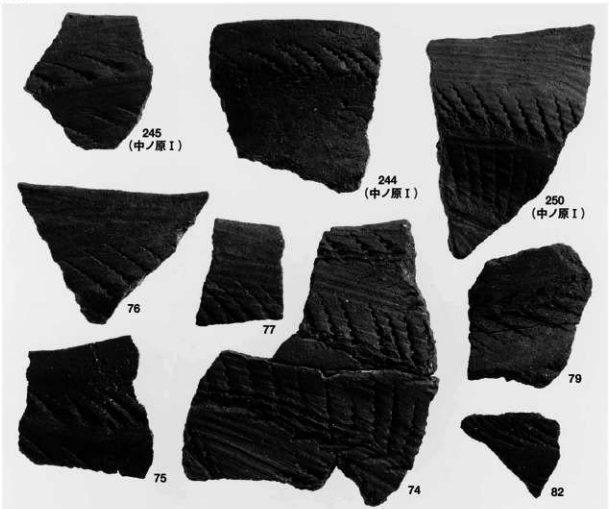


Ⅸ類土器

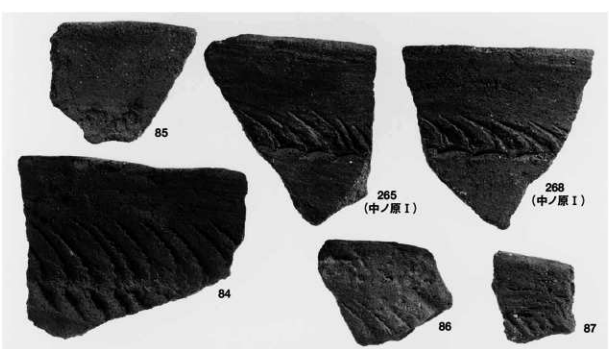


X類土器

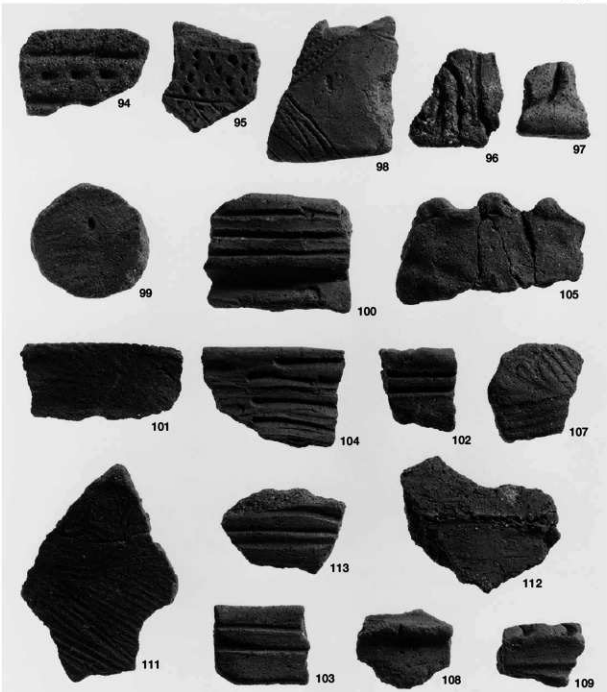
図版10



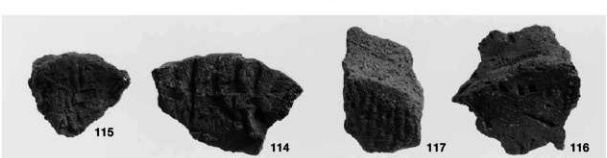
XI－A類土器



XI－B類土器

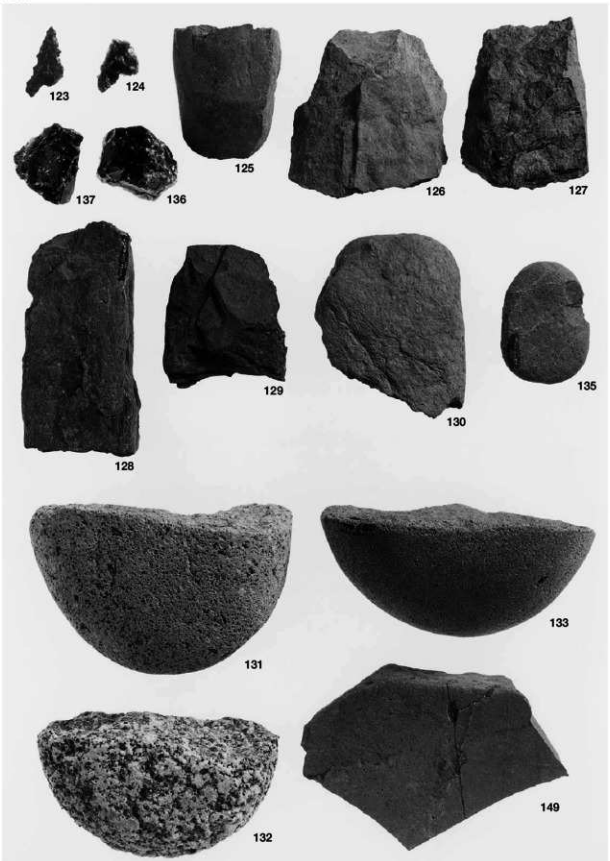


XII 類土器

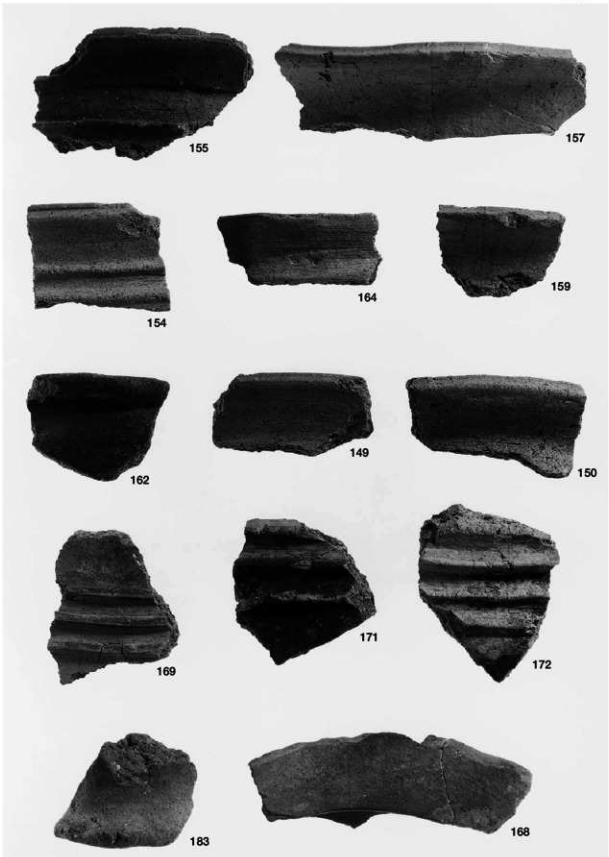


XIII 類土器

図版12

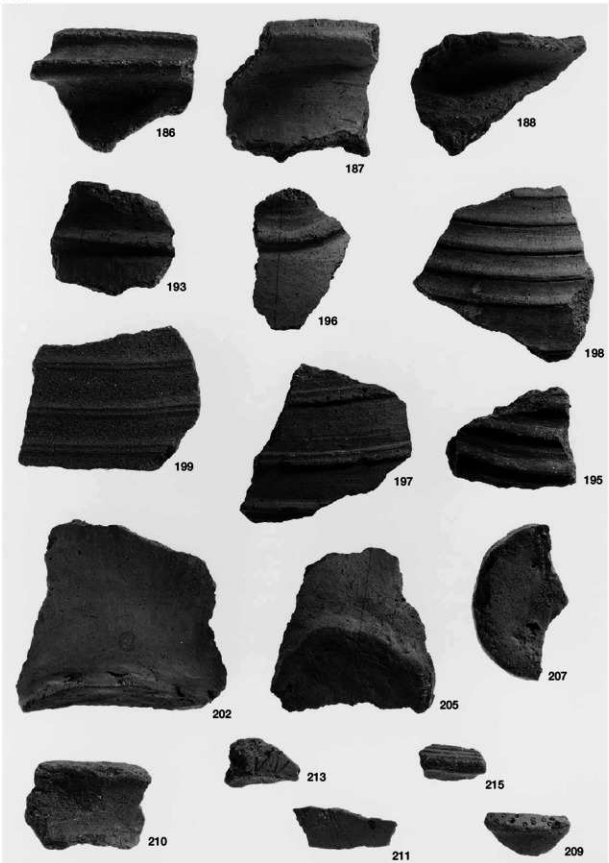


石器



弥生土器（1）

図版14


186
187
188
193
196
198
199
197
195
202
205
207
213
215
210
211
209

弥生土器（2）

中ノ丸遺跡近景（平成16年）

中ノ丸遺跡近景（昭和61年）

図版16

集石検出状況

土抗検出状況

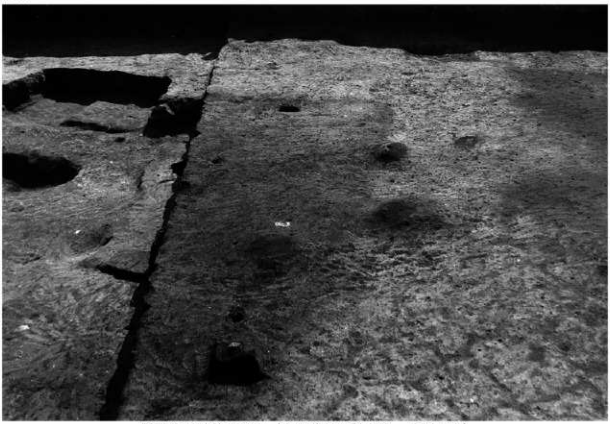
磨製石鏃出土状況

穴石出土状況

竪穴住居跡検出状況

竪穴住居跡完掘状況（北側から）

図版18



竪穴住居跡検出状況（進入路付け替え後，北側より）

竪穴住居跡内石剣出土状況

円形周溝状遺構検出状況

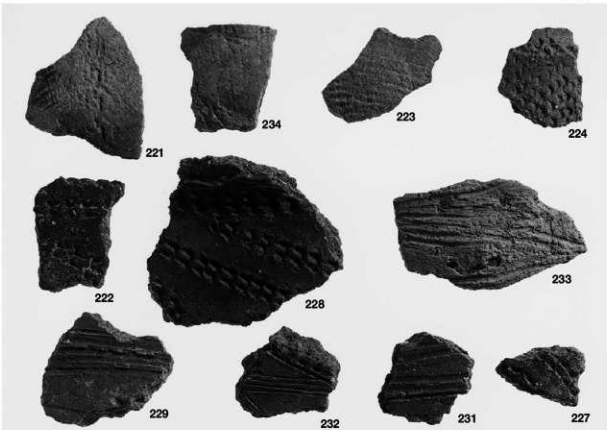
円形周溝状遺構完掘状況

図版20

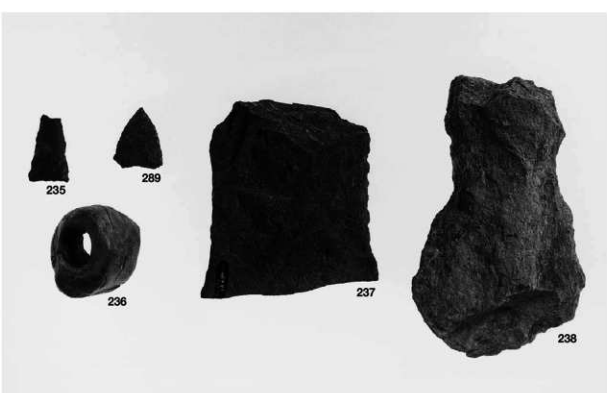
古道跡

近世墓

近世墓内出土遺物（古銭・釘）

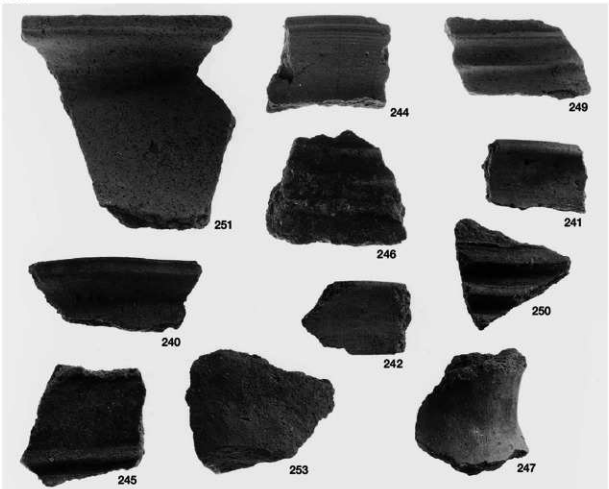


縄文土器

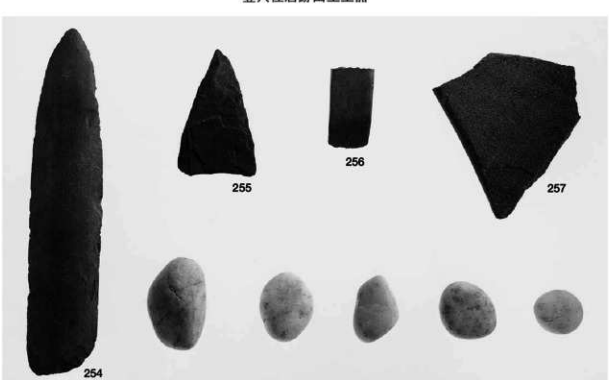


石器

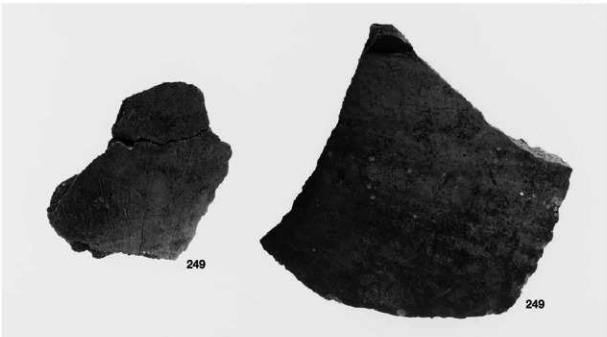
図版22



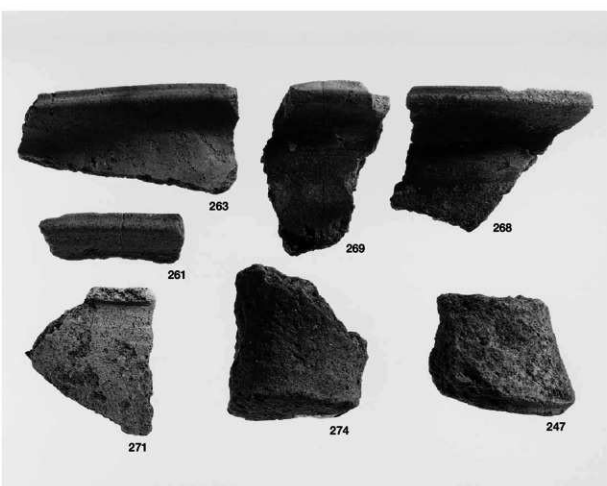
竪穴住居跡出土土器



竪穴住居跡出土石器

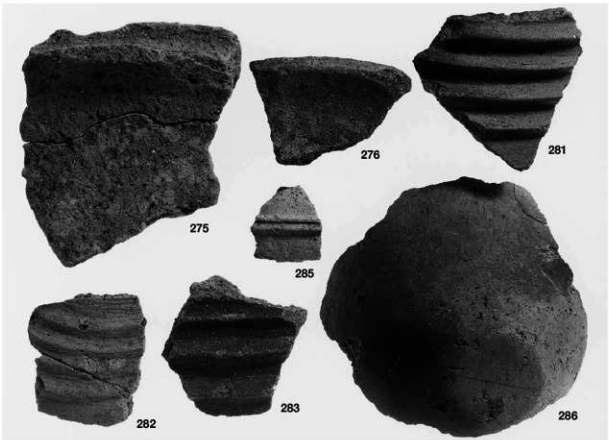


円形周溝状遺構出土土器



弥生土器（1）

図版24



弥生土器（2）

採集品

あ と が き

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴い，最初の発掘調査が行われたのが昭和60年，今からほんの20年前のことである。発掘調査準備のため，当時の発掘調査の様子を写真で見て驚いた。写真の中の「中ノ原・中ノ丸遺跡」は，一面畑地で，牛による耕作が行われているのである。当時としても，牛による耕作は珍しい風景となっていたために，調査担当者が写真に残したということであったが，現在のこの場所が，写真の中に残る風景と同じ場所であるとは，信じられない変わりようであった。

バイパスが開通してからの変化のスピードは，まさに，牛が畑を耕していたスピードと，ひっきりなしにバイパスを通過していく，自動車のスピードほどの違いがあるのかもしれない。

この地に暮らした縄文時代・弥生時代の人々の時間は，どれくらいの速さで流れていたのであろうか。

当時の生活を調べる資料の一つとして，今回の発掘調査が役立てることを願っています。

最後に，調査に当たり御協力いただいた国土交通省大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会並びに発掘調査・報告書作成に従事していただいた作業員の方々に心より感謝申し上げます。

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（102）
一般国道鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財報告書（Ⅸ）

中ノ原遺跡
中ノ丸遺跡

発行年月日　2006年３月
発　　行　鹿児島県埋蔵文化財センター
〒899−4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
☎0995−48−5811
印　　刷　㈱イースト朝日
〒891−0122　鹿児島県鹿児島市南栄３丁目30−７
☎099−266−5522